

書き下ろし&読み切り文芸マガジン

signal

vol1. 出会い

「きみの花飾り」

大江棗

「王子と私とご主人様」

広野未沙

「人形姫と泥棒悪魔」

貴水玲

「くるくる」

水島朱音

「世話焼き魔—メイド」

番棚葵

「審判部な面々」

諸星崇

企画・監修 榎本秋

株式会社榎本事務所

はじめに

書き下ろし&読みきり文芸マガジン「s i g n a l」を本号をもって創刊し、半年間全六号を毎月刊行する。

本マガジンは、私、榎本秋と親交ある若手作家・番棚葵、榎本事務所所属作家の諸星崇の両名の賛同のもと、両名の作品に加えて榎本事務所所属の四名の作家の卵たちの作品の、合計六作品を収録している。

基本的に毎号テーマに沿って各人が自分の世界観、キャラクターで緩やかなつながりのもとに執筆する読み切り作品であり、各号ごとにどこからよんでもいいように、またテーマアンソロジーとしても楽しめるように留意して企画した（ただし、一部は作品としての面白さを優先してシリーズものの色の強い作品も掲載している）。

さらに、普段から榎本事務所制作の本でお世話になっているアミューズメントメディア総合学院大阪校キャラクターデザイン学科の全面協力を得て、毎月イラストコンペを開催していただき、その上位作品を収録するという試みもさせていただいている。

本書をひとつの踏み切り板として各参加作家、イラストレーターが新たな展開を手にすることを願ってやまない。

なお、昨今の電子書籍の隆盛なども鑑み、本マガジンは、榎本事務所HPで配布しているPDFファイルを改変しないことを条件に配布、複製は自由とする。ただし、有償での配布は印刷も含めて不許可とする。それでは、楽しんでいただけると幸いである。

また、感想やご意見など、特設ページのメールフォームなどご利用の上でいただけると大変うれしい。

榎本秋

目次

はじめに.....1

扉絵.....3

イラスト提供 新月竜
 雛咲瑠遮
 伊藤由希
 (掲載順)

きみの花飾り 入江棗.....6

人形姫と泥棒悪魔 貴水玲.....17

世話焼き魔ーメイド 番棚葵.....26

王子と私とご主人様 広野未沙.....35

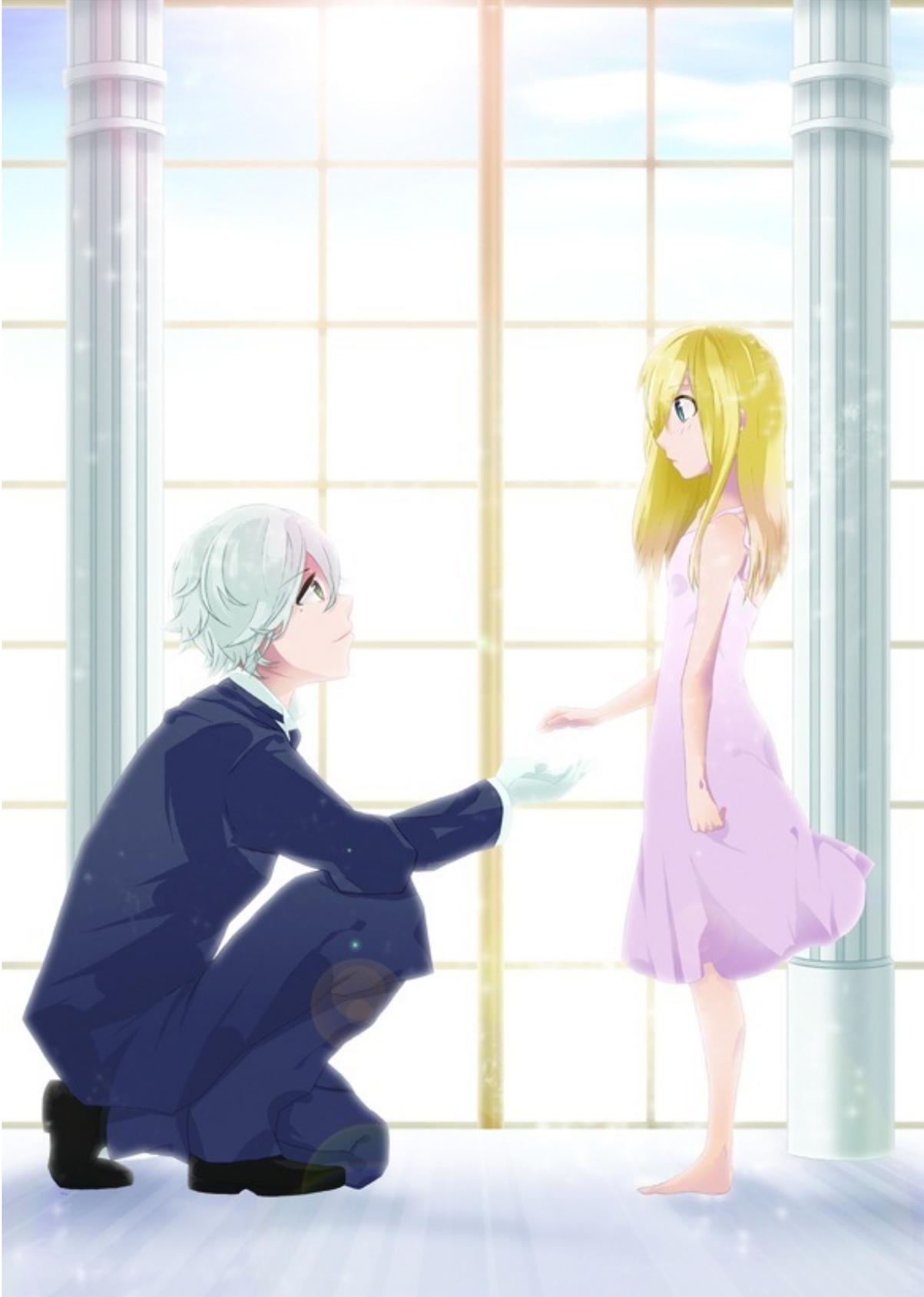
くるくる 水島朱音.....44

審判部の面々 諸星崇.....52

解説60







きみの花飾り

入江棗

1、偽造アイデンティティー

冗談じゃない。

『投票の結果、××中等学校今期生徒会長は二年一組高瀬咲さんに決定しました』

今すぐこの場で叫びたい。冗談じゃない！

「生徒会長？ お前が？」

目の前に座る双葉姉が食パンをかじったまま目を丸くした。

着用しなくてはいけないらしい高校指定のリボンはまだ引っ掛けてあるだけの状態。ショートカットの黒髪にはまだ寝癖が残っている。

「よくやる気になったなあ」

「なりたくてなったわけじゃない」

「だよな。人前に出るとか絶対に嫌がるもんな」

双葉姉は表向き同情してくれているようだったが、顔は半笑いだった。

絶対面白がっている。なんて姉だ。

「でもさ、リハビリみたいなもんになるんじゃないの」

「双葉、今日委員会の当番とか言ってなかった？」

双葉姉の言葉に重なってキッチンから声が飛んできた。香穂姉だ。おかげで双葉姉が何を言っているのかよく分からなかった。

時計を見ると七時を過ぎていた。普段ならまだ余裕の時間、だけど。

「うっそやばい。香穂姉ちゃんお弁当は！？」

「準備できてるから。歯磨いて寝癖直してきなさい」

キッチンに居る香穂姉が全部を言い終わる前に双葉姉は大きな音を立てながら洗面所に駆け込んでいった。目の前の皿はすべり込みで空にしたようだ。

「咲、ヨーグルト食べる？」

「いらない。食欲ないや」

いつもならジャムをかけて食べるのが楽しみなのに、今日は胃が受け付けそうになかった。放課後にある各委員長との顔合わせのことを考えると胃どころか全身の調子が悪くなってくる。

廊下とリビングを繋ぐドアが開け放たれたかと思うと、双葉姉が颯爽とキッチンカウンターに置いていたお弁当をかっさらっていった。そして再び廊下へ。二秒後、「いってくるー！」と言う大きな声が響いた。私と香穂姉は示し合わせてもいないのに同時に「いってらっしゃい」と返す。寝癖、まだちょっと直ってなかったな。

自分の髪はどうだろう。背中の真ん中辺りまで伸びた髪を撫でてみた。酷く跳ねているところはなさそうだ。

「調子悪いなら休んでいいのよ？」

双葉姉が座っていた席の隣に香穂姉が座った。香穂姉が通う大学はここから目と鼻の先の位置にあるので、香穂姉の朝はいつものんびり。

そんな香穂姉のまったり具合に便乗したいところだけれど、心种的にそうもいかない。

「それじゃズル休みになっちゃうから行く。あんな奴ら、ピーマンとかジャガイモとかカボチャだと思えばいいんだわ。人間なのがいけないのよ。喋る野菜よあいつらは」

「それで人嫌いが直ればいいんだけど」

残り三分の一ほどの紅茶を一気に飲み干して、椅子を思い切り引きながら立ち上がった。

「ごちそうさまでした」

「まるで戦場にでも行くみたいな顔してるわよ」

私と双葉姉に朝ごはんを食べさせた香穂姉はこれから優雅に食事を摂る。

おかげで「戦場」という言葉に全くの緊張感がなかった。

本当に戦場なら良かったのに。

なにも言わず・顔を合わせる必要もなく、相手を倒せるから。

この前の選挙で生徒全員に顔が割れたからか、校内のどこに居ても誰かしらの視線を浴びせられた。仲がいいわけでもないクラスメイトからは立て続けに激励をいただき、ホームルームでやってきた担任にまで話題にされる始末。

それだけならまだいい。耐えられる。

昼休みは一人になろうと、誰も居ない屋上へ行こうとした。その矢先。

「あ、会長さんじゃん」

階段の踊り場で知らない奴から声をかけられた。最悪すぎる。

シャツの襟についている学年章の色から同じ二年だと分かった。ニヤニヤして見ていると気分が悪くなる。

周りにも同じような奴らが集まっていた。いわゆるお調子者のグループか。

「俺ら高瀬さんに投票したんだ」

含みをもったような言い方のせいで、「感謝してよ」と言っているように聞こえた。

申し訳ないが、なんとことしてくれたと糾弾してやりたい。

「これから生徒総会とか楽しみじゃね？」

「会長の挨拶？ とか長話でも全然いいから。むしろ歓迎」

周りに居た奴らも好き放題言い始めた。逃げたい。

頭の中で言い聞かせた。

笑え。

「投票してくれてありがとう。長話、はどうなるか分からないけど頑張るね」

言葉は滑らかに出てきた。顔の筋肉もきちんと笑顔を浮かべさせられていると思う。

クラスメイトや先生と話す時のように、丁寧に印象よく多少控えめに。

誰も不快に思わない人間になりきる。

「じゃあまた」

これなら教室の方がまだ平和かもしれないと思って引き返そうとした。が、

「ええ？ まだいいじゃん。俺ら高瀬さんともっと話したいんだけど」

腕を掴まれた。

全身に悪寒が走る。

「ごめん、ちょっと用事思い出しちゃって」

さりげなく振りほどこうとしたが、思ったよりも力が入っていてどうにもできない。

「用事ってなに？ 生徒会の雑用とか？ だったら俺らも手伝うよ」

「きむらあ、勝手に巻き込むなよー。別にいいけど」

友人まで同調してしまった。こいつ木村っていうのか、なんて情報はどうでもよくて。

頼むから空気読んでよ。というかこれじゃ性質の悪いナンパじゃない。

平手でもかまして逃げたい。せめて「止めて」って言いたい。

けど言葉が出てこない。さっきはペラペラ出てきたのに。

「あ、居た居た。高瀬さん」

上の方から男子の声が聞こえた。見上げると階段に誰か居る。

「教室行ったら居なかったらどこ行ったのかと思った」

階段を降りてこっちに向かってきた。無駄に整った、知らない顔。二年だ。

髪の色が薄い。地毛なのかな。そうじゃなかったら校則違反だ。

「木村、放してやれって。それ下手したらセクハラ」

見知らぬ人は掴まれている腕を指差した。木村は慌てて腕を解放する。

助けられた？

「セクハラってそんなじゃねえし」

「まあでも男には世知辛い世の中だからさ。これが高瀬さんじゃなかったらぎゃーぎゃー騒がれてたかもしれないだろ？」

私もできれば騒ぎたい。この隙に退散したかったけど、助けてくれたお礼もしないで離れるわけにもいかない。

掴まれた腕が少し痛かった。心臓が嫌に高鳴っている。

「高瀬さんごめんな。セクハラとかそんなつもり全然ないから」

騒がれて困るなら最初からしなきゃいいのに。

「そんなこと思ってないよ。気にしないで」

言いながら一步後ろに下がり、離れる準備をした。見知らぬ人に一瞬だけ視線を送る。

見知らぬ人が「用事がある」という体裁で助けてくれたので、一緒に離れないと不自然だ。

視線に気づいてくれたのか、見知らぬ人も木村から離れ、私に「行こっか」と声をかけて階段を降りて行った。私は木村たちに「それじゃ」と小さく呟いて見知らぬ人に付いて行く。木村たちが居た階より一階下に降りたところで後ろを見て、付いて来ていないことを確認して立ち止まった。

「あの、ありがとうございます」

助けて貰って申し訳ないけれど、この人とも長居したいわけではない。

人は家族以外平等に苦手。

私の苦手意識が見知らぬ人に通じるわけもなく、彼はこちらを振り返って微笑を浮かべた。

「あいつら同じクラスなんだけど調子に乗りやすくて。あと、用事があるのは本当だし」

「え？」

なんだろう、どこかの委員会の人なんだろうか。

「まずさ、俺のこと知ってる？」

もう一度「え」と言いそうになったのを何とか抑えた。

ここで知りませんなんて言ったら怒られる。けどいい回答例が思いつかない。

小学校みたいに名札があればいいのに。

「まあいいや。今日の委員会顔合わせ、場所が第二会議室に変わったから。それだけ」

見知らぬ人はそれだけ言って階段を降りて行った。

やはりどこかの委員会の人なんだろうか。それなら放課後の顔合わせで名前が分かるからそれでいいか。

なんて甘いことを考えていた。

とにかくその時は掴まれた腕を洗いたくて仕方がなかったから。

昔を思い出して気持ち悪かった。

委員長顔合わせはなにも委員長たちだけが集まるわけじゃない。

そんなことは自分の身をもってして分かっていたはずなのに、何故この考えに至らなかったのか。

見知らぬ人は私の隣の席に座っていた。

それはつまり対面に座っている委員長たちとは違う立場ということであって。

「副会長の相馬巧です。よろしくお願いします」

同じ生徒会ということは、一度顔を合わせていることになるわけで。

選挙の日、生徒会メンバー全員が壇上に上がって一言挨拶をするというイジメ以外の何物でもないイベントがあったから。

挨拶の後に舞台裏でメンバーたちと軽く言葉を交わしたけど、その時は余裕がなくて顔なんて覚えていられなかった。名前も聞いたと思うけど記憶にない。

微かにそういえば髪色が薄い人がいたかも、と思い出せる程度。

これはちょっとまずい気がする。

「会長の高瀬咲です。みなさんには色々と力を借りることになると思いますので、よろしくお願いします」

見知らぬ人＝相馬くんのフォローは後でなんとかするとして、今はさっさとこの顔合わせを終わらせたかった。三十人強のクラスメイトと同じ空間にいることすらできることなら避けたいというのに、これ以上人が集まる場所に居たくない。

こんな思いを半年以上続けたいといけないなんて、耐えられるのか。

早く家に帰りたい。帰って双葉姉とゲームしたい。香穂姉のご飯が食べたい。

私の居場所はあそこだけでいい。

顔合わせが終わったのに生徒会顧問の先生に捕まったせいで、自由になったのは六時を少し過ぎただった。

置いたままの鞆を取りに行くために教室へ向かう。外はすっかり暗くなっていた。廊下の電気はあまり明るくなくて心もとない。

あと半月ほどで終わる九月が過ぎたら衣替えの時期になる。受験はどうしようか、とか考え始めないといけない。香穂姉はああ見えてしっかりすべきところには厳しい。

教室にはもちろん誰も居らず、電気も消されていた。すぐにスイッチを入れる。早くここから出たい。

机の引き出しの中に忘れ物はないか確かめ、鞆を持って帰ろうとした時、離れたところから物音が聞こえた。

「うひゃ！」

「あ、変な声」

びっくりして教室の入り口付近に目をやると、戸に寄りかかった相馬くんが居た。四組の人ら

しいのに、何でこんな所に。

昼休みの件で何か言われるのだろうか。一人だと思って気を抜いていたから余計に焦ってしまう。

「どうしたの？　うちのクラスに何か用？」

的外れだと思いつつも核心から逃げるような質問をした。

「クラスというか、まあ言わないでも分かると思うんだけどさ」

教室の中に入って来た。硬直してしまう。

一步一步確実に近付いてくる。逃げたい。けど逃げたら後々もっと面倒なことになる。

今まで通り適当にあしらえるはず。そう言い聞かせているのに身体が楽にならない。

「顔はこの際いいとするよ。俺も書記の一年とか覚えてなかったし。

でもさあ、名前はどうかと思うんだよ。よく並んでいるのに」

顔が、三十センチよりも手前に居た。近い、来ないで。

並んでるって何。

意味が分からない。

相馬巧なんて名前……あ。

「二番の人？」

思わず相馬くんを指差してしまった

相馬巧って、定期テストの順位表でいつも二番に居る——ってこの言い方じゃ。

「そう。いつも高瀬さんの一つ下に居る二番の人」

笑ってるけど目が死んでる。怒らせた。

「え、と。ごめんなさい。人の名前覚えるのあまり得意じゃなくて」

「毎回学年一位で頭いいのに？」

「暗記は苦手なの」

「この前の歴史、満点だって聞いたけど」

何で人の点数を知っているんだ。教科ごとの点数までは公表されないのに。

「急には出てこなくて。怒らせたなら謝るわ。ごめんなさい」

いくらでも謝るから離れて。

他人にここまで近付くなんて、木村もこいつもどうかしてる。

「まあ名前なんかどうでもいいんだけどさ。今日覚えてもらったわけだし。それよりも頑張るなあと思って」

顔が離れていった。心の底からほっとする。顔に出ていないだろうか。

それよりも、頑張るって。

こちらに背中を向けた相馬くんは入ってきた入り口に向かって歩き出した。

「今日もゲスみたいな奴ら相手に能面みたいな笑顔浮かべて面白かったよ。もう少し粘って見物しても良かったけど、あれ以上昼休みを潰されるのも癪だったし」

瞬時に意味を汲み取ることができなかった。

三コンマくらい考えて、導き出した答えは『最初から見ていた』。

相馬くんは廊下に出ようとする瞬間、首だけこちらに向けてきた。

「毎度お疲れ様、猫かぶり」

こちらを向いた顔には、泣く子も黙りそうな邪悪な微笑が貼り付いていた。

「なんなのあいつ！ 名前覚えてなかったのがそんなに腹立ったわけ！？ 自己主張が激しいのよ！」

ソファに備え付いているクッションを何度叩いてもイライラは収まらなかった。

あんなのが副会長だなんて、半年以上付き合わなきゃいけないだなんて。

「ていうか自分も猫かぶりじゃない！ 棚上げ野郎！」

「咲、クッションに罪はないからそろそろ止めろ」

「咲が毎回八つ当たりを使うからボロボロになっちゃったわ」

ソファの向こう側にあるテーブルに頬杖をついている双葉姉と夕飯を並べている香穂姉に宥められる。

これが私。

本心なんて家でしか出さない。

だって世界で信用できる人なんて、家族だけなもの。

「夕飯にするからこっちいらっしやい」

香穂姉に呼ばれてさっきまで酷い目に合わせていたクッションを元あった場所に戻した。

少し離れたここからでもいい匂いがする。今日はビーフシチューだ。

香穂姉の作るシチューはお肉が柔らかくて本当においしい。

イライラが半減した。

「バケットあるけどガーリックトーストにする？」

椅子に座ると目の前には湯気が立ったシチューが置かれていた。思わずじっと見てしまう。

「する」

「食べる」

シチューを見ながら香穂姉の質問に答えると、双葉姉とほぼ同時だった。よくあること。

「冷めちゃうから先食べてなさい」

香穂姉は机に置いていたバケットを持ってキッチンに戻っていった。

お言葉に甘えて食べることにする。叫んでお腹が空いていた。

双葉姉は香穂姉に言われる前から食べ始めている。

「とりあえずあれだな、香穂姉」

スプーンを手で回しながら、双葉姉が改まったように香穂姉を呼んだ。

背中を向けていた香穂姉はバケットを切っていたナイフを持ったままこちらを向いて、

「「木村は叩きのめす」」

双葉姉と恐ろしい発言をハモらせた。

「香穂姉、ナイフ怖い」

「あら、叩きのめすだけだから武器は使わないわよ」

二人にはすでに事の経緯を話していた。あの時黙って聞いていた二人だったけど、やっぱり怒

っていたようだ。

この二人、やる時はやる。今度の体育祭へ来る二人に木村が葬られないことを祈った。身内を犯罪者にはしたくない。

「まあ木村は置いといて。お前の本性見抜いた奴なんて初めてじゃん。相馬だっけ？」

双葉姉はシチューをどんどん口に入れていく。

私も一口食べた。にんじんが柔らかくておいしい。

「名前も聞きたくない」

「いいじゃん。学校でも本音言える奴ができたと思えば。普段のストレスも少しは解消されるだろうし」

「嫌よ、あんな性格悪そうな奴」

「お前に言われちゃ終わりだと思うけどな」

台所の方からオーブンのチン、という音が聞こえてきた。ガーリックのいい匂いがしてくる。再び跳ね上がっていたイライラ、半減。

「何言われたのか分からないフリする。クラス違うからそこまで顔を合わせるわけじゃないだろうし。半年ちょっとの辛抱よ」

これ以上食卓であいつの話をしたくなく、シチューを間隔なく食べていった。

双葉姉もそれで察してくれたのか、話題をバイト先のことに切り替える。

ガーリックトーストを持った香穂姉もテーブルに着いて三人の和気あいあいとした食事が始まった。

二人には甘やかされていると分かってる。末っ子根性丸出しだと。

もし二人と離れる日が来たらどうしようと今から怖くなる。

私が私でいられるのはここしかないのに。

生徒会といってもそこまで集まったり仕事をしたりすることはないだろう。体育祭や文化祭の進行を考えたりする裏方くらいかと思ったら、甘かった。

この学校、運動部が強くて体育祭がとても盛り上がる。ということは事前準備もそれだけ大変だったりするらしく。

体育祭まであと一ヶ月足らず、連日の会議地獄が始まった。

「最後の締めは絶対四百メートルリレーだろ！」

「三年の組体操忘れるな！」

「応援合戦の予算ってもうちょいあげられないんですか？ 衣装を凝りたいって意見が」

「全体練習の日程出ました。雨だったら翌日に延期で」

生徒会側が議題を提起する必要もなく、委員長たちの間でどんどん話が出てくる。

体育委員がはりきるのはともかく、なぜ他の委員までやる気に満ち溢れているんだろう。

去年、無駄に盛大な体育祭でびっくりしたけれど、裏がこうなら盛り上がるのも納得できる。

「会長、生徒会はなにをすればいいんですか？」

生徒会無視で話し合いが続いている隙に書記の一年が話しかけてきた。初めてだからテンションにもついていけないのだろう。私も付いていけない。

「当日はきちんと進行しているか本部でチェックするくらいだったと思う。開催前は体育委員と設営の仕切りとかかな」

自分で答えておいて気が滅入ってきた。何が楽しくて共同作業などしなくてはいけないのか。

書記と話をしながらも、気になるのは隣に居る相馬。

会議地獄も三日目になるけれど、あれ以来必要なこと以外は話しかけてこなかった。

知らぬ存ぜぬをつき通すつもりだから私からアクションを起こすことはできず、何をされるのか不安になっていることしかできない。

そうこうしている間に種目の順番は決まったらしく、今日の会議はお開きとなりそうだった。

委員長同士の話し合い（という名の激論）を聞くだけでいいのに疲れる。昨日・一昨日は家のクッションに八つ当たりする元気もなかった。

やっぱり意地でも推薦を蹴っておけば良かったと今更後悔する。

そういえば誰が会長に推薦したんだろう。本人に知らされることなく推薦が可能なシステムだから誰なのか知らない。

会議終了の音頭を取るべく立とうとしたら、隣に座っている奴が先に立ちあがった。

「ちょっと提案があるんだけど、いい？」

立ちあがった相馬に委員長全員が注目する。

相馬は人のよさそうな笑みを浮かべていた。が、私にはあの時の邪悪顔にしか見えず、悪寒が走る。

「去年最新のビデオカメラ何台か購入したじゃん。文化祭ではフル活用したけど体育祭でも使うのはどう？ もちろん競技撮影が中心だけど、一台は生徒たちにインタビューする用とかさ。卒業式に流せていいと思うんだけど」

私立であるうちの中学には「生徒自由予算」なるものがあるらしく、生徒たちに有益なものを買っていいという。それで去年はビデオカメラを買ったと生徒総会で聞いた。

競技撮影はいいけどインタビューはくだらないなと思っていると、

「いいじゃんそれ」

保健委員長が食い付く。

「競技で一位になった奴とかレコード取った奴とか、優勝したチームの代表インタビューは必須だな」

体育委員長が具体案を出す。

「競技撮影は当番制にでもするとして、インタビュアーは誰？ 今年は放送部員少ないらしいから多分人数回せないよ」

美化委員長が現実論を語る。

「会長」

副会長が即答する。

この場に居る全員の視線が私に注がれた。

悪寒の中、頭の中で「会長」という相馬の声がリピートする。

「……私？」

混乱する脳内がアウトプットできたのはありきたりな質問。

「みんなが知ってる人の方がいいと思って。答えやすいからね」

「みんな知ってるってそんなわけ」

「あれ、知らない？ 今期の生徒会長は眉目秀丽だって話題だけど」

何それ。生徒会長なんて生徒総会とかで「ああそういえばこんな人」扱いされるくらいのポジションじゃないの？

とにかくインタビューなんて冗談じゃない。自分から他人に話しかけるなんて拷問としか思えない。

「インタビューなんてしたことないから上手くできないよ？」

「あらかじめ質問をまとめておけば大丈夫だって。撮影担当にもフォローしてもらえばいいしさ」

「緊張しちゃうタイプだから上手くしゃべれないかも」

「この前の会長挨拶は全然問題ないと思ったけど。それに何回かやったら慣れるって。」

それとも、嫌？」

会議室の空気は一つの意見で一体化している。

こいつ……！

この空気で嫌だなんて言えるわけがないじゃない！

絶対確信犯だ。クッションみたく殴りたい。

「わ、たしでよければ」

「みんな、ほかにやって欲しい人とか居る？」

このタイミングで聞くなよ！

「会長で賛成」

「問題なし」

「やっぱインタビューするのは可愛い女子でしょ」

それでも微かな希望を持ってしまった。が、ものの三秒でそれも崩れ落ちる。最後の発言をした奴は吊るし上げたい。

相馬は満足げに口を弧にした。

「じゃあ決まり。撮影担当は言いだしっぺの責任で俺がやるよ」

それはつまり一日中こいつと行動を共にするということで。

夢だと思いたい。会議地獄の方がまだマシだ。

会議が終わり、会議室には後片付け担当の私と相馬だけが残った。

一言も話すことなくひたすら片付ける。相馬には背中を向けて存在自体を無視。脳内ではどうしたら体育祭を中止にできるかということだけを考えていた。

やはり逆さてるてる坊主を大量生産するしかないのか。ネットで雨乞いの方法を調べたっていい。プロがやるべきならお金を積んででも依頼する。

「インタビュー、断ればよかったのに」

背後からからかうような声が聞こえてきた。

唇を噛んでしまう。だめ、笑わないと。

白を切るって決めたんだから。

「みんなが私でいいって言ってくれたし。自信ないけど頑張るね」

これ以上何も言わせないとばかりに会話を完結させた。

片付けが終わったので鞆と会議室の鍵を持って入り口に向かう。

「閉めるから出てもらっていい？ 鍵は私が返しておくから」

「猫かぶりも大変だな。見てるこっちは面白いけど」

鍵を持つ手に力が入った。

「何のことかな」

「下手な演技止めたら？ バレバレ」

「何を言っているのかよく分からないんだけど」

耐えろ。

家に帰ったらすぐお姉たちに愚痴る。再起不能にする勢いでクッションに八つ当たりする。だから耐えろ。

「言っておくけど俺、これからもあんたのことこんな感じに陥れていくよ。色々手はあるし。この学校面白いシステム多いからいいな。さすが私立。生徒会の推薦は匿名でも可、とかさ」

何で今、推薦の話が出てくるんだろう。

答えは簡単にはじき出された。

「私を推薦したの、相馬くんなの？」

そう問うと、相馬はおもちゃでも見るような顔で私を見た。

「そうだよ。絶対嫌だろうなって思って。案の定満点に近い愛想笑いだったな、挨拶」

こいつ、私で遊んでるのか。

耐えろ。

理性が叫んで伝えている命令が遠くなっていった。

「鍵閉めたいから出てもらっていいかな」

普段心がけている、ぶりっ子みたいな口調にならなかった。

相馬は少しすると会議室を出た。私も続いて出て、鍵を閉める。

まだその場に居た相馬を見る。泣く子も黙りそうなじゃない、泣く子も黙らせる笑み。

その顔と同じくらいに、私も精一杯笑った。

「くたばれゲス野郎」

馬鹿正直に人と接するのは止めようと察したのは小六の夏手前。

家族以外に本心を出してはいけないんだと。

常に疑って接していれば、あんな目に遭わなくて済むのだと。

逆さてるてる坊主の効果はなかった。すっきりとした秋晴れになった体育祭当日。

「一位おめでとうございます！ 二位の選手と僅差でしたね」

一位の旗を持っている生徒に駆け寄ってマイクを差し出した。今は百メートル走。

みんな息が絶え絶えだけど、勝って気分がいいからか口がよく滑る。敗者にも配慮した内容にしなければいけないことが大変だけど、勝手にペラペラ喋ってくれるので思ったよりも楽しかった。

インタビューの合間、撮影担当の相手をする以外は。

「さっきのもいい笑顔だったな。途中から「長すぎるんだよボケ」って考えてるのが見え見えで」

二人で居るときは常に爆弾発言を連発。周囲に聞かれていないか目を配らせなくてははいけない。今は誰も居ない生徒会本部のテントだとしても。

ゲス野郎発言以来本音は一切口にしていないけど、相馬は私の化けの皮を剥がせたとでも思っているようだ。私を怒らせて本音を言わせるつもりらしい。おかげでより一層警戒しないとイケない羽目になっている。

「相馬くん、ずっとカメラ構えてて肩とか疲れたんじゃない？ 担当替わってもらおうよ」

「平気。高瀬さんの猫かぶりを記録するのが面白くて全然疲れねえの」

こっちは精神的にもやられてて慢心創痕だというのに。まだ午前中だなんて信じられない。

適当に理由をつけてリタイヤしたいけれどそれはプライド的に許せないし、相馬に負けた気がするから絶対に嫌だ。

昼休憩の時間になったら香穂姉と双葉姉が顔を出してくれる（双葉姉は昼休みを抜け出してくるとか言ってた。できるものなのだろうか）。ひとまずはそれまでの辛抱だ。

必要以上に相馬の姿を視界に入れたくないので、常に相馬の前を歩くことにしている。知らない間に消えていてくれたら嬉しいことこの上ないけど、現実には、というよりこいつはそこまで甘くない。視界には入らなくても不快な声が聞こえてくる。耳栓が欲しい。

「あ、カメラのバッテリー切れそう」

今も相馬に背中を向けていたのに、思わず振り返ってしまった。これが嘘だったらどれだけ間抜けか、と思ったけど本当のようだ。相馬はカメラに視線を落としてボタンをいじっている。

「朝に充電したんじゃないの？」

「のはずなんだけど」

「バッテリー自体があまり保たないんじゃない？ 去年頻繁に使っていたっていうし」

「だから予備のバッテリー持たされたのか」

相馬はパイプ椅子に座り、背負っていたバックパックから予備のバッテリーを出した。

「どこからバッテリーはずすんだ？」

あまり使い慣れていないようだった。いつまで経っても見つけられないので痺れを切らせてし

まう。

「脇とか？ ちょっと見せて」

カメラを手に取って傍にあった椅子に座る。取っ手の辺りにバッテリーを取り出すスイッチを見つけた。

「あった。多分これ——」

考えなしの行動だった。

相馬との距離が、カメラを挟んでほとんどない。

その事実気付いたのは目が合ってしまった後だった。

あ、瞳の色素も薄い。

初めて見た時も思ったけど、整った綺麗な顔してるな。

なんて無意識に思ってしまった。

我に返った時にはもう遅かった。

「そんなに見惚れる？」

綺麗な顔が台無しの台詞が吐き出される。

唐突に恥ずかしくなった。

「そんなわけじゃない！ ろくでなしに見惚れる趣味はないわ！」

建前が一切出てこず、本音が漏れてしまった。

もう二度と言うものかと決めていたのに。

二人だけで居るのに耐えられなくなり、本部のテントから出た。

「どこ行くの？ まだインタビューする競技あるけど」

呼び止められる。表情を作って振り向いた。

「少しバテちゃったから保健室行って来るね。悪いんだけど相馬くんお願いしてもいい？ 副会長で名前は知れてるし、撮影しながらでもできるでしょ？」

インタビュアーに任命させられた理由を逆手に取った。疲れているのは本当だし、文句は言わせない。

反論が出てこなかったのでテントから離れる。プライド的に逃げたようで許せなかったけど、解放された気分になった。

必要以上に二人きりになってはいけない。なったらきつとまた本音が出てきてしまう。相馬はそう誘導している。

何が楽しいんだろう。化けの皮を剥がして他人に言いふらすのかと思ったけどそうではないみたいだし。

他人の考えることってよく分からない。

分かりたくもない。

本部テントから保健室に行くには生徒席を突っ切っていくのが一番の近道だったけれど、生徒会長になってからは誰かに話しかけられる可能性が跳ね上がったので校舎裏を歩いていくことにした。競技の真っ最中だから人気は一切ない。

と思っていたのに。

「高瀬さん」

体育祭以外ではあまり使われない予備の体育倉庫の前を通った時、聞き覚えのあるような声に呼び止められた。

男子が三人。全員少し前に顔を合わせたような気がする人達。

真ん中に立っている男子のゼッケンに「木村」と書かれていた。

あの時のナンパ野郎！

「木村くん、どうしたの？」

少し狼狽してしまった。声が微かに震える。

「話があって」

この間とは少し違った雰囲気だった。

大人しい視線は合わないし少しビビり顔だし。

「なに？」

「あー、ええと」

用があるなら早くして欲しいんだけど。

煮え切らない態度にイライラしてきた。

それは一緒に居た友人たちも同じだったらしく、一人は木村の後ろでだるそうに髪をいじり始める。

「さっさと言えって」

「ちょっと待てよ、心の準備ってもんが」

「んなもんさっき十分にしただろうが！ もうめんどくせえ！」

髪をいじっていた方の友人が突然木村の前に出て、こちらに迫ってきた。

「え、なに」

「ちょっとこいつが真面目な話したいっていうから、ゆっくり聞いてもらってもいい？」

腕を引つつかまれ傍にあった体育倉庫の中に連れていかれる。

友人はすぐ出ると続いて木村も中に押し込め、

「俺らに聞かれたくないんだろ？ 見張ってやるからさくってこい」

そう言って倉庫の扉を閉めてしまった。

「ちょ、三上、ここ開けろって！」

『十五分したら開けてやるから。それまでには言えよ』

木村が扉を開けるように説得したけれど無駄だった。外から鍵をかけてしまったらしく開けようとしても動かない。

しかも倉庫には小さな窓が一つあるだけで、ほぼ完全な密室。

窓から差し込む光はほんの僅かで、室内は暗い。

「ごめん、こんなつもりじゃなくて。ただ高瀬さんに言いたいことがあったんだけど」
暗い。狭い。

「早く出してもらおうようにするから。俺がさっさと言えばいいんだよな、うん」
木村がなにか言ってるようだけど耳に全然入らない。

暗い。狭い。埃っぽい。

手が勝手に震えだす。脳内が頼んでもいないのにあの時の記憶を引っ張り出す。
止めて、思い出したくない。

「高瀬さん、もし良かったら俺と——」

怖い。

「出してっ！」

「え？」

「ここから出して！」

暗さと埃の匂いがリンクする。

怖い、怖い怖い怖い。

「高瀬さん!？」

「やだ、ここやだあ！」

扉開いて。

「開けて! ここ開けて！」

叩いていた扉が突然開いた。誰か入ってくる。

あれ、この光景、見たことがある。

「何してんだ馬鹿！」

声もなんとなく聞き覚えがある。

頭の中がぐちゃぐちゃで、その人の手を取った瞬間、意識が遠のいた。

小学生の時の通知表にはよく、「言葉を考えて発言しましょう」みたいなことが書かれていた。

私は思ったことを馬鹿正直に口にしてしまう性格で。
しかもその言葉がとても悪かった。相手を傷つけたり、怒らせたりするのが簡単なほど。
夏休み直前、いつものように何も考えずものを言ったら、クラスのリーダー的存在を怒らせた。

怒ったリーダーは仲間と結託して体育の時間、私を無理やり引っ張って体育倉庫に閉じ込めた。

どうやって出てきたのかはよく覚えていない。
その事件があってから学校には行けなくなり、中学は知り合いの居ない今の学校を選んだ。
入学する時に決めた。
家族以外に本音は言わない。
誰かと接する時は慎重に慎重を重ねて常に演技で。
そうすればもう誰も怒らせることはないし、あんなところに閉じ込められたりもしない。
怖くない。

気がついたら保健室のベッドだった。

「咲！ よかった」

一番に目に入ったのは、香穂姉。

「香穂姉、なんで？」

「昼休憩だから来たの。生徒会のテントに行ったけどいなかったから辺りを探してたんだけど、そうしたら声をかけられて。私が咲と似てるからすぐ家族って分かったみたい」

誰が、と聞こうとしたけどその必要はなかった。

香穂姉の後ろに相馬が居たから。

倒れる直前の記憶を掘り起こす。

助けてくれたのは相馬だった。

「追いかけてみたら騒ぎになってるし、しかもいきなり倒れたからびっくりした」

神妙な面持ちだった。それもそうだ、いきなり倒れたんだから。

「ごめんなさ」

「お前ら覚悟はできてんだろなあ！」

謝ろうとしたら双葉姉の大声に阻まれた。カーテンが引かれているせいで姿は見えない。相馬もあっけにとられた顔をしている。

「まずいわ。双葉本気であの子たちのこと叩きのめしちゃいそう」

香穂姉だけが平静だった。

叩きのめすって木村たちのことだよな。そんなことしたら後々面倒なことになりそう。

「それ止めて。表沙汰にしたくない」

「そうよね。ちょっと止めてくるわ」

ベッド脇の椅子に座っていた香穂姉は立ち上がってカーテンの外側に消えた。中には私と相馬だけが残る。

「気分は平気なの？」

ベッドの傍に寄ってきた。いつもの意地悪顔はなりを潜めていて、ぶっきらぼうな態度。

こんな顔もするんだ。

「大丈夫。ごめんなさい、迷惑かけて」

「やっぱりトラウマになってたんだな、暗くて狭いところ」

どうということ、と聞こうとしたけど口を指で押さえられた。

「な」

「礼は言わなくていいから一つ言うこと聞いてよ」

口を押さえていた手が頬に移動。

思い切りつねられた。

「いった！」

「俺の前では化けの皮を剥がすこと。からかうのも面白いけど、不細工な怒った顔見てる方がもっと楽しいからな」

女子に堂々不細工って。

やっぱりこいつむかつく！

カーテンの外側に消えていく相馬に罵声を浴びせようとしたが理性が止めた。すぐ傍に木村たちが居る。

それに、相馬の言われるがままに本音を出すなんて絶対に嫌だ。

.....嫌だ？

怖いんじゃないくて？

「咲、大丈夫か？」

香穂姉、相馬に続いて入ってきたのは双葉姉だった。

「双葉姉、木村たち」

「ボコボコにしてやろうと思ったけど香穂姉に止められた。けどその香穂姉が般若みたいな顔しながら淡々と説教してる」

多分そっちの方が怖いと思う。

「あ、そうだ相馬にちゃんと礼言ったか？」

「言わなくていいって言われたわよ。本当腹が立つ」

「お前な、二度も助けてもらった奴にその態度はないだろ」

二度？

なんのことが分からないというのが顔に出ていたようで、双葉姉は少し苦々しそうに口を開いた。

「事が事だから覚えてないかもしれないけど、昔閉じ込められた時に助けてくれたのも相馬だよ。どうりで聞き覚えのある名前だと思った」

もう一度記憶を掘り起こす。

助けられた時、昔も同じことがあったとぼんやり思っていた。

声がなんとなく似ているような気もして。

低くなりかけているけど、あの声は確かに。

「相馬の——」

確信したら動かずにはいられなかった。

「ちょ、咲！？」

勢いよく起き上がってベッドから抜け出す。カーテンを引くと香穂姉と土下座をしている男子三人が目に入って来た。

「高瀬さん、本当にすみ」

三人が何か言っているようだったけどそんなことはどうでもよくて。

保健室にはもう相馬は居なかった。

「香穂姉、相馬は？」

「本部に戻るって言ってたけど？」

四人の横を素通りして保健室から出た。

突然の事実混乱していることは認める。

最悪な言い方をすればほだされたと言ってもいい。

それでも。

「相馬っ」

香穂姉の言っていた通り、相馬は本部テントに居た。ビデオをいじっている。

「え、なんで？ しかも全力疾走？」

息が上がっている私を見てすっとんきょんな反応が返ってくる。

確かに急に走って頭がぐらつく。その場に座り込んでしまった。

「ほら、いわんこっちゃない。馬鹿か」

相馬はビデオを机の上に置いてこちらに駆け寄ってきた。

体操服の胸倉が射程距離に入る。思い切り引っ張ってやった。

「ちょ、なに」

自分から他人を近づけるなんてどうかしてる。あれだけ怖かったのに。

でも相馬は、怖くない。

「借りはそのままにしたいくない主義なの。いいわよ、あんたには罵詈雑言を包み隠さず言ってあげる。この悪趣味ドS野郎。

あと、これは昔の分。助けてくれてありがとう。忘れててごめん」

掴んでいた体操服を離した。相馬はその場から動かない。

あっけに取られた顔が面白くて、早速思ったことを口にすることにした。

「ビデオ貸して。その阿呆っぽい間抜け顔、最高のアングルで撮ってあげる」

机にあるビデオを取ろうとしたら、脇から手が伸びてきて阻止された。

「性格まで不細工とは救いようがねえな。美麗衆目で評判の会長様が聞いて呆れる。

でも、こっちの方が面白い」

二年振りに外で化けの皮を剥がした。

そこに恐怖はなく、淡い安心感が私を満たしていた。

人形姫と泥棒悪魔

貴水玲

第一話 ひとつの芽生え

あるところに、ユヴェール王国という小さいながらも美しい国がありました。

そこには人々に愛される心優しい王様とお妃様がおりました。二人の間にはなかなか子どもが出来ませんでした。ようやく念願かなってかわいいお姫様が誕生しました。お姫様はクラリッサと名付けられ、みなに大変祝福されました。しかしクラリッサは生まれて一日で死んでしまったのです。

嘆き悲しむ王様のために、すぐれた魔女であったお妃様は自分の命を国宝の大きなダイヤモンドに、魔力を二つのサファイアに吹き込んで娘に与えました。

こうしてクラリッサはお妃様の命と引き換えに、再び産声を上げたのです。

でもお妃様亡くなる寸前「心」を王様に渡してしまったので、クラリッサにはほとんど感情というものがなく——いつしか『人形姫』と呼ばれるようになったのです……。

今日も朝日の訪れと同時に、クラリッサは目を覚ました。

大きなサファイアの瞳をぱちぱちと二度瞬き、身を起こす。天蓋つきのベッドからネグリジェの裾を ふわっと広げて床に降り、朝日がにじむ窓辺に歩いていく。

クラリッサは背伸びをして、重く垂れ下がるカーテンを開き大きな窓を開けた。

その向こうに広がる果てしない緑の森から、生まれたての朝の空気と濃い木々の香りがそよ風とともに吹き込んでくる。クラリッサの長い黒髪がふわりと揺れた。

「今日もよい天気だな」

人形のような愛らしい顔に似合わない無愛想な声で言い、クラリッサはいつものように細長い望遠鏡をとり、観察を始めた。

毎朝高い塔の最上階にある自室の窓から森の様子を眺めるのが、領主であるクラリッサの日課だった。

大きなブナの枝に止まって朝の喜びを歌うコマドリたち。朝ごはんを探しに幹をすするすと降りていくシマリスの親子。シカやウサギもブラックベリーの茂みから顔を出し、周囲をきょろきょろ見回している。いつもの朝の風景だ。

「うん、今日もみな息災。異常はないな」

無表情で頷くと、クラリッサは望遠鏡を置いた。そしてどこまでも続く森のさらに向こう、空と交わる遙か彼方に朝日で輝くサファイアの目を向ける。

その方角にはクラリッサが生まれた大きなお城と、この金色の望遠鏡をくれた父である王様がいるはずだった。

国宝のダイヤを左胸に持つクラリッサは、小さい頃から悪い魔法使いや魔物によく狙われた。そこで、王様は大臣たちと相談して娘を安全な場所へかくまおうと決め、お城から気が遠くなりそうなほど離れた大きな森に石の塔を建てた。以来クラリッサはこの森の領主として、この塔でひっそりと暮らしている。

ここにいるのは侍女とコックとクラリッサだけ。でも彼らはいつも無表情な『人形姫』を怖が

って、必要な時以外は近付いてこない。一度死んで甦ったという怪奇な過去を持つ王女を化け物だと思っているのだ。

それに辺境の地では来客もなく、王様の言いつけで外にも出られない。だからクラリッサはこの十四年間孤独な毎日を過ごしていた。けれどそれを「寂しい」とか「つまらない」とは思ったことがなかった。そもそも、そういった気持ちじたいどんなものか、かたいダイヤの心臓を持つ彼女にはよくわからなかったのだ。

カリカリベーコンとふわふわ卵の朝食をもくもくと食べ終えた後、クラリッサはいつものように塔の中階にある図書室へと向かった。

たくさんの古い書物の並ぶこの部屋は彼女が一日の大半を過ごす場所である。“お気に入り”と言っていい。普段好き嫌いをあまり示すことのないクラリッサだが、明らかに「好き」といえる入り浸りぶりだ。それにここは彼女にとって特別な場所だった。

両開きのドアを押し開けると、天井まで伸びる壁一面の書架がクラリッサを迎えた。

どの棚にもぎっしりと本が詰まっている。クラリッサが本に興味を示したと知って、王様が世界中から集めてくれた書物たちだ。おかげで年々蔵書は増え、本棚にはおさまりきらなくなった。室内にはあちこちに積み重なる本のタワーが建ち、読書用の丸テーブルの周り以外足の踏み場もないくらいだった。

「……おや？」

そのテーブルの上に大きなリボンのついた箱があるのを、クラリッサは見つけた。

昨日の夜に来た時はなかったはずだ。退室した後に侍女が置いたのかもしれない。

ちょっと首を傾げ、しばらく考える。表情の乏しい白い顔には変化はない。だがふいに何か思い当たったらしく、高く聳えるタワーの間を進み始めた。

タワーの隙間は、狭い。大人である侍女はいつも非常に苦労しているのだが、小柄な姫にとっては慣れたもの。フリルやレースで膨らむ短いドレスのスカートを揺らしてすいすいと抜けて行く。そして難なく猫足の丸テーブルまで辿り着くと、クラリッサはその物体を見下ろした。

赤い大きなリボンに包まれたハート型の箱。リボンをほどいて開けてみると、中には赤や青や緑のキラキラしたものがたくさん入っていた。

その中に大きなカードが埋もれている。拾い上げ、クラリッサが開けてみると……

『クラりん、おはよう！ 今回のプレゼントは七色の味の宝石箱やー。おいしいキャンディーだよ』 もうすぐ十五歳のお誕生日だね。その日は特別なお祝いを用意してるから、楽しみにしててね！ パパより』

飛び出すカードだった。

だが眉ひとつ動かすことなく冷めた目で読み終え、クラリッサは箱の中に視線を映した。「…お菓子なのか」

鼻をくすぐるのは甘い砂糖の匂い。でもキャンディーにしては大きい。まるで巨大な宝石のようだ。きっと腕のいい菓子職人に特別に作らせたのだろう。

王様はクラリッサを甘やかすのが大好きだった。離れて暮らしているから余計に愛情は強く、本以外にもこうして時々プレゼントを贈ってくる。きれいなドレスや髪飾り、美しいオルゴールに甘いお菓子……そういったものがきっと娘の氷の心をほぐし、年相応の愛らしさやその他もろもろの感情を取り戻してくれると王様は信じているのだ。だがその思いが届いたことはこの十四年間一度もなかった。

「……甘いな」

大粒キャンディーを一つ口に入れ、転がしてみる。感想はこれだけ。頑張ってるリスのように頬

を膨らませ味わってみるのだが、

「いちご味だな。……うむ、美味だ」

おいしい、とは思いますが他にわき上がる感情はない。

そうして箱の前に佇んだままもごもごと口を動かしていると、本棚から一冊の古びた詩集が床に落ち、ページが勝手に開かれた。

『ま——あ、姫様！ そのような想いのこもった贈り物をそのような鉄仮面で味わうなんてっ！

貴婦人はつねにほがらかに、にこやかに振る舞わなくてはなりませんのよ！ マナー教師のあたくしには、姫様を立派なプリンセスにする義務がございます。本日はまず初めに笑顔の練習をいたしましょう！』

聞こえた甲高い女性の声にクラリッサはもごもごしたまま目を向けた。

「ああ、ヒルデガルト夫人。おはよう」

サファイアの瞳が夜空の星のようにきらめく。すると開かれたページから、背の高い派手に着飾った貴婦人の姿が浮かび上がった。

『おはようございます。さあ姫様、さっそく“笑顔”を！ その愛らしいバラの蕾のようなお口の両端をゆるやかに引きあげて——……、どんな星の瞬きもかなわないその瞳をやわらかく細め——……、小首を傾げて上目遣いに——……はい！！』

貴婦人・ヒルデガルトの合図で、キャンディーを口に入れたままクラリッサは言われた通りにやってみた。だが出来上がったのは、なんとも不気味で感じの悪い“笑顔”だった。

『ひえっ！ お、おやめになってっ！ 怖い！ 怖すぎますわ！ それではどんな殿方も逃げてしまいます！ あああ……幼少のみぎりからおそばにおりますのに、あたくしは何て力不足なんでしょうっ！ うっ、うっ』

フルーツかごのように髪を高く盛った頭を嘆かわしそうに振り、ヒルデガルトがハンカチに顔を埋めて泣く。その近くで、今度は分厚い哲学書がバサリと床に落ちた。

『朝っぱらからやかましいのう。感情と連動する動作は姫君には難しいのじゃ。そのくらいお前さんだっけとっくにわかっておるじゃろう。長い目が必要なんじゃよ』

ヒルデガルトと同じように浮き上がったのは、白い髪と白い髭の老人であった。ゆったりとした穏やかな口調に、ヒルデガルトが厚化粧の顔をきっと上げる。

『コルネリウス様、そうは仰いますがいつまでもこのままにはしておけません！ 姫様ももうすぐ十五歳。お年頃でございます。そして王国のたった一人のお世継ぎ。愛嬌一つ振りまけないままでは、行き遅れてしまいます！ そうなったらあたくし王様に顔向けできませんわっ』

『わしは姫君は十分おかわいらしいと思うがのう。それに賢いお方じゃ。心配せんでもお前さんが王様に顔向けすることはなかろう。わしらの姿は他には見えんのじゃから。のう、姫君』

コルネリウスという老人の言葉に、クラリッサはコクリと頷いた。

「お母様の家は、代々古い書物や品物の心や知識を読むことで王国の政治を助ける魔女の家系だった。その力を持った瞳で、私は二人の姿を見ることができる。でもこの力は特別で、他の人間にはないのだったな」

その通り、とコルネリウスが頷く。

ヒルデガルトとコルネリウスは書物の中に宿る“古き知識”の欠片である。

何百年と時を超えた古い書物の中には、心を持つものが存在する。そういった意識を読み取り形状化させる魔力がクラリッサの瞳にはあった。この部屋の何千という蔵書の中には、他にも二人のようにクラリッサに語りかける存在がいる。彼らは気まぐれにかわるがわる現れ、塔の中では知りえない様々な知識をクラリッサに教えてくれる。外に出られない彼女にとって、古き賢者たちは偉大な師であり唯一の話相手なのであった。

『姫君と出会うことがなければ、わしらは埃を被ったまま日の光を見ることはなかったじゃろう……しかしこうして幸運にも再び声を取り戻した。姫君はわしらにとって特別な存在であり、命の恩人じゃ』

『そうですね。だからあたくし、姫様にお仕えし、外見も中身も立派な貴婦人にお育てする決意をしたのです！ さあ、社交界デビューは目前！ それまでに何が何でも優雅で気品溢れる振る舞いを身につけてもらいますわよ！ では、もう一度微笑みの練習を——』

『まあ待たれよ、ヒルデガルト夫人』

情熱的な詩集の住人である貴婦人を、哲学書の老翁が押さえ止める。

『それも結構じゃが、本日はまず姫君は手紙を書かねばなりません』

「……手紙？」

ようやく口に合うサイズになったキャンディーを転がしたまま、クラリッサはコルネリウスを見た。

『贈り物へのお礼ですよ。いつも姫は書かんでしょ。夫人の言う通り贈り物には“想い”がこもっております。それは問いかけじゃ。受け取ったら答えを返すのが礼儀というもの。やってみてはどうですかの？』

「しかし……」クラリッサはわからないほどかすかに眉を寄せた。

「私にはその“想い”というものがよくわからないのだ。何を書けばいい？」

『おいしかったと伝えればいいのですよ。そして誕生日を楽しみにしていると』

「楽しい……それはどういう気持ちなのだ？」

『わくわくする気持ちですわ、姫様』

ヒルデガルトが口を挟んだ。『時を忘れて夢中になるほどの……。体が勝手に踊り出すような、そんな衝動のことですわっ』

「勝手に？ んむむ……それは何か悪い病気なのではないのか？」

『ほっ、ほっ、ほっ。そのような気分になるということですよ。姫君はありますかの？』

たとえば、体がそわそわとして落ち着かなくなることが』

「ああ、あるぞ」クラリッサが大きく頷く。「高熱を出した時にそのような感じになった」

『うむむ、それはまた少し違いますのう……。 “楽しい”とは時を忘れるほど何かに没頭している時や、何かを得てそれをもっと知りたいという欲求に駆られた時などに起こる気持ちです。姫は毎日この部屋で我々と過ごされ討論などなさるが、それはどうしてなのですかの？』

その問いを聞きながら、クラリッサは小さくなったキャンディーをカリッと噛んだ。

「そなたたちと過ごすのは有益だからな。私の知らない外の世界のことや知識を持っている。以前お父様が人間の家庭教師を送ってくださったが、彼らの知っていることは、全部私の知っている

ことばかりでつまらなかった。私はもっと色々なことが学びたい。だからここへ来る。それに第一、他にすることもないからな」

最後の言葉を言いかえれば、「単なる暇つぶし」だと聞こえる。ヒルデガルト夫人はショックを受けたようだったが、理解力に長けた老人は穏やかに微笑んだまま頷いた。

『では、姫君はもっともっと知識を得たいと考えておるわけですか？ 昨日もその前も、もう何年も同じことを繰り返しておられるのに、明日も明後日もまたここへ来て、同じように過ごされたいと思っておられるわけだ』

「うむ……そういうことだな。きっと私は明日もくる。それが楽しいということなのか？」

もう何年も続いている習慣である。考えずともクラリッサは肯定することが出来た。

『そうですね。少なくとも、継続したいと思っておられる限りは、姫君の中にそういった感情が確かに存在しているのでしょう。ただその在り処がわからないだけで』

「私の中に」クラリッサはダイヤの心臓のある左胸に触れた。じっと手を当てたまま、待つ。だがその手のひらで感じ取ることは出来なかった。

「んむむ……やはりわからないな。本当にあるのだろうか」

姫の呟きに、ヒルデガルトとコルネリウスは顔を見合わせた。

『こういうのは教えるより経験なさせるのが一番だとあたくしは思うのですけれど』

『ううむ……確かに。姫のダイヤに煌めきを与えられるような出来事でも起こればてっとり早いんじゃないが……。しかし来訪者もない辺境の森の中では期待できそうにないのう……。"心"を知るには外の世界と関わるのが一番なんじゃが』

二人の書物の住人はふうとため息をついた。その横で、姫はただひたすらメープルの葉のような手を左胸に当てているのだった……。

その夜。

いつものように孤独な夕食をとり湯浴みを終えたクラリッサは、白いネグリジェに包まれて塔の最上階の窓辺に座っていた。

サファイアの瞳いっぱい、無数の星が瞬く夜空を映す。するとキャンドルの光のような星屑たちの囁き声がいっせいに降り注いできた。

それははっきりとした声ではなく、小さなベルのような音だ。それが幾千と重なって心地よい音楽となり、クラリッサの耳をくすぐる。

「そろそろだな……」

手の中の大きな金色の懐中時計を見下ろし、クラリッサは再び視線を紺色の空に向ける。きらっ、きらっと流れ星が飛んでいく。耳を澄ませば、星のさざめきの向こうからかすかに“声”が聞こえてきた。

——クスン、クスン……。

すすり泣く声は、天頂に輝く王冠座にいるアリアドネのもの。このところ真夜中近くになると、いつも彼女は泣き始める。

「まだ見つからないのだな、王冠の宝石は」

望遠鏡を取り出し、クラリッサはアリアドネの姿を確認した。彼女の髪には夫から贈られた宝石をちりばめた王冠が煌めいている。だが真ん中にあるはずの大きなルビーがない。少し前に彼女は大事な宝石を落としたらしく、それからずっと塞いでいる。毎晩声が聞こえるたびに望遠鏡で様子を見ながら、よく泣くものだとかラリッサは思っていた。

もうひと月近くこんな状態なので「新しいルビーをつければいい」とクラリッサは一度アドバイスを試みたが、アリアドネは「それでは嫌だ」と拒絶された。そして狩りに出ている夫が帰ってきてこのことを知ったらきっと悲しむと、いっそう激しく泣きじゃくるのだった。

『贈り物には贈り主の“心”が込められているのです。代わりでは意味がないのですよ』

なぜかと聞いたクラリッサにコルネリウスはこう答えた。

どうして意味がないのだろう？ 同じ品物ならばいいではないか。クラリッサにはアリアドネが泣く理由がわからない。

「……こころ、か」

それがあると、どう違うのだろう。

コルネリウスによると、人の心にはこの夜空に散りばめられているような小さな星がたくさんあるのだという。それが何かの拍子にきらめく時、人は「うれしい」とか「悲しい」といった感情を味わえるのだ。

でもクラリッサの心には星空がない。与えられるはずだったそのきらめきは、王様が大事に大事に宝箱にしまっている。王様は王妃の忘れ形見であるクラリッサを、表情がまずしかろうが反応がうすかろうが本当に大切にしてくれている。でもその愛情にクラリッサはこたえることができない。そしてアリアドネをなぐさめる方法も知らない。

「まだまだ私は勉強が足りないな」

語学に数学に科学に天文学に歴史……今までクラリッサは数え切れないほどの本を読み、さまざまな知識にも触れてきた。でも人の心というものだけはうまく理解できない。

コルネリウスは、きらめきを生むには本を読むだけではだめだと言っていた。広い世界の一部となりそこにあるものたちと繋がっていくのが一番だと。

でもそれは、この小さな塔だけがすべての世界と定められたクラリッサには難しい。

「……いつかその世界を知る日がくればよいな」

そうすればアリアドネの気持ちもわかるようになるのだろう。

サクランボのような唇から小さなあくびをもらし、クラリッサは窓辺から降りた。そして窓を閉め、ベッドにもぐりこんだ。

——それから、真夜中すぎ。まんまるい蜂蜜色の大きな満月が夜空の一角に腰をすえ、静まり返った世界をゆったりと見渡している頃。

塔の最上階にあるクラリッサの部屋の窓がそっと開かれた。

「へへ、ちょろいもんだぜ」

その隙間からするりと忍び込んできたのは——まるで闇の一部か影のような、漆黒の髪と瞳と服装をした一人の少年。だがそのお尻からはひょろりと細長い尻尾が、そして背中にはコウモリのような大きな翼が二枚ある。

「怪盗ゼル様の手にかかれば、どんな場所だって入り込むのはカンタンだい。さあて、お宝があるってのはここだな？」

小さな二つの牙がのぞく口元をニヤリと引きあげ、悪魔・ゼルはおでこに手を当てた。好奇心の強そうな瞳を動かし獲物を探す。そして月明りでぼんやりと明るい室内の一角で目を止めた。

大きなベッドの一部がこんもりと盛り上がり、静かに上下に動いている。

「あった、あった。アレが今夜のゴチソウだな。ああ、ようやくありつける……」

うっとりとしげき、舌なめずりをする。ゼルは腹が減っていた。むしように減っていた。人間の大切なものを盗んで食うことでゼルの空腹感は満たされる。だが今まで腹いっぱいになったことは一度もなかった。

そんな時、王国のどこかに“極上の宝石”があると噂を聞いた。それを盗んで食べればきっと満腹になるに違いない——そう思いずっと探していた。そして今夜ようやく在り処に辿り着いたのだ。

二枚の翼をしまい、ゼルは足音をたてることなくベッドに近付いた。

ベッドの上のこんもりした白い小山から、静かな寝息が聞こえてくる。

「ああ……いいにおいだ」

なんともいえない甘い香りがする。極上の獲物のしるしだ。きっと味も最高に違いない——ゴクリと唾をのんで、ゼルは長い爪でそっとシーツをめくった——が。

「……私に何か用か？」

眠っていると思っていた獲物は、ぱちりとその大きなサファイアの瞳を開けてゼルを見上げていた。

「ぎゃっ！！」

シーツを離しゼルは飛びのいた。

長い黒髪の小柄な少女がむくりと起き上がる。その姿はまるで丹精こめて作られた人形のように愛らしい。だがまるで死人のように表情がなかった。

「お前は誰だ？　ここで何をしている？」

冷静な問いかけにゼルは焦った。少女は絵のように顔色一つ動かさず、じっと真夜中の侵入者を見つめている。

「私はクラリッサという。お前は？　もしかして泥棒か？」

「ど、泥棒だとう！」隠れていた天蓋の柱の陰から飛び出し、ゼルは人差し指を少女に突きつ

けた。

「オレ様は悪魔だっ！ 今宵はお前の持つ“極上の宝石”をもらいにきたっ！」

「……宝石？」

少女は自分の左胸を見下ろし人ごとのように素っ気なく「ああ」と呟いた。

「私の心臓を盗みにきたのだな。……ではやはり泥棒ではないか」

「う、うるさい！ どうせ呼ぶなら怪盗と呼べっ！」むきになってゼルが返す。

「いいから大人しくしろ！ こちとら腹が減ってんだっ！ 食ってやるからさっさとお前の心臓を渡せっ！ さもないと八つ裂きにするぞ！」

鋭く尖った爪を示し、牙をむく。たいがい人はこうすると震えあがり言うことをきくものだ。しかしゼルの予想は大きく裏切られた。

「悪いが、それは出来ない。ダイヤを渡してしまうと私は死ぬのでな」

少女——クラリッサはフッと暗い笑みを口の端にかすかに浮かべただけだった。それがあまりにも怖かったので、ゼルは再び柱に隠れた。

「そ、そんなことオレ様が知るかっ！ 渡さないなら八つ裂きだ！ いいのかっ」

「隠れて言うセリフではないと思うが。……お前、本当に悪魔なのか？ 名前はあるのか」

「当然だ！」先が三角に尖った尻尾をゼルはピンと伸ばした。

「だがお前にオレ様の偉大な名を教える必要はない！ お前は単なるエサなんだからなっ。オレ様が悪魔かどうか疑うなら、今すぐ見せてやる。この牙と爪でお前なんかすぐに——」

「こら」

飛びかかろうとしたゼルに向かって、クラリッサはベッドの脇にあったステッキの先を突きつけた。

「レディに近付く時は許しを乞うのが礼儀というものだ。無礼者」

「んぎゃっ!？」

おでこを弾かれ、ゼルは再び飛びのいた。

「貴人の部屋に入室する時もノックをし許可を求めるのが決まりだ。そなたはどちらも守っていない。そしてさらにもっとも重要なことを失念している」

ステッキを手にクラリッサは寝台の上に立ち上がった。

「初対面の人間に名を名乗るのは常識だろう。そんなことも出来ない者とは話をする価値はないとヒルデガルト夫人も言っていたぞ。ダイヤが欲しければ礼儀を身につけて出なおしてくるがよい。それに私はまだ眠い。もうこれ以上貴重な睡眠時間を邪魔されたくない」

ぶん、と振り上げられたステッキを見てゼルは「ぎゃっ」と声を上げ、窓辺に飛び移った。

「なにしやがる、危ないだろっ！ ちっ、今日のところは帰ってやる！ でもまた来るからなっ。オレ様は絶対あきらめないからなっ」

あたふたしながら、ゼルはコウモリよりもはるかに巨大な漆黒の翼を広げた。そして「覚えてろっ！」と捨てゼリフを吐いて飛び去っていった。

翌日、いつものようにクラリッサは図書室にこもり、猫足テーブルの上で天球儀を回していた。

くるくるくるくる。無表情で回し続ける。ヒルデガルト夫人は本日「化粧ののりが悪い」との理由でひきこもっているのだから、そばにいるのはコルネリウスだけだ。そこで今日は自然哲学の講義をしようということになったのだが、クラリッサはなかなか集中できないでいた。

『……姫君、今日はめずらしく、お心が乱れておられるようですね』

コルネリウスの問いかけに、クラリッサはようやく天球を止め、顔を上げた。

「わかるのか？」

その顔は冬の枯れ野のように冷たく殺風景であったが、茶色のローブを着た賢そうな老人は「ふむふむ」と興味深そうに白いあごひげをさすった。

『ええ、わかりますとも。姫君とは十歳の頃からのつきあいですからこのう』

コルネリウスは図書室の中で一番の古株の“知識”だ。クラリッサのことは世話役の侍女よりも、あるいは本人よりも知っている。ほんのわずかな変化でも探すのはお手のものだ。

『今日は口角の位置がちいと下がりぎみなので気になりましたな……何かございましたかな？』

「……うむ。実は昨晚私の部屋に悪魔がきたのだ」

『悪魔？』

星座が描かれた球体を見つめたまま、クラリッサはコクリと頷いた。

「ああ、そう言っていた。どうやら私の心臓を奪いにきたらしい」

『な、なんですと！ こんなところまで姫君を狙うものが！ しかも悪魔！ これは一大事じゃ……！ すぐに対策をたてねば姫君のお命が——』

コルネリウスが白髪を逆立て、床の上に開かれた哲学書の上でうろうろし始めた。

「それは大丈夫だ、心配しなくともよい。悪魔といってもみょうなやつでな。ステッキで叩いてやろうとしたら尻尾を巻いて逃げていった。本で読んだような恐ろしい姿でもなかったし、なんだか間抜けそうなやつだった」

『げ、撃退されたのですかっ』

コルネリウスがグラスの口のように目を丸くした。

「うむ。自分の身は自分で守るのが基本だとジルドレイに教えられたからな。つねに護身用のステッキを枕元に置いている」

ジルドレイとは、自称騎士を名乗るもう一人の“古き知識”だ。美丈夫でたいそうな自信家なのだが、ヒルデガルトに失恋して以来姿を見せなくなっている。

『なりませぬ、一国の姫君ともあろう者が戦うなど。お怪我されたらどうするのです！ まったくあやつはろくなことを教えんのう。いいですか、姫君。悪魔とは一度狙った獲物は地の果てまでも追いかける執念深い魔物です。きっとまたやってくるでしょう』

「うむ、そのようなことを言っていた。だがまたやってきてもステッキで追い払う。あれはひ弱そうだったからな」

「覚えてろよ！」と窓から飛び立った後、あの悪魔がバランスを崩して凧のように森に落ちてい

くのをクラリッサは見た。

それに翼や尻尾、牙はあったが見た目は同じ年ごろの人間の少年のようで、恐ろしさなどみじんもなかった。クラリッサには勝つ自信が大いにあった。

『なりませぬ。何度ステッキで叩いて追い払っても無駄なこと。悪魔を追い払うには、有利な取引をすることが一番なのです』

「取引？」

『さよう。悪魔は邪悪で強大な力を持って人間を誘惑し墮落させることを好みます。その方法として取引を利用します。あやつらは取引が大好きでしてね。そうやって対等であると見せかけてだますのが生きがいなのです。だからそれを利用するのですよ。自分だけに有利になるような駆け引きをして、打ち負かすのです。取引に負けるとあやつらは手出しができなくなる。目には目を。同じやり方でだまして利用してやるのですよ。できますかな？』

「だます……か。だが、どのように持ちかければ悪魔というのは興味を示すのだ？」

『そうですね。たとえば、何か願いと引き換えに望むものを与えるとおっしゃってみてはいかがでしょうか？ きっと飛びついてくるでしょう』

「なるほど」大きなレースのリボンをつけた頭を小刻みに縦に振り、クラリッサは再び天体をくるくると回した。

「よし、決めたぞ」

そして天球儀の一部を指先で押さえ、幻ではないかと思うほど小さく——笑った。

「これを私の“願い”にして、試してみよう」

その夜もまた、悪魔ゼルはクラリッサの部屋にやってきた。

もちろん、今夜こそダイヤを盗んで腹におさめるためだ。

昨晩は不幸にも食事にありつけなかったので、ゼルはさらに腹が減っていた。

太陽の下では力が半減するのでゼルは夜しか行動しない。明るいうちはだいたい昼寝をしているのだが、今日は空腹に耐えられなかった。そこで省エネ型のコウモリになって森のフルーツなどを食べてみたのだが、満たされない。やはり人間の持ち物が一番腹もちがいいらしい。

「今日こそはぜって一食ってやる！」

よし！と気合いを入れて乱暴に窓を蹴り開ける。そして中に飛び込もうとした時、待ち構えていたように声がした。

「遅かったな、悪魔」

広いベッドの真ん中にクラリッサがいた。黒ビロードのような長い髪を広げ、白いネグリジェ姿でちょこんと座っている。

「待ちくたびれてほとんど食べてしまったぞ。せっかくお菓子パーティを開いてやったのに。道に迷ったのか？」

そう言うクラリッサのマシュマロのような頬はもごもごと動いている。見れば彼女のまわりには、チョコレートやクッキー、マカロン、ヌガー、ギモーヴ……ありとあらゆるお菓子が散らばっている。だがほとんど空の包みばかりだった。

「お前……オレ様を待ってたのか？」

信じられない言葉に、ゼルは少しつり上がったアーモンド型の目を見張った。

「ああ、そうだ。こんなに何かをひたすら待ったのは生まれて初めてだ。もうあきらめたのかと思ったぞ」

「そんなわけないだろっ！ お前のダイヤを食うまではオレ様は何度でも……」

「まあよい。入ってくつろげ。食べるか？」

クラリッサが差し出したチョコレートの包みから、ゼルはツンと鼻をそらした。

「いらん！ ヒトから与えられたモンなんてオレ様は食わんっ。腹をこわす！」

「そうか？ 味見をしたが安全な味であったぞ。ああ、こういう場合は“おいしい”というのだな」

「冗談じゃねえ！ オレは悪魔だぞ！ 一族でも最強と恐れられているんだっ。お菓子なんかにつられるわけないだろうっ」

本当はお菓子が大好きで、普段はマヌケだのトンマだのバカにされている方が多いのだが、それは伏せておく。実は昨日も失敗を知られ、仲間に大笑いされたばかりなのだ。だから今日はなんとでも成功させねばならなかった。

「……ってというか、それよりもダイヤだっ！ ダイヤをよこせっ！ 今日こそはお前の体を引き裂いてもらっていくからな——ごふっ！？」

自慢のすばしこさでクラリッサめがけてゼルは跳躍した。だが鋭い爪を振り上げたと同時に、みぞおちにクラリッサのステッキの先がめりこんだ。

「せっかく今日は招き入れてやったのにやっぱり礼儀知らずなやつめ。……本当に悪魔なのかも

あやしいものだ」

すきっ腹への攻撃にうづくまるゼルの頭をステッキの先でぱしぱしと叩きながら、クラリッサはマカロンを口に入れる。そしてわざとらしくため息をついた。

「悪魔とは外見も恐ろしく、人間よりもすぐれて賢く強く、その力をもって出来ないことはないのだと本で読んだことがあるが……あれは嘘だったのだな。がっかりだ」

「ウ……ウソじゃ、ね、え！ オ、レ、たちは……ム、テキだっ」

ゼルが呻く。クラリッサは「ほう」と呟いた。

「ならば証拠をみせてくれ」

「……証拠？」

「そなたが無敵だという証拠だ。何でも出来るのだろうか？ ならば私の頼みごとを聞いてくれないか？」

「……お前の？ それは“取引”ということか？」

おなかを抱えたままゼルがギロリとクラリッサを見た。クラリッサの深い水底のような青い瞳が不敵に光った。

「ああ、そうだ。取引をしよう。私はこれからそなたに一つ頼みごとをする。もしそれを見事なしとげられたら、そなたに私の心臓をやろう」

「なに？」ゼルの顔つきが変わった。「それは本当に本当か？ 悪魔との取引では、たとえ言葉でも一度口に出したら破棄することは出来ないぞ？ いいのか？」

何度も念を押すゼルに、クラリッサはゆっくり、はっきりと頷いてみせた。

「もちろん、嘘ではない。そもそも私は今まで嘘をついたことがない。そんな相手もいなかったからな」

話をする相手はいつも“古き知識”たちだけだった。自分以外の唯一の人間である侍女たちとは義務的なやりとりしかしないし、こうして生き物（人間ではないが）と会話らしい会話をするのはどれくらいぶりだろうか。

「……本当だな？ ウソだったら大変なことになるからな。——念のため聞いておくが、オレ様が失敗したらお前は何を望むんだ？」

「名前だ」

「なまえ？」

「もしそなたがなしとげられなかったら、私が勝ったら、そなたの名前を教えてもらう」

「……それだけか？」ゼルがくしゃりと顔を歪めた。

「そんなものでいいのか？ 確かにオレたち悪魔にとって、自分の名前を人間に教えるってのはとてつもなくイヤなことだが……欲がないなお前は。たいていの人間は財宝とか名声とか自分がもうかるような願いを言うモンなのによ」

「そうだな」

つまみあげたピンクのマカロンをクラリッサは見つめた。

「私は何かを欲しいと思ったことがあまりないのだ。私には“心”というものが欠けているらしくてな。だから特別そういうものに関心がない。……でもそなたのことにはすこし興味がある」

今までクラリッサは一つのこと執着したことはなかった。

でも今朝目を覚ました時、なぜかゼルのことが頭の片隅に残っていた。眠りから解けた時はいつも頭の中は空っぽで物事など考えたことはなかったのに、今朝は違っていたのだ。そんなことは初めてだったので、少しばかりうろたえたほどだ。コルネリウスの講義で気が散漫だったのもそのせいだ。

「……へえ。ヘンな人間だな、お前」

肩に頭がつきそうなくらいぐいーっと首を傾げ、ゼルは少し尖った耳の裏を掻いた。

「まあ、どうでもいいな。どうせオレ様が勝つに決まってるんだから。いいぜ、“取引”してやる。それで？ お前の頼みってのはいったい何だ？」

「うむ」

マカロンを口に放り込んで咀嚼した後、クラリッサはベッドの上を這って行き、枕の下から何かを取り出し戻って来た。

持ってきたのは、美しい銀細工の宝石箱だった。ゼルの前に差しだし、パカリと蓋を開ける。中には大きなルビーが一粒入っていた。

「これを王冠座のアリアドネに届けてほしいのだ。聞こえるだろう、彼女の泣く声が」

ゆるやかにレースカーテンが舞う窓辺をクラリッサが見遣る。尖った耳をゼルは澄ました。さわさわという星の声にまじって確かに泣き声のようなものが聞こえる。

「お気に入りの冠のルビーをなくしてから、彼女は毎晩泣きっぱなしでな。おかげで星たちもざわざわしている。だからこれを届けて、彼女を涙を止めてきてほしいのだ」

暗闇でも鈍くきらめく立派なルビーに顔を近付け、ゼルがくんくんと鼻を動かす。

「ふん、なんだか甘いにおいがするな。これもうまそうだ」

「こら、食うな。私の話を聞いていたか？」

噛みつきそうに牙ののぞく口を開けたゼルの前で、クラリッサは宝石箱の蓋を閉めた。

「本当ならば私が届けにいきたいところなのだが、あいにくと天の頂きにまで昇る方法が知らない。夜光蝶に手紙を届けてもらったことはあるが。そなたにはどこへでも自由に行ける翼がある。王冠座までなんてひとつ飛びなのだろう？」

「あたり前だろ、オレ様に行けない場所なんかねえ！ そんなことなら目をつむっても出来るぜ。ちゃっちゃと届けて泣き止ませてくらあ」

クラリッサの手から宝箱を奪って小脇に抱えると、ゼルは「よっ」と窓の上に上がった。

「おい、ただ届けてくるだけではダメだぞ。ちゃんと話を聞いて彼女の気を静めるのだぞ。それから行儀よくな。アリアドネはかつては王女であった高貴な女性だ。そそののないようにしてほしい。それと王冠座があるのは天頂の近くだ」

「へへ、まかすとけて。ていうかお前は覚悟しておけよ！ 戻ったらオレ様のディナーになるんだからな」

そう言い残し、ゼルは黒い翼で大きな風を起こして飛び立った。

大きな蜜色の満月に向かってゼルは飛んでいった。

先ほどまでいた塔の窓が遠く遠く離れていく。

銀色の尾を引いて流れる星や、チカチカと瞬く星たちを追い越し、ぐんぐん空を昇る。

やがて淡い光を放つ月のそばの星の上で、長い髪の女性が顔を覆って泣いているのが見えた。頭にはまばゆい金色の冠が載っている。冠にはたくさんの宝石がちりばめられていたが、真ん中の部分に丸い穴が開いていた。

——あれがアリアドネだな。

ゼルはニヤリと口角を引き上げた。宝箱を手の平に載せ、女性の背後に近付く。そして近くの小さな星の上に降り立って翼をしまうと、おほんとお払いをした。

「あー、もしもし、そこの方。あなた様は偉大なる狩人ディオニシス神の妻、アリアドネ様ではありませぬか？」

——こんな感じでいいのか？

とりあえず、出来る限りていねいにゼルは話しかけた。アリアドネの背中がびくりと反応を示した。

「だ、誰……？ ひっく、わたくしを、ひっく、呼ぶのは」

「えー、わたしめはあく……いやいや、森の塔に住まう姫君の使いでございます。その方に頼まれてあなた様へ贈り物を届けにまいりましたでござる」

両手で宝箱を持ち、ゼルはうやうやしくアリアドネに差し出した。

「贈り物？」アリアドネが振り返る。

美しい女性だった。だがほっそりとした面は青ざめ、目は泣きはらして真っ赤であった。

「塔の姫というと……ひっく、クラリッサのことね。知っているわ。彼女からなの？」

「はい。アリアドネ様が毎晩しくしくと泣かれてござるので、これでさっさと黙りやが……いやいや、涙を止められればと」

宝石箱の真ん中に鎮座する真っ赤なルビーにアリアドネは「まあ」と感嘆の声をもらした。その反応を見て、意外に早く終わりそうだとゼルは思った。だがアリアドネは繊細な美貌を曇らせた。

「……これを、ひっくなくしたルビーのかわりにすれば、ひっく、いいというのね。確かに大きく立派……でも……ひっく、受け取れないわ」

「はあっ！？ なんでっ」

予想外の言葉にゼルは身を乗り出した。

「だってこれは私が夫からもらったものではないもの。かわりでは嫌なの」

「そ、そんなこと言わずに！ これも最上の品でござるよっ」

「いらないうたらいらないうの。クラリッサに返してちょうだい」

かたくなに首を振り、アリアドネは再びしゃくりあげ始めた。

「……おいおいねーちゃん」

ゼルの「お行儀よく」はそこで終了した。

「さっさと受け取りやがれ！ そうしないとオレがゴチソウにありつけねえんだよっ」

態度を急変させ、無理やり宝箱を押しつけようとする。

「きゃっ！？ 何をやるの、あなた！ 乱暴だわ……はっ！？」

悲鳴を上げてアリアドネが震えあがる。だが次の瞬間、彼女はゼルを見て顔をこわばらせた。

「あなた……似ている。似ているわ……。昔、私を捨てた男に」

「……はっ？」

「私を一人ぼっちで島に置き去りにして消えた男に……。あんなに愛していたのに、あんなに尽くしたのに……きいいいいっ！！」

カッと血走った目を剥いたかと思うと、アリアドネはゼルに襲いかかってきた。

「卑怯者！ 裏切り者！ 悪魔！ 悪魔っ！」

「うわっ！ なんだなんだっ！」

突然気が触れたように髪を振り乱し掴みかかって来たアリアドネの腕を払いのけ、ゼルは星から飛び降りた。翼をバタバタと動かし、夜空の海をもがくように逃げ出す。

「な、なんなんだあの女！」

果てしなく広がる森とクラリッサのいる塔が見える位置まで逃げ帰り、ゼルは大きく息をついた。

「捨てたとかなんとかわけわからんこと言いやがって……あっ！」

だがほっとしたのもつかの間、その手にしっかりと宝石箱を握っていることにゼルは気がついた。

「げっ、やべえ！ 持ってきちゃった！」

このままでは取引失敗だ。つまりはゼルの負け。悪魔が人間に負かされるなどあってはならないことだ。一族の恥だと、また仲間にバカにされる——だがその時ゼルの脳裏にある考えが閃いた。

「そうだ」宝石箱を開け、きらきら輝くルビーを黒い瞳に映す。

「こいつはオレ様がいただいちまおう」

見れば本当にうまそうな色とツヤをしている。王国の姫であるクラリッサが持っていたものだ。きっと最高級の品に違いない。極上のダイヤは惜しいが、今回は仕方ない。でもこのルビーなら盗む価値はありそうだ。

「食っちゃまえばこっちのモンだ。あの女にはちゃんと渡してきたって言えばいい——なんだか知らんが声もやんだしな」

アリアドネがいる方角からは、もうすすり泣く声は聞こえない。乱心したせいで、それどころではなくなったのだろう。だがゼルには好都合な成り行きである。これでクラリッサに勝つことが出来る。

ルビーをつまみ上げ、キヒヒと笑う。

その時甘い香りがふわりと鼻をかすめた。途端に空腹感がよみがえる。

「ああ、たまんねえ……いいニオイだ。よし、さっそくいただくとするか」

まずは腹ごしらえだ。大口を開け、ゼルはルビーを口の中に放り込んだ。

ころころと口の中で転がし、まずはその味を確かめる。

「う~~~~ん、甘いな.....甘い.....んんっ!？」

だが突然、ゼルはぐるぐると目を回し始めた。

なんだ？ 何かがおかしい。何か.....。やがてゼルはとんでもない事実を思い知らされたのだった。

「な、なんじゃこりゃ~~~~っ!!」

「——おお、夫殿が帰って来たのだな」

その頃、塔の最上階の窓辺。

クラリッサは金色の望遠鏡で、アリアドネの様子を窺っていた。

急に乱心し暴れ出したアリアドネのもとへ、夫であるディオニシスが帰ってきたのだ。途端にアリアドネは冷静さを取り戻し、再び涙を流しながら夫になくした宝石のことを打ち明けた。だが夫は怒らなかった。彼は胸元から小さな包みを取り出し、妻に見せた。その中には、アリアドネが落としたルビーが入っていたのだ！

こうしてアリアドネの冠には愛する人から再び贈られた真紅の輝きが宿り、彼女はもう泣く必要がなくなった。寄り添い合う二人を確認し、クラリッサは望遠鏡を下した。

「まったく、あの悪魔は何をしでかしたのだ。なぐさめるところか、怒らせるなど」

——実は初めからクラリッサはゼルの動きを追っていた。もちろん彼がルビーを渡せず逃げ出したことも知っている。

再び望遠鏡を空に向ける。すると聞き覚えのある絶叫が星天から響いてきた。

「はは、気付いたのだな」

それがゼルの声とわかると、流星のように儚い一瞬の笑みがクラリッサの白い顔の上をかすめた。

望遠鏡を置き、すぐ横に置いてあったハート型の箱をひざに乗せる。そして中から、まるで宝石のようにカットされた大きな赤いキャンディーを一粒取り出した。

「いちご味だ。美味だろう？」

星空に透かせば、まるで本物の宝石のようにきらりと光る。

——クラリッサがゼルに渡したのは本物のルビーではなく、王様のプレゼントであるこのキャンディーだった。

実に見事な一品だ。これを作った菓子職人に褒美を与えてほしいと、王様への手紙に書いた方がいいかもしれないとクラリッサは思った。

「うまかったな」

ゼルとの取引材料について考えた時、クラリッサの脳裏に浮かんだのはコルネリウスの言葉だった。

贈り物には送り主の“心”がこもっている。だからかわりはない。

その時アリアドネのことを思いついた。ゼルに彼女が絶対に受け取らないものを届けるよう頼めばいいのだと。

「それに結果的にもよかったようだな」

アリアドネの涙は乾き、星たちの囁き声も穏やかになった。そしてクラリッサの中にも不思議な気持ちが生まれていた。

「あいつは……また来るかな」

クラリッサは呟いた。それは初めての気持ちだった。体がそわそわとして浮き上がるような——落ち着かない気分。自分の足が床についているかをクラリッサは思わず確かめる。

「……また来るといいな。名前を聞かなくては。それに……」

ふと言葉を切り、クラリッサは甘いルビーを見つめた。確認するように左胸に手を当て、頷く。そしてきらめく星空へ向かって、言った。

「……あいつといると、“楽しそう”だ」

クラリッサの口元がやわらかく——ほころんだ。

それは彼女が“世界”と繋がった瞬間だった。

世話焼き魔一メイド

番棚葵

第一話 メイド・バイ・転入生

過去の自分を思い出せないとして。それで困る人間は一人もないだろう。

むしろ、下手に過去をほじくり返せば、自分にとって都合の悪いことまで思い出し、現在の平穏な日常に支障を来す可能性が出てくる。

だから、今が特に不幸でないのなら、昔は無理に振り返らなくてもいい。少なくとも僕——鎌井裕太はそう考えていた。

そう、彼女に出会うまでは。

○

「転入生を紹介する」

担任の先生がそんなことを言ったので、クラス中が一気にざわめいた。

小春日和の清々しさを湛えた朝の空気は、一気に霧散していく。

僕はぼんやりと先生の方を向いた。四十を過ぎた、平凡な中年男性。痩せぎすで眼鏡をかけている彼が、二年四組のクラスの皆から注目を受けていた。

いや、それは違う。皆が反応したのは、その先生に対してでなく、確実に「転入生」というその言葉なのだろう。

当然ながら、僕も少し興味がわいた。それまで寝そべっていた机の上から体を起こしたところで、ふと、後ろの席の奴が肩を叩いてくる。

「なあなあ、鎌井」

「なに？」

「転入生だってよ。美人かな？」

「美人って、女の子と決まったわけじゃないだろ」

「まあ、そうかも知れないけどよ。そう思う方がドキドキするじゃないか。可愛い女の子が入ってきて仲良くなったりして！」

彼にはひひとしまりのない笑みを浮かべると、僕の背中をばしばし叩いた。

「やー、いやが応にもテンション上がりますなあ。お前もそう思うだろう？」

しかし、僕は肩をすくめる。

「別に、そこまでは思わないな。僕はこういうの、あまりよく『知らない』しね」

「あ、ああ、そうか。お前は『そう』なんだよな。悪い、変なこと聞いて」

「そんな、気を遣わないでいいよ」

急に声のトーンを落とす級友に、僕は明るく言った。

そんなことを僕らが話し合っている間にも、他のクラスメートたちのざわめきは大変になっている。後ろの奴が言った通り、転入生には皆色々と期待しているらしい。

ほどなくして、先生が「静粛に」と生徒全員を沈めると、扉を開けて廊下を覗き込んだ。

「おい、入ってこい」

「はい」

その呼びかけに応えたのは、涼やかな少女の声だった。

次の瞬間、中に入ってきた人物、すなわち転入生を見て、クラス全員が息を飲んだ。

長く艶やかな髪は、ゆるやかにウェーブがかかっている。神が相当気を遣って配置したであろう顔のパーツを、愛嬌と恥ずかしさに彩られた微笑に変えて、静かに教室に入った。

特筆すべきは、我が校指定のセーラー服で包んでいる、その胸のふくらみだろうか。クラスの誰よりも大きいんじゃないか、これ。

僕らが色々な意味で息を飲み込んでいると、彼女はふと、首を動かし始めた。夏場の扇風機のように、ゆっくりと。

どうやら、困惑した表情で、僕らの顔を見回しているらしい。

まずい、胸に思わず目がいったことが、バレたのかな？

思わずそんな危惧を抱いてしまった、その時である。

「あああああああっ！」

彼女がいきなり叫び声を上げた。僕の方に指を向けて。

「えっ？」

「見つけたあ、やっと見つけました！」

い、いきなり何なんだ？ 何を見つけたって？」

しかし、僕の困惑はよそに、転入生はぱあっと顔を輝かせると、

「その顔、そのオーラ！ 絶対に間違いないです！ ずっと捜していたんですよ……会いたかったです、『ユタ』様！」

次の瞬間。その大きな胸が弾んだかと思うと、彼女は盛大にジャンプした。

いや、盛大なんてものじゃない。人間一人分の高さを優に超しているっ？

その身体はなおも上昇していき、

「ぐべはっ？」

……あ、天井に頭ぶつめた。

彼女は「おおおっ？」と悲鳴を上げながら、涙目になって一直線に床へと落ちた。そのまま、ぴくぴく、と身体を痙攣させる。下に机がなかったのが幸いだ。

教室内は突然の椿事に騒然としていた。それは当然だろう。

ふと、後ろの席の奴が、再び僕の肩をつついてきた。

「……なあ、鎌井。あの子、お前の知り合いか？」

「いや、知らない……と思うけど」

断定はできなかった。

その子のジャンプの軌道の先には、明らかに僕の席があったからである。

その後、転入生は改めて自己紹介をし、『海野紗理奈』と名乗った。

「この町には親の仕事の事情で来ました、まだ慣れていないのでよろしくお願いします」と、頭にたんこぶを作りながら言っていたのが、印象に残っている。

彼女はなおも僕とコンタクトを取りたいのか、ちらちらとこっちを見ていたが、頭を打ったことで幾分か冷静になったらしく、それは抑えているようであった。

もっとも。気になるというのなら、こちらも同じである。

なぜ彼女は僕を「捜していた」と言ったのか。そもそも、なぜ僕のことを知っているのか。その辺の事情は知っておきたかった。

しかし、授業中はもちろん、休み時間も彼女はクラスメートから質問攻めにあったり、友達になってくださいコールを男女問わずから受けたりで、なかなか身動きが取れずにいた。僕としても、その空気の中で「話をしよう」と切り出す勇気もない。

と、そのうちに。海野さんは業を煮やしたのか、とんでもない強硬手段に出てきた。

「もがもがもがっ？」

「あ、ちょっと、ユタ様。暴れないでください。持ち運びにくいですよ」

昼休み。なんと僕は、海野さんに屋上まで担ぎ運ばれていた。ご丁寧に縄でふんじばられて、猿ぐつわまでかまされた上で。

クラスメートの目を盗み、僕を縛り上げ、ここまで素早く移動したその手際は、鮮やかとしか言いようがない。だけど、他にやりようはなかったのだろうか？

しかし彼女は屋上で、僕の縄と猿ぐつわをほどくと、物憂げな表情で言った。

「ああ、ご無事ですか、ユタ様。お怪我とかありませんか？」

「ちょっ、自分で無理矢理拉致っておいて、心配そうな顔しないでよ！　そもそも、どうしてこんなことをするのさ！」

「だって、こうでもしないと、二人きりになれないじゃありませんか……私達の正体は、基本秘密なんですからね。話し合いにも場所を選ばないと」

ふくよかな唇の前に人差し指を立ててみせる海野さん。

しかし僕としては、その言葉には眉を寄せることしかできなかった。

「え、え？　正体とか秘密ってどういうこと、海野さん？」

「ああ、ここなら『サリナ』で結構です、ユタ様」

この子、訛でも入ってるんだらうか。時々発音がおかしい。僕の名前は「ユタ」じゃなくて「裕太」なんだけど。

「じゃ、じゃあ……紗理奈さん」

僕がつぶやくと、紗理奈さんは「何でしょう？」と微笑んだ。

どうして自分のことを捜していたのか、まずその理由から尋ねてみる。

すると、彼女は微笑を浮かべてこう答えた。

「それはもちろん、あなたのお父様に頼まれたからですよ」

「はい？　お父様っ？」

「そうです。そろそろ、お父様のお怒りも解けているようですし。お帰りになられてはいかがでしょうか？ 親子喧嘩で飛び出したままなの、後味悪いでしょう？」

「はあっ？」

僕は素っ頓狂な声を上げた。それほどまでに、彼女の言葉には納得がいかなかった。

何しろ、僕の両親は死んでいる『はず』なのだ。自分の目で確認したわけではないが、そういうことになっている。

それなのに、「お父様に頼まれたから」と目の前の少女は言っている。これはどういうことなんだろう？

「あの、それ、どういうこと？ その……僕は父親は死んだものと思ってるんだけど」

すると、目の前の紗理奈さんの表情が、みるみる悲しそうになった。

「まあ……ユタ様は、そこまでお父様のことをお恨みに？ 非道いですよ！ それは確かに厳しい方ですけど、でも……」

「いや待って。ごめん、紛らわしかった。そういう意味で言ったんじゃないんだ」

僕は慌てて両手を振った。「死んだものと思ってる」＝「死んだことにしたいほど憎んでいる」。事情を知らない人間が聞けば、確かにそうとも取れる。

でも、僕の場合は違った。本当死んだのかどうか、判別がつかないのだ。

僕は一瞬躊躇すると、思い切ってその理由を紗理奈さんに話すことにした。

「実は僕……記憶喪失なんだ」

僕には高校に入る前の記憶がない。

何かの事故にあったのか、町外れの河原で倒れているところを発見されたのだが、その時にはさっぱり記憶が流されていた。

その後、一応住居と名前は判明したが、両親はすでに亡くなっていることを僕は知らされた。それどころが、鎌井家に名を連ねる親族すべてが死去している。つまり、元々身よりのない存在だったらしい。おまけに中学時代以前の友達もまったくいなかった。

こうなってくると、何かに呪われているんじゃないかという気もしてくるのだが、ともあれ僕は自分の過去と、それを詳しく知りうる手段を失っていた。

「もっとも、昔のことを知りたいと思ったことはないけどね。今の生活が充実しているし。過去の僕が今の僕と同じであるとは限らないし」

説明を終えると、僕はそう言って肩をすくめた。

これは本心である。僕にとって過去を失うことより、今の自分が否定されることの方がよっぽど怖い。だから記憶を取り戻したいとか、そんなことは考えたこともなかった。

今が特に不幸でないなら、過去は無理に振り返らなくていい。それが僕の持論だ。

「まあ、どちらにしろ、僕が知りうる限りでは両親は死んでいるってことになっているんだ。だから紗理奈さん、違う人と勘違いしているんじゃないかな」

すると、紗理奈さんは口元を両手で覆って「まあ」と驚きの声を上げた。

「……なるほど。今度は、そういう設定で白を切り通すつもりなんですね」

「ちょっと待って！ どうしてそういう結論になるの！ 本当のことだよ、これ！」

とんでもない返答に僕は慌てたが、紗理奈さんは胸を張ると、得意げに言った。

「いえいえ、ユタ様の往生際の悪さは、昔から筋金入りですからね。他の人はともかく、この私は決して騙されたりしませんよ。記憶喪失のふりなんて利きません」

昔の自分は、そんなに信用ない人間だったのか。僕は、がっくりとうなだれた。

と、気づいて顔を上げる。

「紗理奈さん、その口ぶりだと僕のことを詳しく知ってるみたいだけど」

「当然。私は小さい頃からユタ様にお仕えしてきた、使用人じゃありませんか」

「使用人」

何なんだ、その一般的な男子高校生と無縁そうな言葉は。

昔の僕って、何者だったんだろう？ 初めて疑問を抱いた気がする。

僕が茫然自失としていると、ふと紗理奈さんは問い詰めるように僕を見てきた。

「ユタ様、どうしてもお帰りになりたくないのですか？」

「いや、その……まあ、できれば」

言葉を濁す僕。正直帰りたいとは思わない。紗理奈さんの言う「お家」へ帰ると、記憶が蘇り、今までの生活や思い出が失われそうなのが怖いから。

紗理奈さんは、そんな僕の顔を見つめていたが、やがて少しだけ嬉しそうな微笑を浮かべてみせた。

「そうですか、帰りたくないですか……よかったあ」

「……よかった？ 僕が帰らないと、君の立場上まずくはないの？」

僕としては助かるけど。

と、彼女は我に返ったように、こちらを見ると、慌てて片手を振った。

「え、あ、まずいです！ 本当まずいです！ まずいですが……ユタさまがどうしても帰りたくない場合の、別の任務も請け負っていますので」

「別の任務？」

「はい。ですから……ユタ様が帰りたくないなら、仕方ないなあ、ってことで。別の任務に移らせてもらいます」

どこか確信犯的な笑みを、彼女は浮かべた。頬を赤く染めながら。

それを見て。僕はなぜかいやな予感が、全身を駆けめぐるのを止められなかった。

○

残念なことに、予感は的中した。

「どういうこと、これっ？」

家の扉を開いたまま、僕は叫び声を上げた。

僕の家は、学校から徒歩二十分ほどの場所にある。閑静な住宅街の一軒家だ。

その家に帰ってくるなり、玄関先で妙な人物がうずくまっていれば驚く。

人物は紗理奈さんの顔を上げると満面の笑みを浮かべ、僕を見てこう言った。

「お帰りなさいませ、ユタ様」

僕が絶叫したのはこの後である。

しかも目の前の紗理奈さんは、黒を基調としたゴシックロリータ服とエプロンドレス、つまりはメイド服を装備していたのだ。

「え、え？ どうして紗理奈さんがここにいるのっ？ というか、その格好はっ？」

「お友達の方に、ユタ様の家を教えていただきました。この格好は着替えたからですよ」

「いや、僕が訊きたいのはそういうのじゃなくて！ そのメイド服を着て、なおかつここでひれ伏して、あまつさえ僕を出迎えている理由だよ！」

すると、紗理奈さんは不思議そうに首を傾げると、

「何を言ってるんですか。私がこの格好でいる以上は、ユタ様のお世話をしに来たに決まっているじゃないですか」

「は、はいっ？」

「ふふふ、驚いたでしょう。でも、これもあなたのお父様の命令なんです。もしもユタ様が帰ってくるつもりがないなら、そのつもりができるまで、ここでの面倒を見てやれと」

「な、なんだそりゃあっ？」

同級生の女の子に面倒見させるとか、何を考えてるんだ僕のお父様（仮）はっ？

というか、この部屋にすでに入っていたということは、合い鍵もどうにかして用意したんだろうか。つまり、

「まさか紗理奈さん、ここに住むつもり？」

「当然です。旦那様の——ユタ様のお父様の命令で、ユタ様が帰ると言わない限り、私もここにいなければなりません」

とんでもないことを言っている。

まあ、確かに僕自身、記憶が戻るのが嫌だから「帰る」と強く主張しなかったんだけど。まさか、それがこんな事態を生むとは。

今からでも遅くない、帰るって言うべきか？ そうしたら、こんな年頃の可愛い女の子と一つ屋根の下で一緒に暮らすなんて展開は……あ、ちょっと惜しくなってきたかも。このままだもいい気がするなあ。

「いやいや、それはよくないよ。僕がよくても、紗理奈さんに迷惑がかかる！」

「へ、私に迷惑？ どうしてですか？」

「だって、その……年頃の男女が一つ屋根の下ですよ？ 問題あるじゃない」

紗理奈さんは、その言葉に、鳩が豆鉄砲を食らったような表情をした。

次の瞬間には顔を赤くしながらもじもじとつぶやく。

「え、それって、その、私のこと、女の子として見てくれているってことですか？」

「そりゃ、もちろん」

可愛いし胸も大きいし——とは恥ずかしくて言えなかった。特に後者。

しかし紗理奈さんは、熟れたトマトのように真っ赤になると、やがて小さな手をきゅっと握りながら力強くうなずいた。

「あ、安心してください！ 私、間違いとか決して犯しませんから！」

「それ、どっちかというと僕の台詞……」

「だからユタ様。どうかここに置かせてください。このまま帰っては、旦那様に合わせる顔がありません」

「う、うん」

手を組んで目を潤ませる紗理奈さんの熱意に押され、また記憶が戻ることがわずわらしく感じたこともあり、僕はすっかり「帰る」と告げることができなかった。

「はい、ユタ様。あーんしてください」

「……勘弁して」

笑顔の紗理奈さんが、ずっと、差し出した箸を見て、僕は心の底からげんなりとした表情を浮かべてみせた。

ここは学校の教室で、現在昼休み中。周囲には人だかりができています。ざわざわとざわめき声と目線がこちらに向いて、やむことがまったくありません。

まあ、それはそうだろう。

友達が集まって、弁当やら購買で買ったパンやら広げている中、昨日転入してきたばかりの女の子と差し向かいに座り、あまつさえ箸を差し出されて「あーんして」なんて言われている男子生徒がいれば、それは目立つに違いない。

机の上には、弁当箱が二つ。ただし内容は同じだ。僕と紗理奈さん、どっちが作ったのか第三者が推測した場合、紗理奈さんの方と見る可能性が高いだろう。

つまり、客観的に見れば僕は女の子の手作り料理を、食べさせてもらっているということになる。うん、何も間違っていないけど。

「かーまーいっ？」

ふと、恨みと嫉みの混じった声が、僕の耳に届いた。

ギャラリーの中から一人の生徒が進み出て、僕の肩をぽんと叩く。そらきた。

「……何さ？」

「どういうことなんだ、これは？ どうして、お前はいきなり海野さんといちゃいちゃしてやがりますか？」

「どうしてって、僕が訊きたいよ」

僕はがっくりとうなだれた。周囲の人間も、目線で同じようなことを語っているからだ。

ため息を吐くと、目を半眼に細めて紗理奈さんに訴える。

「だから紗理奈さん、こういうのはいいって。自分でやるって。そこまでしてもらわないんだよ」

「でもでも、ちゃんとお世話をしないと旦那様に叱られます」

二人でこそこそと囁き合う。

皆の手前、紗理奈さんがうちに住み込んで、僕の世話をしてくれることになったのは内緒にしているのだ。

実際、昨日から紗理奈さんは何かと甲斐甲斐しく働いてくれた。夕食もちゃんと作り、ため込んだ洗濯物は洗っておいて今朝のうちに干し、散らかっている部屋を手際よく片づけ、お風呂も沸かしてくれる。

しかし、ここまでなら「おお、プロの家政婦だ」と感心するだけで終わるのだが——彼女はもうも、手加減という言葉を知らないようだった。

『はい、ユタ様。この煮物美味しいですよ、あーんしてください』

『あ、ほっぺにごはんつぶついてます……はい、取れました。ぱく』

『ユタ様、お湯加減どうですか。よろしければお背中を流しますけど。え、いい？ せっかく服脱いでバスタオル巻いてきたのに……って、あれ。ユタ様、鼻血ですか？ あまり入りすぎるとのぼせますよ、気をつけてください』

『ユタ様、寝づらいようだったら、添い寝してさしあげますけど……何考えてるんだって？ どうしてそんなに怒るんですか、小さい頃はよくしてあげましたのに』

これらの台詞すべてを、純真な瞳で言っただけなのである。

世話を焼くにもほどがあるってというか、普通ここまでできない。

若干嬉しくもある反面、どうも行動のすべてが心臓に悪くて——僕はため息を吐くと、とりあえず当初の問題を片づけるために、なおも箸を突き出している紗理奈さんに言った。

「紗理奈さん、もういいって」

「あーん」

「いや、だからね。後は自分でできるから」

「あーん」

「その、クラスメートの目もあるし、だから……」

「あーん」

結局。そのおかげで食いつくことになり、僕はクラスメートの喝采と、羨望+嫉妬の視線を浴びることとなった。

ふと、不思議そうに紗理奈さんが首を傾げる。

「変ですねえ、周りが騒がしいですけど。何かあったんでしょうか？」

「……君のその感覚が、一番変だと思うよ」

僕は再度、深々と嘆息するのであった。

その後も紗理奈さんは、何かと過剰に僕の世話を焼こうとし、そのたびに僕はクラスメートの注目を浴びた。

その都度、僕は表情で辟易としてみせたけど、実は内心はまんざらでもなかった。

何せ、こんな可愛い子が世話を焼いてくれるのだ。むしろ幸せと言える。

だけど、この時の僕は気づいていなかった。紗理奈さんが運んできたのが、彼女自身の奉仕精神だけではないことを。

記憶を失ったまま続くはずの、のんびりとした日々は、終わりを告げようとしていた。

○

紗理奈さんが僕の面倒を見てくれるようになって、三日が過ぎた。

僕も最初は戸惑っていたが、やがて順応というか、彼女がいる生活に何の疑問も抱かなくなってきた。

紗理奈さんは一緒にいて楽しいし、本当に気が利くので助かる場面も多い。ちょっと過保護気味に接してくるのにはまだ慣れないけど、それでも彼女との暮らしには何の不満も抱かなかった。

不満どころか、こんなに幸せでいいのかな、と思ったほどである。

そんな、ある日の夜。僕は風呂場で、久々に悲鳴を上げるはめになっていた。。

「だ、だからいらないって！ 背中とか流してもらうのは！」

「ダメですよ、私もう我慢できません！ だってユタ様、きちんと洗えてないっぼいですもの。髪とか適当に洗ってるんじゃないですか？」

「だからって、裸にバスタオルだけってのはまずいって！ せめて水着とか着てよ、というか僕にも着させてよ！」

「私、そんなの持ってきていません！」

「えええええっ！」

そう。入浴中、強引に紗理奈さんが風呂場に乱入してきて、「ユタ様を洗いたいです！」とゴネ始めたのだ。どうも、記憶を失う前には普通にやらせていたらしいけど……本当、何者だったんだよ、昔の僕。

ともあれ、意地を張られては僕も強く言うことはできない。僕は自分だけ水着を着け、できるだけ後ろを見ないようにしながら、頭を洗ってもらうことにした。

紗理奈さんの細い指が、僕の髪を優しく、しかし力強くかき回してくれる。

あれ、何だろ。これって無性に気持ちがいい……。

「かゆいところとかないですか、ユタ様？」

「うん」

「じゃ、お湯かけますね」

そして洗面器に張った湯で、シャンプーを洗い流してくれた。ああ、生き返る。

ふと、放心状態の僕に、紗理奈さんが世間話のように語りかけてきた。

「ところでユタ様。そろそろお家に戻るつもりになりましたか？」

「え、あ、いや……その」

「そうですか、まだ戻る決意がつきませんか。なら、まだ私はお世話しないとですね」

僕としては、自分が本当に記憶喪失で、かつ、記憶を戻さず今の生活をそのまま続けたいという旨を、どう説明しようかと悩んだのだが。彼女は違うふうにとったらしい。

まあいいか。紗理奈さんがそのままいてくれるなら、僕の望みは叶ったも同然だ。

僕はそんなことを考えてしまい、ますます身体が弛緩する。

と、紗理奈さんが再び声をかけた。

「ちょっとすみません。ユタ様。足を変化させてもいいですか」

「うん、いいよ……って、え？」

頭がぼおっとしている僕は、その言葉に一も二もなくうなずき、それからやっと「変化」という言葉の違和感に気がついた。

次の瞬間、僕の身体の横手に、紡錘形の青い物体が現れた。薄く虹色に光ったうろこがついており、先端には巨大な扇が二股に分かれたような、ひれがついている。

「え、えっ？」

僕は禁忌を解いて、後ろを振り返った。思わず絶句する。

紗理奈さんのバスタオルの下側から、まごう事なき魚の下半身がのびているではないか。

いわゆる、おとぎ話の人魚という奴だ。

「いやー、湿気が多いところでは、やっぱりこっちの形態が楽ですよ。ってあれ、ユタ様？ どうかしました？」

「ど、どどどど、どうかしましたって、さ、紗理奈さん、そそそそそれっ？」

僕は全力で、風呂の扉に向かって後ずさった。先ほどの気分の良さなど、とっくに消えている。目の前に人外がいる恐怖。それが僕の神経を凍らせていた。

紗理奈さんは苦笑すると、

「ユタ様、何をそんな大げさな」

「お、大げさって、おかしいでしょ！ こんな生やして！ 君、本当に人間なのっ？」

「人間も何も、私は元から……え？」

ふと何かに気づいたように首を傾げ、うつむき熟考し始める。

「……ちょっと待ってください、いくらなんでもそのリアクションは、人間くさすぎる気がするんですが。まさか」

次には顔を伏せたまま、彼女は真剣な声で僕に尋ねてきた。

「あの、今さら確認ですが。あなた、ユタ様ですよ？」

「え、えっと、その……」

僕が口ごもっていると、目をすわらせながら、その白くて細い指を一本立てる。

「問その一。魔界とは何か」

「え？」

「悪魔や魔物、妖精達が住む世界のことです。では、問その二。その世界の王子にして、魔界を統べる魔人族の正統な末裔とは誰か。わかりますか？」

「……えっと、よくわかりません」

ちーん。そんな鐘の音が、鳴った気がする。

次の瞬間、紗理奈さんはゆっくりと顔を上げた。

その顔は、怒りと恥辱で真っ赤に染まっていた。

「まさか、本当に人違い……顔もオーラも似てるのに、あなたはユタ様じゃないっ？」

「ちょ、ちょっと待って、だから僕は……」

「そ、そんな、今までずっとユタ様だと思ってたのに！ しかも人間でありながら、魔界のことを知りましたね、今！ あまつさえ、私のは、肌まで見てえっ！」

「ええええええええっ？」

何だよ、それ！ 混乱しているのはわかるけど、その言い分は納得できない！

「ちょっと待ってよ！ 勝手に魔界とかについて話したのはそっちだし、風呂場に乱入したのもそっちじゃないか……というか、魔界の王子って、結局何なのさ！」

「それが私の探していた方なのです……もう一度尋ねます、あなたは魔界の王子にして魔人族の末裔、『ユタ』様なのですか？」

「わ、わかりませんっ！」

「じゃあ、やっぱり違うんですねっ！ 違うのに、黙っているなんて！ 私のこと、ずっと騙していたんですね！」

「いや、だから最初から言ってるでしょ！ 僕は記憶が……」

だが、本人はそれ以上聞いてはくれなかった。

右手を胸元でかざすと、何ごとかつぶやく。次の瞬間、彼女の手の中に水がわき出たかと思うと、それはすぐに短剣の形へと変化した。

それを両手で突き出すように構えて、すわった目つきで、こちらをにらんでくる。

「あなたがすべて悪いとは言いません。ですが秘密を知られたからには……死んでもらいます」
な……？

「な、な、何じゃそれえええええっ！」

とりあえず、言いたいことは色々とあったけど。

僕は素早く浴室の扉を開け、外へと脱出した。

○

水着を着ていて良かった！

住宅街を人気のない森の方角へと逃げながら、僕が考えたのはそのことだった。

全裸で走っていたら、今頃警察のお世話になっていただろう。まあ、水着でも際どいところだとは思うけど。

だが、そんなことを僕が案ずる必要はないのかもしれない。

何しろ後ろから追いかけてくるのは、下半身が魚になっている、バスタオルを巻き付けただけの少女なのである。

それが、ぴよんぴよん、と器用に尾びれを弾ませながら、こちらに向かってくる。しかも結構速い。

「こらあ、待ちなさい！ 逃げても無駄ですよ！ 私は人魚族の中でも、ドルフィン種とトビウオ種のハーフなんですから！ ジャンプは得意なんです！」

「ああ、それで転校初日の時、あんなに高くジャンプしてたのか」

などと、妙に納得するヒマもなく。僕は彼女の言葉を無視して、ひたすらに走る。

当たり前だ、命は惜しい。

森の近くには、お年寄りが散歩を楽しむような遊歩道のある公園があり、そこまで何とか逃げ込むことには成功した。

しかし、後ろから紗理奈さんがまだ追いかけてくる気配がある。どこかでまかないと、追いつかれるのは必至だ。

僕は周りを見回してから、そばにあったベンチの下に素早く隠れた。

それに気づかなかったのか、紗理奈さんは「待てえ」とか叫びながら、過ぎ去っていく。

(助かった。後はしばらくしてから、このベンチを出て、それから……)

と、僕が考えをまとめ始めた、その時である。

「きゃあああああああああっ！」

「えっ？」

夜の闇を切り裂くように、紗理奈さんの悲鳴が響いた。近い。

僕はこっそりベンチの下から、顔だけを覗かせてみる。心臓が止まりそうになった。

外灯の灯りの下で、紗理奈さんが首を?まれて持ち上げられていた。バスタオルはかろうじてはがれてなかったが、いつの間にか戻った足が、ぶらんと垂れ下がっている。

問題は紗理奈さんを持ち上げている奴で、そいつは巨大な二足歩行のトカゲの姿をしていた。着ぐるみとかでは決してない。岩のようにごつごつしたその皮膚は、確かに生気をたたえている

○

化け物だ！ 紗理奈さん以外にも、人外の存在があったんだ！

立て続けに起きているファンタジーな展開に、僕はめまいを起こしそうになる。ごく最近まで、何の変哲もない日常を送っていたはずなのに。

どこで一体こうなった？

幸い、向こうの人外達は、こちらに気づいていない。僕は息を潜め、二人の様子を見る。

「これはこれは、面白いものを見つけたな。お前、人魚族のサリナじゃないか」

トカゲ男が、にやりと笑って、ちろっと小さな舌で自分の唇をなめ回した。

紗理奈さんがもがきながら、苦しそうにうめく。

「あなた、竜人族……！ なぜこの世界に……っ？」

「魔人族の王子が、家出してここに来ているって情報を手に入れてな。捜しに来たのよ」

「……ど、どうして？」

「決まってる。王子ともなれば、重要な人質になる。確保しておけば、切り札になるだろう？

魔人族に下克上するためのな！」

そう言って、トカゲ男は、紗理奈さんを地面に突き飛ばした。彼女はどさっと地面に倒れ込み、苦しそうな声を上げる。

「あ、あなた……じゃあ、竜人族は魔王様を裏切るつもりでいるの！」

「当たり前だ。魔人族だけが魔界を支配している現状に、満足できるわけがない。そんなものに甘んじているのは、お前ら一部の弱っちい魔物くらいなもんだ」

紗理奈さんとトカゲ男の会話から察するに。どうやら魔界では、ヤクザ同士の抗争みたいなものが種族間で行われているらしい。で、今一番勢力が強いのが魔人族と。

……そんなものの王子と自分は間違えられていたのか。今さらだが、ぞっとする。

と、トカゲ男は、目を細めて紗理奈さんを見ると、侮蔑するような口調で言った。

「お前のことは知っているぜ。人魚族の王家の出自でありながら、魔人族の王のどら息子の世話係をしているんだってな？」

「え、ええ……」

「お姫様が下働きとは、卑屈な一族だ。お前らそんなに魔人族が怖いのか？」

辛辣なその言葉に。しかし、紗理奈さんは真っ直ぐな目で叫び返す。

「違う！ 私は自分から申し出て世話係になったの！ だってユタ様は、私には優しくったんだから！ そんなユタ様の側でお役に立ちたいと、自分で思ったんだから！」

(あ……)

ずきっ。僕の胸が痛んだ。

彼女と、魔界の王子というユタの間に、どんなドラマがあったかは知らない。

しかし、紗理奈さんがユタを慕う気持ちは本物だ。なら、僕がユタじゃないと知った時の、彼女の絶望はどれほどのものだっただろうか。

そして僕は、彼女のその気持ちをずっと利用していたのだ。自分がユタであるかどうか確認もせず——まず違うだろうが——記憶喪失であることを言い訳にして、彼女を都合良く騙し続けていた。

本当に、僕はここに隠れていていいのか。その資格があるのか。

自省のあまり、そんなことまで考えたその時。

「きゃんっ！」

またも黄色い悲鳴が聞こえた。思わずベンチの下から上半身をのぼし、そちらを向く。

トカゲ野郎が、倒れてる彼女に蹴りを入れたのが見えた。

竜人族は、冷たい声でつぶやく。

「まあ、お前の意志なんてどうでもいいんだよ。本題に入ろう、ユタはどこだ？ お前がこの世界にいるってことは、ユタもこっちに来てるんだよな？」

「そ、それは……」

「おっと、待った。やっぱり今すぐ答えなくていい」

勝手に質問をしておいて、勝手に打ち切り、トカゲ男は品のない笑みを浮かべた。

好色な視線がじろじろと、紗理奈さんの身体に注がれている。

「話を聞く前に、ちょっと楽しませてもらおうかな」

「え……？」

「お前ら人魚族は、体つきなら魔界一だ……しかも、そんな体に薄布一枚なんて、挑発的な格好しやがって。食べてくれって言わんばかりじゃないか」

その発言に、僕の背筋は凍り付く。食べてくれとは、つまり、その……！

僕の考えを裏付けるように、突如トカゲ男は紗理奈さんを組み伏せた。

悲痛な叫び声が、夜の空気を叩く。

「い、いや、やめてっ！ 何するのよ、この変態！」

「抵抗するなって、すぐに済むからよ」

(なっ、こいつ……！)

その竜人族の下衆な言動に。僕の頭の中が真っ白く燃えた。

頭に血が上るといのは、こういうことなんだろう。

僕は記憶を失ってから、困ることは何一つなかった。つまり、何かに対して激しく怒りや憤りを覚えることも、なかった。

だから、こんな感覚は久しい———というか、記憶を失ってから初めてなはずだ。

その感覚を、さらに激しく燃焼させる声が、僕の耳に響いた。

「いや、やめて、誰か助けて……………ユタ様あっ！」

自分の世話を、甲斐甲斐しく焼いてくれた少女。

いつも笑顔で、一生懸命に世話をしてくれた少女。

すべては勘違いからきたものだったけど……それらが今、汚されようとしている。

僕の意識は、さらに白い炎に包まれていった。

その白い感覚の奥底で、僕は誰かの声を聞いた気がした……。

「絶対に、許さねえっ！」

動きが止まった。紗理奈さんを組み敷く竜人族と、それに抗う彼女の動きが。

僕は戸惑っていた。いつの間にか自分が、竜人族と紗理奈さんの前に立っていたからだ。

ひょっとして、今の声は自分が出していた？

ふと。お楽しみを邪魔されたからか、竜人族が機嫌悪そうにこちらをにらんでくる。

「あ、何だお前は？ 人間か？ 俺達に何か用か？」

「え、えっと、その」

そんなの、僕が知りたいんですけど。

というのも、威勢よく叫んで出てきたのはいいものの、目の前の人外が怖くて、僕はまともに動くことすらできなかつたのだ。

できることと言えば、かすれた声を情けなく絞り出すくらいである。

「さ、紗理奈さん、逃げて」

「……え？」

「早く、逃げるんだ……僕は君を騙すつもりなんてなかつた。本当に記憶がなかつただけなんだよ。でも、そのことを利用して、自分の過去を確かめようともせず、君にずるずると甘えていたのは確かなんだ。殺されてもしょうがない」

「それは……」

「だから、君は逃げて！ 僕がこいつに殺されている間くらいは、時間稼げると思うから、だから……！」

そして、がちがちになりながら、僕はなけなしの勇気で一歩足を踏み出した。

竜人族は面白そうに笑いながら立ち上がり、こちらに向き直る。

「ほう、弱っちい人間にしては、骨がある奴だな。面白え……」

そして、その手に生えている爪を、しゃらん、と音を鳴らして構えた。

「せめて、楽に殺してやるよ！」

「駄目！ その人を殺しては駄目え！ あなたも逃げて！」

紗理奈さんが、必死に叫ぶ声が聞こえる。

ああ、許してもらえたんだ。僕はそう考えて、少し安堵した。

これで、後は彼女に逃げてもらえれば、サリナも無事に……。

(うん？ サリナ、だって？)

その言葉に。ふと、僕は引っかけかりを覚えた。

そうだ、彼女は海野紗理奈じゃない。本当の名前はサリナなんだ。それが何故か、しっかりと、心に空いている記憶の穴に当てはまった。

じゃ、僕は？ 連鎖的に考えていく。鎌井裕太は誰なんだ？

違う、僕は裕太じゃない。僕は初めて、自分を否定した。本当の自分を知るために。

知りたい、自分が何者なのか。それで、この状況を打破できるような気がしたのだ。

例え、そのことで、穏やかな日常に戻れなくなったとしても。

そして。竜人族が、右手のかぎ爪を振り上げた。

「死ねええええっ！」

刹那。頭の中で何かが弾け、僕は両腕を前に突き出した。

肌が赤銅色に変わり、髪も白色に染まり、全身に刻まれた魔法の刺青が光り輝いているはずだ。これが僕の、本来の姿である。

歯を食いしばり、精神を手のひらに集中させる。

記憶が確かなら、これでいけるはず！

「いけええええっ！」

「なっ？」

相手が疑問の声を上げる暇もあらばこそ。僕の両手から大量の白い光が、すべてを焼き尽くす白い炎が溢れ、トカゲ野郎を包み込み、その姿を灰燼へと変えた。

「……やったっ！ 間違いじゃなかった！」

「え、今のは……魔人の力？」

紗理奈さんが——サリナが呆然とこっちを見ているのが、確認しなくてもわかった。

○

「じゃ、じゃあっ！ あなたは結局、本当にユタ様なんですかっ？」

「うん。たぶんね」

僕は自信なさげに言って——実際に自信はなかった——サリナの方を見た。

竜人族を屠った後、僕らは僕の家へと戻ってきた。サリナは少し戸惑っていたが、格好が格好なのと、今の僕に何かを感じ取ったのか結局ついてきた。

そして僕はサリナに告げた。「ユタとしての記憶を、少し取り戻した」と。

「ただ、自分がユタらしき存在であるということと、力の使い方の一部を理解できただけで。それ以外のことはさっぱり。魔界での暮らしとか、全然覚えてないよ」

そう告げると、サリナは困惑した顔で尋ねてきた。

「そもそもユタ様、どうして記憶を失ったんですか？ それも思い出せませんか？」

「ああ、それは大体思い出せた。僕は父親と喧嘩したって、サリナも言ってただろう」

「はい」

「その後、僕はこの世界に来て、しばらくここに住もうと思ったんだ。そして、そのために術を使って、人間『鎌井裕太』という存在をこの世界に作り上げたんだけど……その術がちょっと強力にかかりすぎたらしい」

術の効果は僕自身——ユタ自身にも及び、僕は鎌井裕太という人間に完全になりきり、そのために記憶が封印されたというわけだ。なんとも間抜けな話ではある。

なお、これらの仮説は蘇った記憶の断片を集めて組み立てたもので、実は僕自身あまり信じきれていない。自分が本当にユタであるかどうか、半信半疑の状態である。

何しろ、今の今まで、こんなファンタジーな世界とは無縁だったのだ。それに基づいた推測をしても、今一ぴんと来ない。全部夢でした、の方がまだリアリティがある。

まあ、ユタがいないとサリナが悲しむような気がするから、せめて自分がユタであるということだけは信じていこうと思うけど。

そのサリナは、僕の説明を聞いてぽかんとしていたが、やがて嬉しそうに微笑んだ。

「でも、何はともあれよかったです、ユタ様が本当にユタ様で……あ」

急に表情を暗くして、どよん、とうつむく。泣きそうな、暗い声を出すと、

「よくないですね、私……すっかり取り乱して、ユタ様を殺そうとしたんですから」

「ま、まあ、あれは、はっきりとしていなかった僕も悪かったというか」

「いいえ、あれは完全に私の落ち度！ こうなった以上は、先立つ不幸を……！」

「う、うわああ、ちょっと待ったあっ！」

どこからともなくあの水の短剣を作り出して、自分の喉元につきつけるサリナを、僕は必死に押し止める。

「もういいから、気にしていないから！ だからやめてよ！」

「……でも」

「どうしても気になるっていうのなら、そうだね……僕の記憶が完全に戻るまで、僕の世話を焼いてくれないかな」

その言葉に。サリナは短剣を引っ込めると、ぱあっ、と輝く瞳でこちらを見つめた。

「いいんですか？ またお世話させていただいて」

「うん」

「ありがとうございます、ユタ様！ 私、一生懸命に頑張りますから！」

そう言って、とびきりの笑顔を浮かべてみせる。

それを見た僕は、胸の中がほんのりと暖かくなるのを感じていた。

過去の自分なんて知らなくてもいい、僕はそう思っていた。

でも、それは少し違うかもしれないと、今は考えを直している。

だって、そうだろう？ こんな可愛い女の子との思い出があるとするなら、ちっとも浮かんで来ないのは、明らかにもったいない。

「それを取り戻すためにも、思い出さないといけないな……ユタの記憶を」

僕はそう誓いながら、改めてその健気な世話役を、迎え入れることにしたのであった。

……約二年間の、平穏な日常に別れを告げて。

王子と私とご主人様

広野未沙

第一話 王子は空から降ってくる！

「あなたには魔法使いの素質がありますよ」

昔。知り合いだった魔法使いのおばあさんに言われた言葉。

その言葉を、今でもレーアは信じている。

* * *

月がぼっかりと顔を出す夜。

トルメントウム王国の王都テアーマにあるフォルセル家の屋敷には、庭の隅で魔法の練習をしている使用人の少女が一人いた。

着替える時間も惜しくて、服は紺色の衿の詰まったワンピースに白いエプロンという使用人の制服のまま。月明かりと同じ薄い金色のくせのない髪は、後ろできっちりとまとめられている。仕事が終わってみんなが寝静まる時間を見計らい、こっそり屋敷を抜け出してきたのだ。

庭師の芸術に邪魔にならない場所はきちんと心得ている。

いつもの場所にランプを置く。給金を貯めて買った大切な大切な本は汚れたりしたら嫌なので、部屋に置いてきた。その代わりに、自分で書いた走り書きのメモを用意する。

すう、と少女は大きく息を吸い込む。

「魔の向こうにすみし者よ。この声を聞け」

さすがに近所の屋敷も寝静まっている時間だ。一つ一つの屋敷が大きいとはいえ、声を張り上げたら苦情が来るのはわかりきっているので、小声でこっそりと唱える。

もう何度も何度も口ずさんだことがある呪文。

「私に見えない羽を与えよ」

少女は固く目をつむり、何かが起こるのをひたすら待つ。

普通の魔法使いが唱えたのなら、ふわりと術者が地面に浮かぶはずの魔法だ。

しかし、いくら待っても、少女の足はしっかりと地面についたまま。

根気強く待ってみたが、あまり時間差で起こる魔法というのも聞かない。少女は、大きくため息をついた。

「また、失敗かあ」

少女の名前は、レーア・ブランデル。十七歳。今日も熱心に魔法の練習をしているが、彼女の魔法が発動したことは、未だかつて、ない。

レーアにとって魔法の失敗は日常茶飯事だ。落ち込んでなどいられない。次の挑戦へと心を切り替える。

レーアにとって、魔法は夢とロマンが詰まったものだ。このトルメントウム王国では魔法使いの地位が高い。魔法さえ使えれば、きっとレーアの人生はがらりと変わるはずだ。

よし、とレーアはこぶしをつくって気合いを入れる。

ふいに、後ろから声をかけられた。

「今日も熱心だね。レーア」

「イスト様！」

慌てて振り返ると、そこにはすでに夜着に着替えたイスト・フォルセルが立っていた。

イストはフォルセル家の一人息子。使用人を人間とも思わない主人たちが多いとも言われている中、イストはこうして使用人にも気さくに話しかけてくれる。

太陽の光のように明るい金色の髪は少しくせがある。整った顔立ち。空のように爽やかな青い瞳。パブリック・スクールを卒業したあとは、家業である紡績会社の手伝いをしている。仕事で国中を飛び回る父親の代わりに、王都のこの屋敷を守るのも、イストの大切な役目の一つだ。

「眠れなくて散歩していたら、君の姿を見かけたものだから。魔法は発動した？」

魔法の練習をイストに目撃されるのは、何回目だろうか。もう両手では数え切れない。いくら失敗しても練習を重ねるレーアを、イストは面白がっている節すらある。

「えっと……」

レーアは視線をさまよわせる。それだけでイストはわかったらしい。

「そうか。残念だったね」

いつかいい報告をしたいと思っているのだけれど、その日は遠いようだ。

「でも、レーア。もし、仮に魔法が使えたとしたら、仕事、やめちゃうのかな？ そんなにうちの待遇は不満？」

どこか悲しげな表情で、イストが呟く。レーアは慌てた。

「べ、別にそういうわけじゃありません！」

フォルセル家の待遇に文句はない。むしろ恵まれすぎていると思っているくらいだ。

ただ、魔法は、それこそ、レーアの夢で。使えたあとのことを、具体的に考えているわけではない。

レーアの慌てぶりが面白かったのだろうか。イストがくすくすと笑う。

「冗談だよ。がんばるのもいいことだけど、明日の仕事もしっかりね」

「はい！ もちろんです！」

レーアが元気よく答えると、イストはじゃあね、と手を挙げて屋敷へと向かっていった。

レーアはその後ろ姿をじっと見つめる。

やっぱりイスト様は素敵な方だ。使用人でも下っ端の自分の名前を覚えていてくださるだけではない。こうやって声までかけてくださる。

(まあ、それも今のうちだけなんだろうなあ)

イストにはまだ婚約者がいない。最近富を持った中流階級の間人がそうしているように、イストも近々没落貴族の娘を迎えるんじゃないか、なんて噂が立っている。

ちょっと寂しくなってしまうと、レーアは首を振った。

別にイスト様が奥様を迎えると決まったわけじゃない。

「さて、と」

気分を切り替えるために、わざと声に出す。

「次は何の魔法を使おうかな」

さっきと同じように空飛ぶ呪文を唱えるのもいい。けれど。

最近、ずっと同じ魔法ばかりを唱えてきた。ここで少し気分を変えてみるのもよいかも知らない。いつもとやり方を変えて、ぱっと成功する。ない話ではない。

何を唱えようか、頭の中の呪文ストックを検索する。とはいっても、レーアが完全に暗記している呪文など、数えるほどだ。

部屋に戻って本で調べようか。そういう考えが頭をよぎったけれど、あまり夜遅くまでやっていると、明日の仕事に影響する。

よし。レーアは決断した。少し前に、暗記した魔法。成功すれば、鳩が飛び出す……という、ちょっとした余興用の魔法だ。でも、偉大な召喚魔法の基礎の基礎。

「魔の向こうにすみし者よ。この声を聞け」

魔の向こう、とは、人間界と隣り合うもう一つの世界、魔界のことだという。強大な力を持つ魔物たちが棲んでいる、とされている。

魔法とはその魔界の生物たちに力をほんの少し借りて発動するのだ。

もっとも、人間、誰にでも魔法が使える、というわけではない。魔界に声を聞いてくれる相性のいい魔物がいないと魔法は発動しない。力を貸してもらえないからだ。

——レーアは昔、魔法の素質がある、と言われたことがあるのだけれど……。

「ここに小さき鳩の姿を現せ」

レーアはじっと待つ。ひたすらに待つ。

夜行性の鳥の声が聞こえる。庭の木々が穏やかな風にゆらされる。

「はあ」

しびれを切らせたレーアは、大きくため息をついた。

やっぱり何も起こらない。自分には魔法の才能がないのだろうか。

昔、知り合いの魔法使いのおばあさんに魔法の才能がある、と言われて、その気になったのはよいものの、一度もレーアの魔法が発動したことはない。

これ以上は明日の仕事に支障が出る。おとなしく帰ろう。

そう思ったときだった。

「おい。そこの女！」

聞き慣れない声が、上から降ってきた。女、というのはきっとレーアのことだろう。庭に他に人がいる気配はない。レーアは声のした方を見るために、顔を上げる。

そして、言葉を失った。

レーアの視界に飛び込んだのは、見知らぬ少年だった。

月明かりに照らされる少年は、気持ちよさそうに両手足を伸ばしていた。黒いマントがはためく。その姿は、優雅に空を飛んでいるようにも見える。

(どうということ?)

どこから飛び降りてきたというのだろうか。

たとえば隣の未亡人が一人住むキプルソフ家なんかは、三階建てで十分に高い。けれど。

少年の様子を見る限り、事故で落ちてしまった、というわけではないようだ。

「女！ 聞こえないのか！ そこにいると着地の邪魔だ！」

鋭い声が飛んできて、レーアは我に返った。

この少年は、一体何者なのだろうか。

(もしかして……賊?)

レーアが仕えるフォルセル家は、紡績事業の成功で、お金だけならある。下手な貴族よりも成功した中流階級の方がお金を持っている昨今。賊の類に狙われたって不思議ではない。実際に、過去何度か騒ぎも起きている。

賊にしては目立つような気がするけれど。でも、時間が時間だ。きっとレーア以外の人間は、少年の姿を見ていないだろう。

(ど、どうしよう)

賊だったら、使用人として侵入を許すわけにはいかない。でも、空から侵入してくるような相手だ。魔法を使える可能性は高い。

こんな事態に直面するのは、初めてで、どう動いたらよいのかさっぱりわからない。

そんなレーアの混乱を知ってか知らずか、少年は、音も立てずに優雅に地面に降り立った。

「ここが人間界か？」

きょろきょろと辺りを見回す。

こんな状況でなかったら、レーアはぽわーっと見ほれてしまっていたかもしれない。

背は高いが、体格自体はそこまでがっちりしているわけではない。年齢自体はレーアと同じくらいだろう。彫りが深く、どこか陰のある顔立ちには、やや幼さを残している。鋭く切れ長な瞳。男性にしてはやや長めの髪は黒くてつややかだ。流行など関係なさそうな真っ黒なマントが目を引き。

けれど、今のレーアはそれどころじゃない。どうやって逃げて、そして侵入者を知らせるかで頭がいっぱいだった。

少年がおもむろにレーアを見る。思いの外、鋭い視線が向けられて、レーアは悲鳴めいた声を出しそうになってしまった。

「おい。お前」

「わ、私ですか！」

「ここは、どこだ？」

「ここは……」

フォルセル家の名前を出していいものか迷う。第一、ここがどこかわからずに、少年は侵入し

たというのだろうか。まあ、立派な家の外観だけで選んだ、ということも考えられなくはない。

「ここは？」

重ねて問われて、レーアは覚悟を決めた。

「トルメントウム王国の王都テアーマです！」

レーアなりに頭を回転させたつもりだった。間違っただけとは言っていない。

レーアはおそろおそろ相手の顔を伺う。聞いているのはそんなことじゃない、と怒鳴られるのだろうか。

だが、予想外の反応を少年はする。あごに軽く手を当てて考え始めたのだ。

「トルメントウム王国。知らないな。ということはつまり、脱出成功か」

レーアには全く意味不明のことをぶつぶつと呟いている。

(国の名前を、知らない？)

レーアの戸惑いも知らずに、少年は笑顔をレーアに向けた。

「お前の名前は？」

「私の名前、ですか？」

「そうだ。場所を教えてくれた礼に、特別に名乗ることを許してやろう」

どこか尊大な口調だ。

(そんなもの許さなくていいから！)

「え、えっと、レーア・ブランデル、です」

それでも答えてしまうのは、使用人の性なのだろうか。

「そうか。レーアか」

「あの、あなたは？」

「俺か？ まあ、普段はお前みたいな身分が下の者には名乗らないのだが、今日の俺は気分がいい。特別に教えてやろう」

少年は無駄に大きく胸を張った。

「俺はルネフォールト・ベルテルデ＝アンテロイネンだ。親しいものはルネと呼ぶ」

「はあ」

「反応が薄いな」

ルネと名乗った少年は、眉をひそめる。

「まあ」

初めて聞く名前だ。言いにくい名前だなあ、という印象くらいしか抱けない。

ルネは腕組みをして、首をかしげた。

「たいていの者は、この名前を聞くと地に伏せるものなのだが」

ルネは、どうやら本気で疑問に思っているらしい。

「ああ。このあたりでは、まだ俺の名前が響いていないのだな」

そしてどうやら一人で納得したらしい。

「仕方ない。特別に教えてやろう」

ルネはこちらを向いた。思わずレーアは背筋を伸ばしてしまう。ルネは厳かに言った。

「俺は、魔界の王子だ」

(ええと.....)

正直、レーアは反応に困った。確かに魔界は存在する。魔界があるからこそ、人間は魔法を使えるのだけれど.....。

(この人、頭、大丈夫かなあ)

そういう感想が真っ先に頭に中に思い浮かぶ。

(あまり関わり合いにならない方がいいかも.....)

こんな夜遅くに、人の屋敷に空から勝手に侵入して、挙げ句の果てにはわけのわからないことを言い出す。自分が魔界の王子、だなんて。賊の方が、対処がはっきりしているだけマシだったかもしれない。

「お前、信じていないな」

ルネが鋭い視線を送ってくる。どきり、とした。

「い、いえ。そんなことは」

愛想笑いを浮かべてみるが、ごまかすなというばかりに、ルネは一步迫ってくる。

「どうせ頭のおかしい人間の妄想だと思っているんだろう。お前の顔を見ていれば、それくらいわかる」

ルネは言い切った。

「仕方ない。お前に頭のかわいそうな人間だと思われるのもしゃくだ。俺の力を見せてやろう」

ぱちり、とルネは指を鳴らした。

「え？」

レーアの体が強い力で引っ張り上げられる。ひっ、と悲鳴めいた言葉がこぼれた。きゅっと目をつむって、その力に耐える。

衝撃がやみ、おそろおそろレーアは目を開けた。

いつの間にか、屋敷を見下ろせる高さまで、レーアの体は持ち上げられていた。

巨大な何かから糸一本でつり下げられている感じ、とでもいうのだろうか。眼下に広がるのは、見慣れた屋敷と庭。ぼんやりと光っているのが、レーアが持ち出したランプだろう。いつか、魔法で見たいと思っていた光景といえばそうなのだけれど。

これが自分の魔法で飛んだのだったら、また別の感慨があったのだろう。でも、今は、得体の知れない少年の力でレーアはここにいるのだ。ここにいるも落ちるもルネの気分次第。正直、生きた心地がしない。

「どうだ？」

思ったより近くで声がして、レーアは顔を上げる。いつのまにか、ルネまで、近くに浮かび上がってきていた。とても自然に空中に立っている。

「これで信じるか？」

こくこくこく、とレーアはうなずいた。

少なくとも、ここは素直にしたがっておいた方がいい。魔界の王子.....かは知らないけれど、かなりの能力者であることは確かだ。魔法を使うのに、呪文を必要としなかった。

「信じます。信じますから」

「そうか。なら」

どこか満足げな表情を浮かべて、ぱちり、とルネがまた指を鳴らす。

急降下。ぷつりとぶら下げる糸が切れてしまったようなものだ。下まで全速力。

(私の短い人生、これで終わり?)

「おっ。ちょっと加減を間違えたか」

ルネののんきな声と共に、ぱちり、と指が鳴る音がした。

地面に衝突する寸前。急ブレーキがかかる。ゆっくりとそのまま地面にレーアは着地した。

とん、と地面に足がついたとき、どんなにほっとしたことか。

(こ、こわかった)

あまりの恐ろしさに、へなへなとその場に座り込みそうになるのを、レーアは必死でこらえる

。

「どうだ？ 俺の実力がわかったか」

ルネは妙に嬉しそうだった。

「わ、わかりました。だから、その」

ちらりと後ろを見る。

やっぱり、これ以上、このルネとかいう少年に関わるわけにはいかない！

「さよなら！」

そう叫ぶと、レーアは一目散に屋敷に向かって駆けだした。

どうやら少年は追ってこなかったらしい。玄関までたどり着いて、レーアはほっと息を吐き出した。ランプを忘れてしまったのが痛手だけれど、明日、朝早いうちに回収すれば問題ないだろう。

屋敷の中はほとんど静まりかえっている。みんなを起こさないように注意しつつ、レーアは自室に戻った。

フォルセル家の使用人は、有り難いことに、一人一人が個室を与えられている。ベッドと机と小さなもの入れくらいしかない部屋だけれど、レーアにとっては立派な城だ。

まだ、心臓がドキドキしている。

一体、あの少年はなんだったんだろう。

自分のことを魔界の王子、などととんでもないことを言っていた。魔法の実力はそれなりにあるようだったけれど。

と、こんなことを考えている場合ではない。

使用人の朝は早い。さっさと体を休めなければ。

余計なやりとりで、時間を食ってしまった。

レーアはベッドに入る。ベッドに入って数秒で眠りにつくことができるのは、レーアの数少ない特技の一つだった。

「うーん」

翌朝。なんとなく意識が覚醒したレーアは、もぞもぞとベッドの中で寝返りをうつ。なんとなくベッドが狭いような気がしたけれど、気のせいだろう。

たぶん、そろそろ起きなければいけない時間だ。とろとろと隙あらば眠りの淵に誘い込もうとする睡魔と戦う。

ごろごろと転がって——やっぱりベッドが狭い、と思った。

何かベッドの上にものを置いただろうか。記憶を辿りながら、ぼんやりと目を開ける。

「！」

驚きのあまり声にならない、というのはきっと今みたいな状況のことをいう。

がばり、と慌てて起き上がった。急いでベッドから離れる。

悲鳴は、すんでの所でこらえた。

何故か、レーアの他にもう一人、ベッドに眠っていたのだ。

(な、な、なんで?)

昨日、レーアがベッドに入ったとき、確かに一人だった。誰も他にいなかった。

うーんとうめき声を上げて、何者かが寝返りを打つ。

寝顔だから、はっきりとは言えないけれど、その顔には何となく見覚えがあった。

——昨日、魔界の王子だと名乗った少年。

道理でベッドが狭いはずだ。使用人の部屋のベッドはシングルサイズ。決して二人で眠るようには出来ていない。

と、そんなことで納得している場合じゃない。

(どうして、ここにルネなんとかさんがいるの?)

昨日、レーアは一人でこの部屋まで戻ってきた。それは確かだ。

ルネが追いかけてきた気配もなかった。

でも、ここに確かにルネはいる。この事実は動かせない。

(どうしよう)

使用人の私室に男を連れ込むなんてもってのほかだ。連れ込んだ覚えもなく、むしろ向こうから勝手に入り込んできた可能性大なのだが、悲しいかな客観的に見れば、レーアがルネを連れ込んだように見えるだろう。

こんこん、というノックの音に、レーアは心臓が止まるかと思った。

「レーア。そろそろ時間よ」

次に聞こえてきた声に、ほっと息をつく。

隣の部屋のセルヤだ。同じ年のセルヤは、寝坊しがちなレーアのために、毎日こうやって声をかけてくれる。

「あ。起きてる。大丈夫。先行ってて」

レーアは声を張り上げた。ルネを起こすかと思ったが、その気配はない。

レーアは小さく息をついた。

とにかく、朝食前の掃除に早く行かなくてはならない。戻ってくる頃には、ルネも起きているだろう。逃げていたらそれでいい。知らない振りをしよう。居座っていたら……。

ぶるぶるとレーアは首を振った。

——考えないようにしよう。

心理的抵抗と戦いながら服を着替え、レーアは部屋を飛び出した。

使用人の仕事は多岐にわたる。

朝食前の仕事は、客間や正面玄関、食堂の掃除である。レーアの今日の分担は客間だった。特に滞在する客もいないので、ベッドメイキングが不要なのが有り難い。部屋の掃除をし、窓を開けて、空気を入れ換える。

仕事の最中も、やはり気になるのはルネのこと。

よくよく考えてみたら、昨日、ルネに本当の名前を名乗ってしまったのは、かなりまずかったのではないだろうか。仮に、誰かに見つかったルネがレーアの名前を出したら……そこまで想像して、レーアはその悪い考えを振り払う。

使用人用の食堂でのパンとスープの食事もそこそこに、レーアは部屋へと戻った。

「やっと戻ってきたか」

「！」

思いがけない言葉に、レーアは息を呑む。ルネが、ベッドに腰掛けていたのだ。これ見よがしに長い足を組んでいる。黒いマントは身につけておらず、代わりに質の良さそうなズボンとシャツを着ていた。地味な使用人の部屋が、ルネのいる場所だけ別世界になったように感じられる。

「まったく、この部屋は何もかもが狭いな。こんな窮屈なベッドで眠ったのは、俺の人生で初めてだぞ」

大げさにルネは首を嘆く。

「それで、お前は、いつまで俺をここにとどめておく気なんだ？」

「どういう、意味ですか？」

レーアとしては、あなたが勝手に入り込んできたんでしょすが、と言い返したい気分だ。

「客人に対しての礼、というものがあるだろう」

「客人、というのは」

嫌な予感を覚えながらも、レーアは尋ねる。

「俺の事に決まっているだろう」

ルネは、胸を張って堂々と答えた。

(むしろ不法侵入者でしょうが！)

そう突っ込みたいのは山々だけれど、レーアは懸命にこらえる。

「というか、どうして、あなたはここにいるんですか？」

「お前の気配さえ分かれば、居場所を突き止めることなど簡単だ。それに、もとはといえば、お前が俺を人間界に呼び出したんだろう」

「は？」

レーアは眉間にしわを寄せた。間違っても、こんな少年呼び出した記憶はない。

「お前、昨日、召喚魔法を使わなかったか？」

「確かに使いましたけど……」

結局発動しなかった魔法。あれを使った、にカウントするなら、の話だ。

「そうだろう」

こくこくとルネはうなずいている。

「でも、あれは、鳩を召喚する魔法です。あなたは鳩じゃないでしょう？」

「ああ。でも、お前の起こした亀裂をとっかかりに俺は人間界まで来られたんだ。似たようなものじゃないか」

(呼んでもいないのに、無理矢理に現れたってことね)

「つまり、お前が昨日召喚魔法を使わなかったら、俺はここにいることはできなかったわけだ。つまり、お前が俺を召喚したようなもの。だったら、お前が、俺のこっちでの生活の面倒を見る義務があると思わないか？」

無茶苦茶すぎる理屈なのに、堂々と言われると一瞬でも正しいような気がするから困る。

だんだん頭痛がしてきた。

「そんなの知りません！」

「お前が呼び出したのに？」

「私が呼び出したのは鳩ですってば。それに、鳩なんか現れなかったじゃないですか！」

はあ、とレーアは息を吐き出した。

言い合っているうちに随分時間が経ってしまったように思える。次の仕事の時間が迫っている。使用人はのんびりしている暇などないのだ。

「とにかく、私は仕事に行ってきます。適当に帰ってください！」

レーアはそう言い捨てて、自分の部屋を出た。

昼間は、各部屋の掃除を行う。イスト様の寝室などを掃除するのもこの時間だ。もちろん、まだまだ下っ端に近いレーアは、主人一家の寝室の掃除など、夢のまた夢。今日は図書室の掃除である。

本が詰まっている部屋は、どこか独特なおいがする。他の部屋から少し離れているので、少しくらいぼんやりしていても問題がないのは有り難かった。

レーアの思考は、やはり自称魔界の王子の少年へと向かう。

(帰っているだろうか)

帰っていてほしい。が、素直にレーアの言うことを聞くような人間には思えない。

かといって、居座られても困る。

(そういえば、私の魔法をとっかかりにこっちに来た、って言っていたわよね)

だったら、レーアの魔法で魔界の強制送還できるのではないだろうか。

召喚魔法は、何も魔界から生物を呼び出すだけじゃない。呼び出した生物を魔界に返す魔法もあるのだ。とっさに呪文は出てこないけれど、本で調べれば出てくるはず！

ちらり、とレーアは本棚に視線を走らせる。フォルセル家の蔵書は、ほとんどがレーアにとっては意味不明な経済などの本だ。けれど、中に数冊、魔法についての本があることをレーアは知っている。

(駄目よ。今は工作中)

サボっていることがばれたら、メイド長に三時間はお説教を食らってしまう。

(わかってるんだけど.....)

やはり、気になり出すととまらない。ほんの少しだけ。そう自分に言い訳をして、レーアは魔法の本へと手を伸ばした。

「今日は、図書室の掃除は、レーアなんだね」

「イスト様！」

振り返ると、出かけたはずのイストがそこには立っていた。

「イスト様、今日のご予定があったはずでは？」

「うん。そうなんだけどね。向こうの都合で急にキャンセルになってしまって。何を見ていたのかな？」

「えっと.....」

レーアは観念した。ここは正直に言うべきだろう。さぼろうとしたことは明白なのだ。

「魔法の本です。ちょっと気になることがあって。本当にすみません」

「いいよ。決められた仕事さえきちんとしてくれれば、僕は何も言わないから。何を調べたかったの？」

「召喚したものを、元の世界に戻す魔法です」

「それって、レーアの召喚魔法が成功したってこと？」

召喚魔法が成功しなければ、必要にならない魔法だ。

「えっと、そうというか、そうでもないというか」

レーアとしては、あんなの絶対に成功のカウントにいれたくない。

「まあ、気になってしかたなくて仕事が手につかなくなるくらいなら、ほんの少くらい休憩しても大丈夫だよ」

「ありがとうございます！」

本当に現れたのがイストで良かった、とレーアは思う。

「そういえば、昨日、ランプを忘れていったみたいだね。僕が預かっているけれど」

「あ」

ルネのことがあったので、すっかり忘れていた。

「何か、ランプを忘れてしまうようなことがあったの？ 調べたいことと関連するのかな？」

するどい突っ込みだ。でも、知られるわけにはいかない。

「い、いえ。特に何もありません！」

レーアは必死で愛想笑いを浮かべる。

「そう？ あまり無理しないようにね」

イストはそれ以上何も言わずに図書室を出て行った。レーアはほっとする。

ご主人様のお許しが出了た、ということで、レーアは堂々と魔法の本を開いた。

部屋に入るなり、レーアは言葉を失った。昨日から思っていたのだが、どうやら自分は驚くと悲鳴を上げるより、何も言えなくなるたちらしい。

「おう。お前か。遅かったな」

質素な部屋のはずだった。少なくとも、レーアが部屋を出た時点では。

なのに今、レーアの部屋は、豪華絢爛な家具で飾られている。天蓋付きのベッド。白い飾りの付いた机。心なしか、記憶より部屋が広いようにも思える。いや、間違っても天蓋付きのベッドを置くような広さはなかったはずだ。確実に広くなっている。

「こ、これは？」

「全部召喚した」

部屋の中央に置かれた黒革張りのソファーに、偉そうにふんぞり返っているルネから、単純明快な答えが返ってくる。

「少しは、俺が過ごしやすいようにしないと」

どうやら、ルネは、あくまで居座る気満々らしい。

「どうだ。驚いて声もでないのか。感謝しろよ。異空間につなげて、部屋を広くしてやったんだからな」

(異空間ですって?)

物理的に壁を壊して隣の部屋を侵食した、というよりはマシなのかもしれない。あくまでマシ、というレベルだが。

「えっと」

レーアはこめかみを押さえた。

「あくまで、ここに居座る気、なんですね」

「安心しろ。心の広い俺は、きちんとお前の滞在スペースも用意してやったぞ」
ルネは、そう言って部屋の隅を指さした。レーアのベッドが残っている。

「……」

やっぱり、召喚した者を元の世界に戻す魔法を使わなければならないらしい。

「どうした？ 俺の寛大な処置に感激して言葉も出ないのか？」

黙り込んだレーアに対して、ルネが見当違いのことを言う。

「今日は一日部屋の模様替えに費やしたが……明日は外に出たいな」

(まずい)

レーアは思った。当然、ルネはこの部屋を拠点に外へ出ることを考えているのだろう。ある程度、召喚魔法で自給自足をするつもりのようなのだとはいえ、問題はそこではない。

部屋に、得体の知れない少年を連れ込んだ時点で、レーアの首は危ういのだ。

レーアは決心した。やっぱり魔法で魔界に強制送還するしかないようだ。

たぶん、この部屋で呪文を唱えたら、ルネに止められるだろう。

レーアは外に出ることにした。幸い、夕食まで少しの時間がある。

ランプを探して、そういえばイストが預かっているということを思い出した。

辺りは薄暗くなりつつあるが、周りがわからない、というほどではない。諦めて、レーアはそのままたつもの場所へと走る。夕食の時間が近い屋敷は、どこかざわめいている。

ふわり、と秋の風が、レーアの頬をなでていく。

レーアは、そっと目を閉じる。いつも以上に集中力を意識した。

「魔の向こうにすみし者よ。この声を聞け」

大丈夫。呪文は、一生懸命暗記した。きっと発動するはず。

「私の魔法で現れし者を、元の世界に——」

「ふーん。やっぱりな」

不敵な声が出て、レーアの呪文は中断された。

「魔法で、俺を魔界に返すつもりだったのか」

いつの間にか、後ろにルネが立っている。ルネは立ちすくむレーアの方にすたすたと近づいてきた。ずいっと顔を覗き込んでくる。思わずレーアは後ずさった。

「妙にそわそわしていると思ったんだ。つけてきて正解だったな」

「つ、つけてきたんですか？」

そんな気配、まったく感じなかった。

「お前、人間界の常識に囚われすぎだな。言っただろう？ 俺は魔界の王子だって」

ルネがにやり、と笑う。レーアの背筋に冷たいものが走る。

冗談じゃなく、まずい、と思った。

「それに、お前の魔法じゃ、俺は魔界に返せないぞ」

「やってみなくちゃわからないじゃないですか！」

「やってみなくてもわかるから、言っているんだぞ」

「魔の向こうにすみし者よ。この声を——」

懲りずに呪文を唱えようとするレーアの口を、ルネはおもむろに手でふさぐ。

「ひょっほ（ちょっと）！」

「お前の力じゃ俺を返せないはずだが、万が一ってこともあるからな」

ももごとと抵抗するが、ルネは手を離してくれない。

「お前、何がそんなに不満なんだ？ せっかく、俺みたいな美少年がお前の部屋に滞在してやろうって言うのに」

（自分で美少年とか言うな！）

確かに美少年といっても、だいたいの人間は文句を言わないであろう顔立ちだけれど。美少年だからといって、部屋に得体の知れない少年を居候させる趣味は、レーアにはない。美少年を売りにするのだったら、絶対に人選を間違っている。

「仕方ない。大変不本意だが」

ルネの目がきらり、と輝いた。

「最終手段を使うしかないのか」

最終手段。少なくとも、レーアにとって良い展開は、全く想像できない。

(冗談じゃないわ！)

じたばたともがくが、ルネの力は強く、抵抗らしい抵抗にもならなかった。

「大丈夫だ。痛い思いはさせないから」

にっこりと少年は微笑む。語尾に音符マークでもつきそうな爽やかさだが、レーアにとっては嫌な予感しかしない。何とかして逃げようにも、ルネに拘束されたままでは、満足に動くことすらままならない。

絶体絶命って、きっと、今みたいなときのことを言う。

「とりあえずおとなしく……」

「何をしているのかな？」

レーアの耳に飛び込んできたのは、イストの声だった。いつも疲れたレーアの心にほんの少しの癒しを与えてくれるイストだが、今ほど有り難いと思えたことはない。

「ひふほはは（イスト様）！」

見れば、イストが目の前に立っていた。イストは、レーアが少年に掴まっている図をしっかりと見ている。ここぞとばかりに、レーアはイストに助けを求めた。

「えっと、君は、レーアのお友達？」

どこかピントのずれたことをイストは少年に尋ねる。

(どこをどう見たら、お友達に見えるんですか！)

口がきけたらそう声を大きくして主張したい。だがそうもいかないので、レーアは思い切り首を振ることで意志を示す。

「友達ではないな。どちらかというと、俺が女の主人か」

「主人？」

イストの声が、わずかに低くなる。ぴりりとした空気が走る。

「ああ。少なくとも、そうするつもりだ」

ルネが鷹揚にうなずいた。

「彼女は、僕の使用人なんだけどな。どういうことだか、説明してもらえるかな」

にっこりとイストは微笑んでいる。だというのに。

(な、なんだろう。この悪寒は)

確かにそろそろ秋も近く、冷えるようになってきたけれど。

だが、ルネはこのひやりとした空気に気づかないらしく、得意そうに自分が人間界にきた顛末を述べている。もちろん、自分が魔界の王子だ、という自己紹介も忘れない。

「というわけで、俺はしばらく人間界に滞在しようと思う。それで、この女に協力を求めようと思ったのだが、拒んだあげく、俺を呪文で強制送還しようとしたのだ」

イストは、大きく息を吐き出した。

「そうか。そういうことか。よかった。レーアが僕に黙って男性を部屋に連れ込んだのかと思って、びっくりしちゃったよ」

(とんでもないです！)

誤解がとけて良かった、とレーアは心底思う。

「えっと、ルネだっけ？ 君は、人間界に滞在したいっていう解釈でいいのかな」

「ああ」

「それで、レーアにどうするつもりだったの？」

「この女が言うことを聞かないから、使用人として洗脳するつもりだった」

(洗脳ですって！)

レーアは思わず首をひねってルネを見た。ルネは平然としている。

イストは口元に手を当てて、少し考える。

「それだったら、別に、レーアじゃなくてもいいんじゃないかな？」

どうやらルネは興味を奪われたらしい。ぱっとレーアは体が自由になったのを感じた。

「お前、心当たりがあるのか？」

イストの方に踏み出すルネ。レーアは、そっと細心の注意を払ってルネから離れた。

「ちょっと、ね。第一、使用人を洗脳しても、窮屈でしょう？」

「そうだな」

「だから、もっといい人を紹介してあげるよ」

思わずレーアはイストの顔を見てしまった。イストはにこにここと微笑んでいる。

(紹介って……)

一体、誰を紹介するつもりなのだろうか。それとも、なんだかんだ理由をつけて魔界に返すのだろうか。イストに魔法が使える、なんて話は聞いたことがないけれど。

「それでいいかな？ ルネ」

「俺はかまわないぞ」

ほう、とレーアは息を吐き出す。どうやら部屋に少年を居候させる、という最悪の事態は逃れることができたらしい。イストがにっこりと微笑んだ。

「レーアも、よかったね」

「ありがとうございます！」

ご主人様には、感謝してもしたりない。

その晩、ルネは正式なフォルセル家の客人として迎えられた。異空間につながられた部屋も、無事に元に戻してもらった。そして、次の日。ルネは屋敷を出て行った。

イストは、一体誰にルネを紹介したというのだろうか。それとも、いろいろ丸め込んで、魔界に返したのだろうか。イストは笑うだけで教えてはくれない。

あれから一週間。レーアには、平穏な日常が戻っていた。

いつもの時間。いつもの場所に、レーアはランプを置く。

魔法の練習である。もっとも、あれ以来、召喚魔法だけは、絶対に唱えないようにしている。いつまた自称魔界の王子がやってこないとも限らないからだ。

唱え始めるのは、いつものように空飛ぶ魔法。

「魔の向こうにすみし者よ。この声を聞け。我に——」

「お前も懲りない奴だな」

悪夢のような声が聞こえて、レーアはおそろおそろ目を開けた。聞き間違いだと思いたい。けれど、その願いはすぐに打ちのめされる。

見れば、隣の家との塀の上に立ったルネが、レーアを見下ろしていた。

「うそ。だって、魔界に……」

「誰が帰ったと言った。イストに人間界で過ごしやすい場所を紹介してもらっただけだぞ」

「……え？」

「いい場所を教えてもらった。お前の部屋なんかよりも、数十倍過ごしやすい」

「それって……」

「ああ。しばらく隣の家滞在することになった」

「と、隣ってキプルソフ夫人のところですか！」

「よく知ってるな」

キプルソフ夫人は、隣の家に住む未亡人だ。一人息子は事業のために滅多に帰ってこないという。広い屋敷に使用人を除けば一人。寂しい、と言っていたことを思い出す。

「だが、やはり、居心地はいいが、向こうの使用人は、どうも面白くない」

何となく話の雲行きが怪しくなってきた気がする。

「お前みたいな反応の面白い奴がないのだ。だから——」

レーアは何となく嫌な予感がして、身構える。

「こうやってちょくちょく遊びに来ることにした！」

(来なくていいから！)

硬直するレーアに、ルネは続ける。

「大丈夫だ。イストに話も通してある。今日は挨拶だけだ。お前の仕事の邪魔をするな、とも言われているしな」

「あの……」

「次の休みは、確か明後日だったな。楽しみにしているよ！」

「えっと……」

まったく、人の話を聞かずにルネは去って行ってしまった。レーアは大きく息をつく。

「あ。入れ違いかな？」

後ろから、イストの声がして、レーアは振り返る。

「イスト様！ どういうことですか！」

てっきり、縁が切れたものだと思っていたのに。イストは柔和に微笑んだ。

「いや、さすがにうちで面倒を見るわけにはいかないから、キプルソフ夫人ならちょうどいいかなあと思って。まあ、彼も悪い人じゃないみたいだし、大丈夫じゃないかな、と。夫人も喜んでいたし」

「でも、魔界の王子とか自称している怪しい人ですよ！」

「まあ、本物だったら面白いじゃない」

それで片付くのならいいんですけどね。はあ、と大きくレーアは息をついた。

明後日。一体何が起こるのか。よい想像はあまりできないけれど、とりあえず、今は考えることは放棄することにする。うん。そうする。

「……他の、運動部とかは大体、夏の大会で引退したんだよね」

「そうだな」

「私たちは？ どうするの？」

「……引退の話？ 引退も何も、二年も一年もないんだし……これまでだって適当にやってきたし、このまま卒業まで適当にやればいいんじゃないかなあ」

高校生活最後の夏休みが終わり、二学期最初の授業の日。放課後、久々に部員全員が図書室に集合した。

夏休みの間は、それぞれ補習やら予備校やらでなかなか全員集合というわけにはいかなかった。特に今年は、受験生だから。

「そうだねえ、適当に……」

部長である洸の、相変わらず部長らしくない言葉に、行儀悪く机に座った明日花が相槌を打った。

「忙しく、なるもんねー……」

「……そうだな」

明日花の声は、どことなく寂しそうだった。

受験、あるいは就職活動に追われているうちに、あっという間に卒業の日がやってくる。

「……でも、何かしたいよね」

「……何か？」

美優の言葉に、彼女の傍らにいた千尋が小さく首を傾げる。

「卒業するまでに。何か、記念みたいな。残したいなあって」

せっかく部を設立したんだし、と言って美優は微笑んだ。

「……記念、か」

「具体的には？」

「えっと、たとえば……」

細い指を口元に当てて、考える素振りを見せる美優。他の四人は、彼女に視線を送り、その答えを待った。

意外とすぐに、ひらめいたようだった。美優の顔がパッと明るくなる。

「本を、作ってみるとか」

「本？ ……ってというのは、今やってるリレー小説みたいなじゃなくて？」

いまいちイメージが湧かないらしい明日花が、首を捻る。

「ううん、書き方は今のまんまでいいと思うの。……それを、ノートじゃなくてね。ちゃんと、一冊の本にしたいなあって」

「一冊の、本に……」

顔を上げると、なんとなく洸と目が合った。

ぼんやりとしかイメージがわからない。けれど、自分たちの書いた小説が、本になる。それは、ひどく魅力的な響きに思えた。

「……でも、そんな簡単にできるの？」

よくわからないけど、と千尋が目を細めて誰にともなく問いかけた。それに、洸が頷く。

「別に、出版するわけでもないから。自分たちで少しずつお金を出し合えば、一冊ぐらいは簡単に作れるよ」

「そうなんだ」

「えっ、なんかすごいねえ！ それ、この図書室に置かれるわけでしょ？」

「そうだな。卒業記念だし」

すごいすごい！ と明日花が無邪気に声を上げた。

「じゃあ、目標は卒業までに一冊完成、ということで」

「……今まで書いてきたやつの流用ってわけじゃないんでしょ？」

「そうだね。目標をもって一から書き始めた方が、みんな気合も入ると思うし」

みんな、洸の意見に賛成だった。確かに、「これを記念にするんだ」という気持ちをもって一から書きたい。特別なものだから。

「じゃあ、書く順番を決めようか。どうする？ どうやって決める？」

「じゃんけんとかでいいんじゃない？ 勝った人から順番に一つ！」

「……負けた人からの方がよくない？」

そんなこんなで。じゃんけんをした結果。

「じゃあ、明日花、尚輝、美優、僕、千尋の順番で決定だね」

洸が、自分のメモ帳に順番を書き込んでいく。忘れないように。

「うー……最初って、責任重いなあ……」

難しげに眉をしかめる明日花に、千尋が小さく笑みを浮かべた。

「自分でじゃんけんが良いって言ってくせに」

「やっぱ勝った人が一番にするべきだったっ！」

「はいはい。もう決まったことだから、静かにね」

やんわりと明日花を制し、洸がメモ帳を閉じる。

「良い小説にしよう」

宣言のような洸のその言葉に、それぞれ顔を見合わせてから。力強く、頷いた。

『卒業に向けて、「あるもの」の制作を開始』

その日の活動報告書に、尚輝はそう記した。

夏が終わり、秋が始まろうとしていた。

くるくる

水島朱音

第一話 邂逅

就職が決まり、長年暮らした実家を出ることが確定したのは、半年以上前のことになる。

(早いなあ)

まだ肌寒さが残る、三月の始め。大学の卒業式を間近に控えた尚輝は、自分の周りの荷物を少しずつまとめていた。部屋の中には、いくつかのダンボール。まだ箱の形に組み立てていないものもある。

大学は実家から通える距離にあったが、来月から働くことになる就職先はそうもいかなかった。卒業式が終わり、引っ越しが済めば、初めての一人暮らしとなる。

あっという間にやってくるであろうその日のために、日々身の周りを整理してはいるのだが。

「……意外と時間がかかるもんだな」

何年も自室として使ったこの部屋には、慣れ親しんだ物がまだまだ溢れている。全てを持って行くわけではないが、それにしても全てをダンボールに詰め終えるには、まだ時間がかかりそうだった。

(まあ、今日できるところまではやっちまおう)

このところ、学科の友人やサークルの仲間たちと卒業祝いと称して遊びに行くことが多かったが、幸い今日は何も予定が入っていない。一日でどれだけ進められるかはわからなかったが、ギリギリになって慌てることのないようにしておきたかった。

部屋の中をぐるりと見回す。まだ全く手をつけていない箇所があった。

「……クローゼット、片付けるか」

冬用の厚手のジャケットやら、就活中に何度も着たスーツやら、それから中高生時代の思い出の品なんかが仕舞われている、普段あまり開けない扉。

開くと、どこことなくこもったような、けれど嫌いじゃない匂いがする。体ごとクローゼットに突っ込むと、奥の方にある衣装ケースを引っ張り出した。

透明な蓋を開ける。最初に目に飛び込んできたのは、高校の卒業式のアルバムだった。深緑の革表紙で覆われたそれを手に取る。

しかし胸にこみ上げたのは、懐かしさではなく苦々しさだった。

表紙に手をかけ、しばしの逡巡の後、やはり開けないままアルバムをそっと傍らに置く。すぐにそれから意識をそらし、再び衣装ケースの中に手を突っ込む。

本が多かった。それも、ほとんどは教科書や参考資料の類だった。

(んー……持って行くものは、特にないかな……)

大雑把にケースの中を漁ってみたが、特に向こうでの生活で入り用になりそうなものはなかった。出てくるのは、長い間クローゼットの奥にしまわれ忘れ去られていた、過去のものばかり。

「……ん？」

ふと、一冊の本に目が留まる。タイトルには、見覚えがある。けれど、内容までははっきりと

思い出せない。

その本の背表紙には、あるシールが貼られていた。

『甲斐森高等学校』

尚輝が通っていた高校だ。そして、そのシールの貼られた本がここにあるということは、つまり。

「あー……借りたままだったのか……」

図書館で借りた本を返し忘れたまま、卒業してしまったのだろう。卒業後に、使わなくなる教科書や参考書を整理するとき、紛れて一緒にこの衣装ケースの中に入れていたようだ。

なんとなく、その本を開いてみる。

(最近はあるまり読書とかしてなかったからなー……)

意外と言われることが多いが、昔から本は割と好きだ。特に高校生の頃は、よく読んでいた。けれど卒業してからは、以前ほど読書をしなくなった。それどころか、一時は本を避けてすらいた。

苦い記憶から、逃れるように。

「……」

本を閉じて、逡巡する。

返した方がいいだろう。もう、四年も経ってしまっているけれど。

(でも、あそこに)

あの学校に、行くのは。

本を手にしたまま立ち上がり、部屋の中をぐるぐると歩き回った。しばらくそうしていたが、やがてぴたりと足を止め、

「……行こう」

自分を奮い立たせるように、低く呟いた。

たかが一冊の本、しかも数年前のもの、そのままにしておけばいいのかもしれない。けれど、元来の真面目な性格もあったし、それに何より。

(いつまでも、引きずってるわけには)

いい加減、けじめをつけようと思ったのだ。

来客用の茶色いスリッパを出され、懐かしい校舎に足を踏み入れる。

最初は、本当に用件だけ済ませて帰ろうと思っていたのだ。窓口で、事情を行って本を渡して謝って、そして帰ってこようと。

しかし、窓口で名前を告げたとき、事務員の背後にいた一人の男性教諭が反応した。三年間、尚輝たちのクラスの担任を務め、部活動の顧問でもあった恩師、その人だった。

「懐かしいだろう、君島。なんにも変わってないからなあ」

本だけ手渡して帰ろうとした尚輝に、恩師である坂本は「せっかくだから少し寄っていけ」と、まるで自分の家のように誘ってきた。

躊躇ったが、今後二度と訪れることはないかもしれないと考えると、その誘いを断るのももったいないような気がして、尚輝は頷いた。

今は授業中らしく、校内は静かだった。図書室に向かう坂本の後ろをついて歩く。自分より少しだけ低いその頭を見て、さすがに四年も経つと白髪が増えている、などと考えながら。

階段を上り、最上階にある図書室に辿り着く。坂本がドアを開いたその瞬間、懐かしい匂いに包まれた。

（ああ……）

一瞬にして、過去に戻ったような。ドアを開いたその先に、いつものように笑顔で出迎えてくれる仲間たちの幻想を見たような。そんな気がした。

けれど、目の前に広がる懐かしい景色に、彼らの姿はどこにもない。

切なさが、やんわりと胸を締め付ける。入り口で立ち尽くしていると、先に中に入った坂本が「遠慮せずに入りなさい」と手招きしてくれた。

本棚の位置が四年前と少々変わっているが、それ以外に特に大きな変化はない。あの頃のまままだ。

二台だけ置かれたパソコンも、入り口付近の机に置かれた落書き帳も。カウンターの隅に設けられた、小さな本棚も。

「……これ、そのままにしてあるんですね」

その小さな本棚は、尚輝たちが在校中に設置したものだ。今、そこには何も並んでいない。

尚輝の呟きを聞いて、坂本が傍に寄ってきた。

「ああ。取り外すのももったいないと思ってな」

何かと思い出も詰まってるだろう、と言う坂本に、尚輝は気付かれないように苦笑った。

思い出。確かに詰まっている。

『本棚！ 作ろうよ、部員専用のさ！』

『そんな金どこにあるんだよ』

『小さいのでいいんじゃないかな？ 箱みたいな』

そんな会話をしたその日の帰り道、みんなでリサイクルショップに寄って、本棚になりそうな小さな箱を探した。次の日になってから、勝手に図書室に本棚を設置してもいいものか、不安

になって顧問である坂本に伺うと、彼は二つ返事で了承してくれたのだった。

「残念ながら、お前らの卒業後に廃部になってしまってなあ」

「……だと、思いました」

尚輝たちが卒業するとき、その部には二年生も一年生もいなかったのだ。つまり、後を継ぐものが、いなかった。

「お前らの代で始まって、お前らの代で終わったなあ……」

しみじみと、坂本が呟く。そう、尚輝たちの代で始まり、尚輝たちの代で終わった。尚輝たちしか知らない、部活。

空っぽの本棚を、壊れ物に触れるように、そっと撫でた。

「まあ、少しの間ゆっくりしていきなさい」

そう言って、坂本は図書室と繋がっている別室の方へ行ってしまった。司書の人や教員が、休憩室として使う部屋だ。

気を遣ってくれたのだろう、と思った。

彼の厚意に甘えることにして、図書室の中を見て回る。高校三年間の中で、もっとも思い出深いと言っても、過言ではないこの場所。

本棚の間をゆっくり歩き、何気なく羅列された本の背表紙を見ていく。

(こうして見ると、意外と読んでないのかもなー……)

結構な量を読んだ記憶があったが、そうでもないのかもしれない。見覚えのないタイトルが、いくつも目の前を通り過ぎる。

(まあ、洸には遠く及ばねーけど……)

部長だった男子生徒のことを思い出す。活字中毒だった彼は、ジャンルを問わずとにかく何でも読んでいたから、もしかするとこの図書室の本を制覇してしまっているかもしれない。

(……会ってねえなあ)

眼鏡をかけた柔和な顔を思い浮かべながらゆっくり本棚を眺めていると、ふと視界の隅に何か、引っかかりのようなものを覚えた。

(……?)

何だろう。違和感の正体を探るために、もう一度、本の背表紙たちに視界を滑らせる。

「何か」が、見えたような気がしたのだ。

「あ……っ」

それを見つけた瞬間、思わず小さく声が漏れた。あった。引っかかりの正体。

手を伸ばし、一冊の本を棚から引き出す。

『甲斐森高等学校図書部』

本の背表紙には、そう書かれていた。

それは、間違いなく尚輝が所属していた部活の名前。尚輝たちの代で始まり、尚輝たちの代で終わった、尚輝たちしか知らない部活。

(……こんなの……作った覚えねえぞ……)

いや、「作ろうとした」覚えなら、あった。

部員のみinnで、卒業までに一冊の本を完成させようと。そういう目標を掲げて、その達成のために頑張っていた。

けれど、結局それは果たされなかったのだ。

それならば、この本は。

(なぜ、ここに)

開いては、いけないような。

けれど、尚輝に見つけられるためにここで待っていたような。

「……」

恐怖心が、指先をためらわせる。

(美優……お前なのか)

けじめをつけようとしている尚輝に、「忘れるな」と。「忘れることは許さない」と。彼女が、そう伝えようとしているのだろうか。

強張る指先で、尚輝はその真っ白な表紙を、そっと開いた。

「『図書部』？」

聞き慣れない単語に、尚輝は首を傾げた。昼休みのざわつく校内。飛び交う声と昼食の匂いで溢れ返る教室の中。

一つの机を挟んで向かい側に座り弁当を食べている幼馴染みは、口の中のものを飲み下してから、うん、と頷いた。

「何それ、そんなんあったっけ」

「ないよ。だから作ろうと思って」

「は？」

高校に入って初めての夏休みを数週間後に控えたある日。小学校からの付き合いになる友人、松永洸が、突然「部活に入ろうと思うんだ」と切りだしてきた。

もう新生生に対する部活勧誘ラッシュもとっくに終わったし、これまでどこにも入る様子を見せなかったのだから、洸も尚輝と同じでこのまま卒業まで帰宅部を貫くものだと、勝手に思っていた。

「作るって……そんな簡単にできんのかよ」

「うん、坂本先生に聞いてみたんだ。そしたら、この学校、同好会みたいなものはないんだって。だから、たとえ部員が一人でもいるなら、部として成立するらしいよ」

「へー……」

とはいえ、一から部をつくり上げるというのがどういうものなのか、いまいちピンと来なかった。

「……で？ 具体的に何する部なんだ？」

「そうだなあ……本を読んだり、自分で書いたり……」

「……え、それだけ？」

それなら部として発足せずとも、一人でできることだろう。そう思って瞬きを繰り返すと、洸は小さく笑った。

「人が増えたら、感想を言い合ったりも出来るんだけどね。まだどのくらい集まるかわからないから」

「なんだよ、消極的だなあ」

「そういうわけじゃないよ」

うーん、と考えを巡らせながら、紙パックのジュースに刺さったストローを、歯でがしがしと噛む。

「図書部、ねえ……」

「……尚輝も、意外と本好きだったよね？」

「意外って言うな」

ごめんごめん、と笑いながら謝る洸が、昔から大の本好きであることは知っている。そんな洸

とは違い、小学校の頃からどちらかといえばスポーツ少年であった尚輝も、実は「意外と」読書家だったりする。洸と親しくなったのも、図書室でよく会うようになったのがきっかけだった。

「俺も、入ろうかな」

「え？」

「図書部」

尚輝の提案に、洸が眼鏡の奥で目を丸くした。

「……でも尚輝、高校はずっと帰宅部だ一、って言ってなかったっけ？」

確かに入学した当初、激しい部活勧誘を横目にそんなことを言った記憶があるし、実際にそのつもりだった。

けれど、

「なんか、いいなあって」

「うん？」

洸が首を傾げると、男にしては柔らかく長めの前髪がさらりと揺れる。

「何かを、一からつくるの」

空になった紙パックを、両手で潰しながらそう言った。少しの間があった後、洸が小さく声を立てて、しかし嫌味のない風に笑う。

「尚輝って、ロマンチストだよな」

「ばっ……」

何を言ってるんだろう、こいつは。

なんだかその響きがやけに恥ずかしく思えて、少し乱暴に席を立ててから洸の頭を小突いた。

「てっ」と声が上がる。

「そろそろ教室戻るわ」

「あれ、もうそんな時間か」

「まあ、なんだ。なんか動きがあったら、教えてよ」

「うん。ありがとう」

言葉を交わして、洸の教室を後にした。尚輝のクラスは、この二つ隣にあるCクラスである。(しかし、よくもまあ部活つくろうなんて考えたよなあ)

意外といえば、意外である。極端に大人しいというわけでもないが、そこまで積極的ではないと思っていたから。

(何かを、一から作る)

先ほど、自分が言った言葉を、何気なく反芻してみる。洸に、「ロマンチストだ」と言われた言葉。

けれど、彼も似たようなものなのだろうと思う。入学してからまだ数ヶ月しか経っていないのに、学校の中に新たな一つの組織を作ろうとする積極性。それは、やはり何かを「作りたい」という気持ちが原動力になっているのだろう。

(……文化祭前みたいな感じだ)

どことなく、わくわくしている。そんな気持ちを抱えながら、尚輝は自分の教室へと足を踏み

入れた。

——まだ、図書部ができる前の話である。

部活動、といっても、それは本当に遊びの延長線みたいなもので。

特に規則をつくるわけでもなく、活動内容すらはっきりと決まっておらず。顧問は、担任の坂本にそれとなく話してみたところ、二つ返事で引き受けてくれたから助かったけれど。

生徒会に申請書を出して、正式に部の発足が決まって。それから三日が経ったけれど、相変わらず部員は尚輝と洸、二人のままだった。

「ていうかさあ……」

「ん？」

いわゆる、「部活動」の時間。机を挟んだ向かい側で本のページをめくる洸に声をかけると、すぐに顔を上げて視線を返してきた。

「部員集めとか、全くしてねえじゃん」

集まるも何も、部長である洸が全く勧誘活動に動こうとしないのだ。

尚輝の言葉に、洸はうーん……と首を捻ってから、力なく表情を緩めた。

「だってさ、特に募集とかしなくても、なんか集まる人は集まるべくして集まってきそうな気がして」

「……そりゃそうだけど、その集まるきっかけ作らなきゃどうにもならないだろーが」

そう言って、少し行儀悪く椅子にふんぞり返る。パイプ椅子が、小さく軋んだ音を立てる。

すると、考えてみてよ、と洸が声を潜めて少し身を乗り出してきた。

「図書部の活動場所は他にもない、ここ、図書室なんだ。そして、部活動の時間でも、部員以外の生徒も入ってこられるようになっている。独占するわけにはいかないからね」

「……つまり？」

「つまり、頻繁に図書室を訪れるような本好きな生徒なら、僕たちが毎日ここに集まって何かしてる、ってことにすぐに気付くはずさ」

ああ、それは確かに。

尚輝が頷くと、洸は再び椅子に身を沈めてにっこりと笑った。

「……実はね、すでに一人、部員候補者がいるんだ」

「はっ？」

思わず、大きな声を出してしまった。図書室の中の、いくつかの目が尚輝に集中する。洸が、まるで子供に注意するように、しっ、と人差し指を口元にあてる。

「だって……、そんなの初めて聞いたぞ？」

「うん、初めて言ったからね」

「お前な……」

まさか、こんなにも活動していないうちから入部希望者が現れるなんて、正直思っていなかった。

洸が、何やら図書室の中をきょろきょろと見回し始めた。誰かを探しているかのように。

「……あっ、今日もいた」

そして、どうやら見つけたらしい。彼の視線を辿ると、一人の小柄な女子生徒がいた。

視線を感じたのか、棚の方に向いていた彼女の顔が、こちらを向く。大きな黒い瞳が、ぱちぱちと瞬いた。

真っ黒な長い黒髪が、印象的だと思った。

洸が小さく頭を下げると、その女子生徒も会釈を返してくる。

「……あの子？」

「そう。同じクラスの小山内さん。坂本先生を通じて、図書部の話を聞いたんだって」

本が好きって言ってた。

そう彼女を紹介する洸の声を聞きながら、尚輝は興味がありそうにこちらに視線を向けてくるその少女を見つめていた。

大人しそうな子だ。

それが、彼女の。小山内美優の、第一印象だった。

意外なことに、図書部が発足してから一週間も経たないうちに、部員が増えていた。

一人は洸に紹介された、長い黒髪の小柄な女子生徒。こちらはまあ、事前に情報を聞いていたため、入部届が出されたと聞いてもそこまで驚かなかった。

意外だったのは、彼女と一緒にもう一人、女子生徒が入部してきたことだった。

「……関千尋。Bクラス」

美優とともに図書室に入ってきた、肩口で髪を切り揃えた彼女は、そんな風にそっけなく自己紹介をした。

「中学の頃からのね、友達なの」

一緒に入ろうって誘っちゃった、と横から美優が言葉を添える。あまりにも雰囲気の違いの違う二人だが、こうして連れてきたということは、それなりに仲が良いのだろう。

「関さん、だね。よろしく」

「千尋でいいよ」

洸が微笑みかけると、千尋はブレザーのポケットに手を突っ込んだままそう言った。あまり良い態度とは思えなかったが、洸は特に気にした様子もなく、「わかった。千尋」と頷いただけだった。

洸と千尋が自己紹介をし終わると、尚輝は目の前の美優に話を振った。

「小山内は、またなんでこの部に？ やっぱ本が好きだから？」

そう尋ねると、美優は「えっと」と少し照れたように俯く。

「私……小説家を、目指してて」

「へえ。すごえじゃん」

「……えっと、それでね、今までも自分ひとりで書いて、たまに千尋ちゃんに見てもらったりは、してたんだけど。もっと多くの人に意見もらったりした方がいいのかな、とも思って」

そこで言葉を区切ると、美優は突然図書室の入り口付近に置かれた机に走っていった。なんだろう、と思っていると、そこから一冊のノートを持ってくる。誰でも書き込み自由となっている落書き帳だった。

「あとね、これ」

そう言って、彼女はパラパラとノートをめくり、あるページを指差した。

三人で、彼女が示したページを覗き込む。

「……これは……」

「リレー漫画……かな？」

絵の違いから察するに、どうやら一コマごとに別の生徒が描いているらしい。漫画は数ページにわたって続けられていた。

「そう。面白そうだなって、思って」

「リレー小説……か。いいね」

冨も美優に同調して、うんうんと頷いた。

「うん。せっかく集まったんだから、何かみんなで出来ることがあっても、いいね」

「でも俺、小説とか書いたことねーよ……？」

「あたしも」

確かに本を読むのはそれなりに好きだが、自分で書いてみようと思ったことはない。少し不安に思いながらそう告げると、千尋も同じだったようだ。

「実は僕も、書いたことはほとんどないよ。興味はあるけどね。いいじゃない、部活なんだし、好きなように書けばいいと思うよ」

楽しくやろうよ、と冨が笑う。

なんとなく隣に視線を遣ると、千尋と目が合った。

(楽しく、ね)

ふっ、と顔が笑みに崩れた。すると千尋も、小さく唇の端を持ち上げる。

「……そうだな。やってみるか！」

気合を入れるように尚輝が告げると、美優が小さく歓声を上げて喜んだ。

「……なんだか、ようやくちゃんと部として動き出したような気がするな」

隣に立つ冨に告げると、彼は「情けない部長でごめんね」と、けれど言葉とは裏腹に、楽しそうな笑顔を浮かべたのだった。

その後、部員が増えることはなく、夏休みに突入した。夏休み中の部活動は、基本的に自由参加ということになった。

千尋はバイトが忙しいらしくあまり顔を出さないが、残りの三人は割と積極的に図書室に顔を出していた。

「……あれだな、部活つつても、ただ宿題してるだけだな」

「有意義じゃない」

その日は、親族で集まるとかなんとかで、洸は部活に来ていなかった。図書室の隅、机の上に広げた宿題を、美優とともに解き進めていく。

確かに有意義である。放っておいたら、尚輝は八月三十一日まで宿題を溜め込むタイプだから。

「あれっ、ちょっと待って。そこ違うかも」

「え、マジ？」

「うーんと、ね……。ちょっと見せて」

尚輝のノートを覗き込むために、美優が身を乗り出してくる。

視線をノートに向ける彼女は気付いていないのだろうけれど、前髪が触れ合いそうなほど互いの顔が近づき、尚輝は慌てて体を引いた。

無防備だ。

と思い、次の瞬間、なんとなく自己嫌悪に陥る。

「……はあ……」

溜め息を吐くと、尚輝のノートに何やら書き込みをしていた美優が顔を上げた。

「どうしたの？ 疲れた？」

「……思春期だなんて……思って……」

「？」

意味がわからない、という風に美優が首を傾げる。尚輝にだってわからない。

「なんでもねえ。ところで、どこがどう違うって？」

「あっ、そうそう。えっとね……」

そう言って美優が再びノートに視線を落としたその時、図書室の入り口が開いた。夏休みだから、普段以上に人の出入りは少ない。

珍しく誰かがやってきたと、何気なくドアの方に目をやって、「あ」と小さく声が漏れた。

「あれっ、尚輝？」

相手も、すぐに尚輝に気付いて声を上げた。

「明日花じゃねえか。珍しいな」

どことなく派手な雰囲気その少女は、尚輝と美優が座っている机に近づいてきて二人を交互に見た。

「何してるの？」

「お前こそ」

「私は補習一。だったんだけど、先生が風邪ひいちゃったとかで、中止になってさー。暇潰しに来たの」

「帰りゃいいじゃん」

「一時間後にまた別の補習があるの一！ それまで暇なんだって」

長い巻き毛をくるくると指で弄びながら、明日花は少し大げさに溜め息を吐いて見せた。それから何かを思い出したように、「あ、そうだ」と呟いた。

「尚輝、いま英語のノート持ってる？」

「持ってると思うけど……なんでだ？」

「最後の授業のとき、私休んでてさー。あれ、なんか宿題にちょっと関わってくるらしいじゃん。ちょっと写させてほしいんだ」

「ああ、そういうことか。ちょっと待ってろ」

鞆の中を探り、一冊のノートを見つけ、手渡す。

「ありがと。今からパパッと写しちゃおう……と思ったんだけど、教室に筆記用具置いてきちゃった……」

ちょっと取りに行ってくるね一、と言って、明日花は小走りに図書室を出て行った。

それまで黙って尚輝と明日花のやり取りを聞いていた美優が、ようやく口を開く。

「……同じクラスの子？」

「いや、隣のクラス」

「その割には、ずいぶん仲よさそうだよな？」

「あー……なんていうか、友達経由で友達になった、みたいなの？」

明日花は明るく人懐こい性格で、どのクラスにも友人が多かった。尚輝も、入学して数日後に初めて彼女と喋ったのだが、すぐに打ち解けた。

「そうなんだ。……ところで、君島くん」

「ん？」

美優の声音が、少し困ったようなものになったので、何事かと首を傾げた。

「さっき、彼女に渡したノートだけど……あれ、リレー小説のノート……じゃない？」

どちらも、同じ市販の大学ノートを使っている。リレー小説の方は、表紙に『図書部』とちゃんと表記してあるのだが、そこまでちゃんと確認せずに渡してしまった。が、美優の座っている位置からは、その文字が見えていたようだ。

「……そういうことは早く言えよなああああああ！」

図書室では静かに、という常識すら頭から抜け落ちて、尚輝は大慌てで明日花の後を追った。部員以外の誰かにあのノートを見られるなど、恥でしかない。

しかし、時は既に遅く。

表紙の『図書部』の文字を見た明日花が、中のリレー小説を覗いたらしく。幸いだったというか、意外だったのは、彼女がそれに興味を持って、「私もこれやってみたい！」と入部を志願したことだった。

こうして、最初で最後の図書部員となるメンバー全員が、集まった。入学してから四ヶ月足らず、部が発足してからは、まだ一ヶ月も経っていなかった。

そんな調子で部員が集まったものだから、その先も順調に部員が増えていくのではないかと、尚輝は思っていた。

けれど、明日花の入部が最後だった。

それ以来、入部希望者は現れなかった。

「……あれ、洸は？」

ある日の放課後、図書室を訪れるといつも先に来ているはずの洸の姿が見当たらなかった。女子三人はいつも通り隅の方の机に腰掛けて、リレー小説のノートを広げながら何やら意見でも交わっていたようだ。

「坂本先生に呼ばれて行っちゃったー」

尚輝に気付いた明日花が、振り返って答えた。

「坂本先生が？ ……珍しいな、普段顧問らしいこと全然しないのに」

思わずそう呟くと、美優が苦笑する。何かあったのかな、と思いつつも、とりあえず彼が帰ってくるのを待とうと、空いていた席に腰掛ける。

「いつ出て行ったんだ？」

「私たちがここに来てすぐだったから……もうすぐ帰ってくるんじゃないかな？」

壁にかけられた時計で時間を確認し、美優が小さく首を傾げる。

ふうん、と尚輝が相槌を打つと、三人は再びノートに目を落とし、話を再開した。

「だからさ、明日花はケータイ小説の影響受け過ぎなんだって」

「えー……そうかなあ。でも千尋が薦めてくれる本って難しくてよくわかんないんだもん。この前もなんか、外国の作家の詩集？ だったか読んでたけどさ」

「シルヴィア・プラス」

「知らないよう」

「千尋ちゃんは、詩集とか読むの結構好きだよな」

女子三人の話を聞きながら、尚輝もノートに目を落とす。

と、そのとき図書室のドアが開いた。入ってきたのは、洸だ。

「おかえりー」

「先生、なんだって？」

尚輝の隣に座った洸は、いつもと変わらないように見えた。

「うーん……なんかね、活動報告書？ みたいなの、出せって」

洸の言葉に、他の四人は揃って首を傾げる。

「活動……」

「報告書？」

「うん」

「って、部活の？」

「だね」

いまいち要領を得ないので、

「ごめん、一から説明して」

と千尋から突っ込みが入った。

「うん。えっとね、まず部室の話。ここ、図書室は一般の生徒も使うわけじゃない？」

「ああ」

何を今更、と思う。だってそれは、部を設立してすぐの頃にも、彼が言っていたことだ。

現に今だって、ちらほらと周囲に部員以外の生徒の姿がある。

「僕は、部活に興味を持ってもらうために、人目に触れる場所で活動するのは良いことだと思っていたよ」

「でも」と洸は続けた。

「むしろ、それが少し問題だったみたいで」

「……というと？」

問題、という単語に、全員が少し眉をしかめた。何か、まずいことにでもなったのだろうか。

「生徒の中に、『あの人たち何してるの』って疑問に思ってる人がちょこちょこいるみたいなんだ。もちろん、好意的な意味ではなくて、ね」

「……好意的じゃないっていうのは、つまり……」

「まあ、端的に言ってしまうえば邪魔だってことだよな」

すっぱりと、容赦のない言葉で洸が言い切った。それぞれ、困惑した表情で顔を見合わせる。

「でもさー、邪魔って言っても、別に迷惑とかかけてないよね？ 図書室に来る人だって、そんなに多くないじゃん？」

明日花の言う通りだった。大きな声で騒いでいるとかならまだしも、邪魔だと言われるほどのことはしていないはずだ。机を一つ占領しているとは言っても、人の少ない図書室の隅、ひっそりと活動しているだけである。

「迷惑はかけてなくても、やっぱり目についちゃったりとか、するからさ」

「……じゃあどうするの？ 部室移すって言っても、空いてる部屋なんかないでしょ」

背もたれに体重を預けた千尋が腕を組みながら問うと、洸は首を横に振った。

「部室は、このまま図書室を使っていいってさ。……その代わりに」

言いながら、どこに隠し持っていたのか、洸は一枚の紙を取り出し、顔の横でひらひらと振ってみせた。

「これ、書けて」

「……これが、活動報告書？」

紙の上部には、確かに太字でそう書かれている。

「ようするに、何をしているかわからないから問題なんだって。……これは、部活の存在をはっきりと学校側に主張してこなかった僕の責任だ、ごめん」

洸が、小さく頭を下げる。

すると、明日花の細い指がその報告書に伸びた。

「別にいいよ。ちゃんと、ここに解決策があるんだし」

ここ、と言って明日花は摘み上げた報告書をぺらぺらと翻す。

「で？ これに何を書けばいいの？」

「そこに書いてある通りだよ。毎日、部活でどんなことをしたのか、ちゃんと書いて坂本先生に出せばいいんだって」

「なんだ、それだけでいいんだ」

話の内容の割に、図書室に戻ってきた洸が平然としていたのも納得がいく。てっきり、部室を移れだとか何とか言われるものだと思っていたから。

「報告書は……そうだね、毎日交代で書いていくことにしよう」

「はい」

子どもみtainな返事をした明日花に、洸は小さく笑った。

「それと、一応今回のことを頭において、『図書室では慎ましく行動する』ってことを、忘れないように」

「慎ましく……」

その言い方に、なんとなく笑ってしまった。

洸は鞆からペンケースを取り出すと、「今日は最初だから、部長の僕が書くよ」と言って報告書に記入を始めた。

まず日付と、記入者名を記した後に、洸はこう書いた。

『今日から活動報告書を書かせていただきます。周囲の迷惑にならないよう、十分に配慮して活動を行っていきますので、なにとぞよろしくお願いします』

月日が流れ、二年生に進級し、新入生がやってきても。さらに一年が経ち、最上級生になっても。

図書部に、新しい部員は入ってこなかった。部長である洸が、「特に勧誘はしない」という態度を貫いていたせいもあるだろう。

でも正直なところ、みんな、それでもいいと思っていた。

「このままが、いいね」

そう言って美優が笑った。

あれは、いつだったか。

「……部員増えるなってことか？」

「ううん、違うの。そうじゃなくて」

いつかの放課後。まだ誰も来ていなくて、尚輝と美優が、二人きりで話しているときに。

「尚輝くんと、洸くんと、千尋ちゃんと、明日花ちゃんと、私」

指折り、部員の名前をあげていく。

呼び方が、「君島くん」から「尚輝くん」に変わっていたから、一年の冬ごろのことだろうか

。

「卒業まで、ずっとこうして、変わらずにいられたらって」

美優がはにかんだような笑みを浮かべる。何故だか、その表情を長いこと直視することができ

なくて、尚輝は体ごと顔を逸らしたのだった。

「……美優は、この部、好きか？」

「うん！ 大好き！」

明るい声が、耳に弾ける。

「みんな、大好き」

その無邪気な言葉に、「友情」以上のものは含まれていないと知っていても。その「みんな」の中に自分が含まれているのだと思うと、尚輝の胸は一つ、大きく高鳴るのだった。

『このままだ、いいね』

部員が増えなくても、たった五人のひっそりとした部活でも。ただ、放課後にみんなで集まって、話をして、本を読んで。リレー小説を書いて、みんなで一つの物語を作り上げて。

それが、楽しくて仕方がなかった。

そんな日々が、ずっと、卒業するまで続くと。信じて疑わなかった。

懐かしの母校を後にした尚輝は、近くの公園に足を運んだ。

まだ幼稚園に上がる前と思われる年頃の子どもたちが、危なっかしい足取りで駆けている。若い主婦たちが、集まって世間話に花を咲かせている。

そんな、どこにでもあるような風景が広がる、公園の一角。空いているベンチに、そっと腰を下ろした。

一つ息をつき、鞆の中から一冊の本を取り出す。

『甲斐森高等学校図書部』

先ほど図書室で見つけた、あの、本だった。

坂本にも何も言わず、無断で持ち出してきた。本当ならいけないことだ。しかも、尚輝は本を返しに行ったはずなのに、こうしてまた別の本を持ってきてしまった。

けれど、これは恐らく、学校側に管理されていない本だ。何かもっと、別の意図をもって、あそこにあった。

ポケットから、携帯電話を取り出す。アドレス帳を探り、ある人物の電話番号を呼び出した。

嫌に緊張する。友人に、電話をかけるだけなのに。

数回のコール音の後、

『……もしもし？』

懐かしい声が、耳に届いた。

「……久しぶりだな、洸。……電話番号、変わってなくてよかった」

『尚輝……？ ……本当に……久しぶり。どうして、また……』

洸の声は、戸惑いがにじんでいた。それはそうだ、と思う。

高校を卒業して以来、一度も会っていなかった。声も聞いていなかった。洸だけじゃない。他の部員もそうだ。誰一人、連絡をとっていなかった。

あんなに、仲が良かったのに。

「ちょっと……みんなで、会えないかなって……思ってた」

『みんな？ みんなってというのは……』

「図書部のメンバー」

受話器の向こうで、呼吸が一瞬止まった。

それから、掠れた声が返ってくる。

『どうして……また……』

どうして、今更。ずっと、避けるようにしてきたのに。

「……見てほしいものが、あるんだ」

『見てほしいもの？』

「ああ。……ちょっと今日、用事があって、甲斐森高校に行ってきたんだけど……図書室で、あるものを見つけてさ」

膝の上に乗せた本。真っ白な、その表紙を見つめる。

「……作者のところに、『甲斐森高等学校図書部』って書かれた本があってさ」

『……え？』

「お前、こんなの作った覚えあるか？」

洸は、すぐに否定の言葉を返してきた。

やはり、と思う。

「その、本の、中身なんだけどな」

すう、っと微かに背筋が冷える。

春の訪れを孕んだ真昼の日差しは、温かいのに。

「……リレー小説なんだ。俺たちが、書いてた」

卒業までに完成させることを目標にしていた、あの。部員五人の間で、順番に紡がれていった、あの話が。

なぜかここに、こうして本の形になって、存在している。

『……嘘だ』

嘘だ。

洸は、尚輝が本を開いて最初に思ったことと、同じ言葉を返してきた。

『そんなこと、あるはずない』

「……だよな。あるはずがない」

でも、と手にした本を目の前に掲げる。

「あるんだよ、実際。ここに」

『だって！ あのノートは！』

珍しく。本当に珍しく、洸が声を荒げた。初めて聞いたかもしれない。

それほど、動揺しているのだろう。

『美優が……持ってたはずだ……』

押し殺すような声で、洸が低く告げる。

「……そうだな。美優が、最後に持ってた」

『だったら……！』

「まあ、実際に見てから判断してくれよ」

まだ何か否定の言葉を続けたそうな洸を遮り、そう言った。

見てもらわないことには、どうにもならないと思う。

「他のやつらにも、連絡とってみる。……あいつらも、お前みたいに番号変わってないといいんだけどな」

少しの間、沈黙があった。

受話器を押し当てている方とは反対の耳に、子どもたちの甲高いはしゃぎ声が届く。

『……わかった』

頷いた洸の声に、安堵の息が漏れた。

他のメンバーと連絡をとり、全員の都合が良さそうな日がわかったらまた連絡すると、そう告

げて電話を切る。

やはり、思い違いではなかった。洗も、尚輝の記憶と同じことを言った。

『美優が……持ってたはずだ……』

そう、美優が持っていた。完成することのなかったリレー小説は、最後に彼女の手元に留まっていたはずなのだ。

だとしたら。

やはり、これがこうして本の形になって、ここにあることはありえない。

「……………」

大きく溜め息を吐いてから、今度は明日花のアドレスを探し出す。

繋がるだろうか。繋がればいい。

コール音を聞きながら、尚輝はあの小柄な、長い黒髪が印象的な少女の姿を、脳裏に思い描いていた。

もう二度と、会うことのない。

卒業を目前にしてこの世を去った、一人の少女の姿を。

審判部な面々

諸星崇

第一話 いい目をしている

プロローグ

ピッチャーの立つマウンドは、名実ともに野球場の中心だ。

陽射しが注ぐ。風が抜ける。勝利を願う声援は、四方から包み込むように身体をふるわせる。

「ふうー……」

雲ひとつない青空をあおぎ、公平（ルビ：こうへい）はひとつ、大きく息をついた。

全国中学生野球大会決勝、九回ツーアウト。さすがにここまで来ると、長かった。身体は疲れきって、逆に疲れていることがわからなくなっている。

（けど、それも次で終わりだ）

視線を戻す。チームメイトのかまえるキャッチャーミットが見えた。

右手の中には、慣れ親しんだ感触。このボールをまっすぐに投げ込めば、長い長い戦いは終わる。

「いくぜ……」

両腕を振りかぶる。ベース上にランナーがいる状況では、本来はご法度だ。だが、最後の一球は自分の全力をふりしぼって投げたかった。

身体が前に乗り出す。踏み込んだ左足が砂ぼこりを上げて、全身の力を支える。右腕が大きな弧をえがいてしなり、その先端から白球が飛び出す。

糸を引くようなストレート。会心の手ごたえ。理想どおりの軌道を残して、ボールはミットに収まった。

乾いた音がひびく。ストライクゾーン、ぎりぎりいっぱい。バッターはぴくりとも動かなかった。

（勝った！）

自然と、ガッツポーズが出かかる。審判が口を開き、公平の勝利を宣言する。

「ボール！」

そのはずだった。

頭が真っ白になる。一瞬、公平は何も聞こえず、何も見えなくなった。耳を疑ったのは、そのあとだ。

「……え……？」

呆然としたまま、口の端が開いた。キャッチャーからの返球を、長年の習慣で機械的に受け取る。それでもまだ、公平の目は自分が投げ込んだ場所を見続けていた。

ストライク。三振だ。それでゲームセットのはずだ。

なのに、どうしてボールが返ってきたのだろう。なぜ、チームメイトがひとりも公平のもとへやってこないのだろう。

公平は今、マウンドの上で仲間たちとよろこびを爆発させているはずなのに。

「プレイ！」

審判の号令がかかる。バッターがバッターボックスに入り、キャッチャーもミットをかまえる

。

守備の選手も、ランナーも、それぞれの体勢に入った。観客席からは一段と大きな声援が送られてくる。

みんなが、公平の一球を待っている。無意識に、公平は投球モーションに入った。

さきほどの一球から、自分が一度もまばたきをしていないことには、最後まで気づかなかった

。

踏み込んだ足がふらつく。飽きるほど見てきたはずのミットが、はるか遠くにあるように感じる。腕は慣性にしがたって楕円をえがくだけ。

気持ちが切れてしまった公平の身体を、急激な疲労感がおそった。

ボールがすっぽ抜ける。練習でも投げないような、なんの迫力もない棒球が飛んでいく。スロームーションのようにゆっくりと進んでいく白い球体。

金属バットのひらめきが、その軌道上に重なった。

快音を残し、白球は空高く舞い上がる。一瞬にして、ボールは公平の視界の外に飛び出した。

静寂の中、青空を突き抜けて——やがてそれは、外野スタンドのど真ん中で、高く高くはずんだ。

1 グラウンドでの一幕

「アウトだろー！」

「セーフだよ！」

ホームベースをはさんで言い合いが続く。白と黒のユニホームにわかれた一団同士は、おたがいの主張をまったく曲げない。もう五分以上も、ずっとこの調子だ。

どちらも小学生だから、引き下がることを知らない。調停役の審判も同じく小学生のようで、選手たちの勢いに飲まれて、ひたすらおろおろしている。

このままでは、いつまでも口論が終わりそうにない。

「アウトだよ」

無粋かとも思ったが、公平はさすがに見かねて口を出した。日曜の昼下がりの河川敷。かつての公平と同じように、真っ黒に日焼けした少年たちの視線が集中する。

公平が居合わせたのは、ただの偶然だ。散歩がてら歩いていたら、歓声と金属バットの快音が聞こえてきた。

気づいたときには草の上に座って、白球を追いかける少年たちを見ていたのだ。

「いいスライディングだったけど、おしかったな。今のはアウトだ」

白いユニホームのチームから歓声上がる。が、黒いユニホームのチームは納得しない。特にその中の一人、今しがたホームに駆け込んだ少年はかみつきそうな目で公平をにらんでいる。

「いきなり出てきて、なに言ってるんですか？」

ちゃんと敬語で話すのはえらいなど、公平は自分の小学生時代を振り返りながら思った。やんちゃで生意気な野球小僧だった自分は、大人にも平気でくれた言葉を使い、よく監督にはたかれたものだ。

公平はホームベースの横にしゃがみ込み、地面を指した。

「ほら、ここだ。スライディングの跡が残ってる。ここに身体が寝てる状態で、きみ、ホームまで手が届くか？」

ほおをふくらませた少年が、公平の示した場所に横になる。彼がキャッチャーの手をかいくぐってすべり込んだ場所だ。そこからホームベースに手を伸ばして、少年の表情が変わった。

ほんのわずか、おいしいところで、指先が届かない。ホームベースに身体の一部がふれなければ、得点は認められない。

彼は、味方のヒットでホームまで帰ってきた。そして、返球を受けたキャッチャーがタッチする前に、その手をかいくぐってホームにすべり込んだはずだった。

だが、彼の手はホームベースにふれていない。直後、キャッチャーが彼にタッチした。

公平の目には、その一部始終が見えていた。

「本当におしかったけど、タッチアウトだよ」

ランナーの少年がくちびるをかみしめる。その目が大きく揺れ、白いユニホームのチームもさわぐのをやめた。

公平は、黒い野球帽の上にぽんと手を置いた。

「少しでもかくなりゃ、今度は届く。ナイスプレー。守ったほうもな。ほら、ゲームの続きだ」

ランナーの少年はぐしぐしと顔面をぬぐい、公平に向かってがばっと頭を下げた。そして、自分たちのベンチのほうへ走っていく。

ちょうどここで攻守交替だった。白いユニホームのチームもベンチに戻り、グラウンドからはほんの一時、選手たちの姿が消える。

小さな後ろ姿をたのもしく感じながら、公平は立ち上がった。

声をかけられたのは、そのときだった。

「キミ、いい目をしているな」

涼やかな風が吹いた。そう思った。

長い髪をなびかせた女性が公平の前に立っている。切れ長で、意志のはっきりとした黒い瞳が、じっとこちらを見ていた。

年は公平と同じくらいだ。背丈も公平のほうが高い。なのに、公平のほうが見下ろされているような、不思議な感覚がした。

目に飛び込んでくる、まっすぐで強い光。それが、まるで彼女自身を象徴するかのようだった。野暮ったいジャージに身を包んでいながら、すらりとした立ち姿には気品すら感じられる。

吸い寄せられるように、公平は彼女から目を離せなくなった。

「再開しまーす！」

「おっと、行かねばならんか」

審判の少年の声に、彼女はさっそうときびすを返した。そのまま、二塁近くの塁審の位置へと移動する。どうして高校生が混ざっているのかと思ったら、審判だったらしい。

試合が再開し、公平はあわててグラウンドの外に出た。歩き出してしまったついでで、そのまま河川敷を後にする。

一度、振り返ると、二塁のそばにすらりと立つジャージ姿があった。

結局、彼女はもう公平のほうを見ることはなかった。けれど、公平はどうにも彼女の子とが引っかけかっていた。

「また会おう」

そう言われた気がしたのは、吹き抜けた風のせいか、よくわからなかった。

2 部活審判

日下部（くさかべ）公平は帰宅部である。

彼が通う私立東雲学園（しののめがくえん）では、部活動は義務ではない。だが、全校生徒の実に九十九パーセントが、なんらかの部活かサークル、あるいは委員会に所属している。

それというのも、学園の多様性にある。

生徒数、実に一万。高校としては超マンモス級の規模を誇る東雲学園には、およそありとあらゆる団体が存在し、活動している。

たとえば運動部なら、野球部やサッカー部、バスケット部にバレー部といった有名どころから、セパタクローやカポエイラ、カバディまでそろっている。

文化部なら演劇部や吹奏楽部とならんで、きのこ培養部や陶芸部、エスペラント語研究会が看板をかかげている。

放送委員会や図書委員会はもちろん、駐輪場管理委員会や校舎修繕委員会も活発に活動中だ。

そして、漫研やアニ研はもとより、アイドル研や声優研、その他のマニア向け研究会も数え上げたらきりが無い。

自分の趣味や好みに合致し、理解し合える仲間がいる場所が、学内には必ずあるのだ。

というわけで、義務ではないものの、生徒たちの間では部活はなにかやっているもの、との空気ができあがっている。

公平も、入学して三週間ほど経った。もうすぐゴールデンウィークだ。その前には、どこかの部活にあたりくらはつけておきたいところだった。

「グラウンドでものぞいてみるかな」

特に意識しなくても、足は自然に運動部に向く。これも、長年の間、身体を動かすことを続けてきた証なのかもしれない。

東雲学園の硬式野球部は、はっきり言って弱小だ。と言うより、運動部全体がそこまで強豪校とはなっていない。部活の数がありすぎて、指導環境の整備まで手を回せないからだ。

東雲学園全体としても、よくも悪くもゆるい雰囲気を持っており、突出して優秀な成績を修める部活はない。だからこそ、公平はこの学園を選んだのだが。

全国中学生野球大会、前回準優勝投手。肩書きを見れば、野球部員が連日押しかけても不思議はない。それが日下部公平という選手だった。

だった、だ。今はちがう。

公平が、公式の場で硬球を投じることは、もうないだろう。残念ながら、彼の身体はもう、その肩書きを背負うことはできなくなってしまった。

「野球はやめとこ」

バックネットを置いて、金属バットの独特の快音をひびかせている野球場から、公平の足はどうしても遠ざかる。まだ気持ちの整理がつけきれしていない。

自分でやめると決めて、親元も離れ、知り合いもいない東雲学園にやってきた。一万人も生徒

がいれば、自分の名前も埋もれさせてくれる。実際、昔の公平のことを知っている人にはまだ会っていない。まあ、一ヶ月も経っていないわけだが。

ともかく、公平はまだ、野球から距離を取っておきたかった。といって、文科系の活動が性に合うとも思えない。

たまたま野球づけになっていたが、本来、公平はスポーツ全般が好きで、できるだけ身体を動かしたいたちだ。なので、どうしても運動部に目が行ってしまう。

「ま、好きなことやるのが一番だろうし。いいだろ」

とりあえず、何かの形で身体は動かしたい。公平自身、帰宅部生活にはそろそろ飽きが来はじめていた。

グラウンドでは、サッカー部が紅白戦をしていた。観客もそこそこいて、声援を送っている。

グラウンド脇では新聞部や写真部がカメラをかまえていて、応援団とチアリーディング部も出張っていた。どこもかしこも、部活動の真っ最中のようだ。

ところが、肝心のサッカー部の動きが止まっている。ピッチの中でそれぞれ、所在なさげに立っていた。

手持ち無沙汰というか、どこか困惑しているというか、妙な空気だ。ケガ人が出たにしては落ちているので、そういうアクシデントではなさそうだが。

「すみません、何かあったんですか？」

近くの生徒にたずねる。と、返答はグラウンドのほうからやってきた。

「キミ！」

涼やかで、それでいて強く、よく通る声が公平の耳朶を打つ。自分のことを呼ばれたとは限らないのに、公平に目を向かせるには充分だった。

「そこで観戦している一年生男子！ 来てくれ！」

長い髪をひとつにまとめた女子生徒が言う。そこそこ距離があって、顔ははっきりしない。なのに、その声は一言一句もぶれずに公平に届く。

公平は左右を見回した。みんながみんな、公平のほうを見ている。自分の顔を自分で指すと、女子生徒は大きくうなずいた。

雰囲気を押されるようにして、公平はグラウンドに向かう。女子生徒が腕組みをして、公平のことを待っていた。

「あれ？」

どこかで見たことがある。すらりとした長身。細い顔。そしてなにより、はっきりとした意志が伝わってくる強い光を帯びた瞳。

河川敷ですれちがった、あの女性だ。

「キミ、サッカーを知っているか？」

いどみかかるような目で、名前も聞かれずにそう言われる。わけがわからないが、彼女の目は真剣だった。問われるがまま、公平は答える。

「そりゃあ、まあ、知ってますけど」

「説明してみてくれ」

説明もなにも、サッカーはサッカーだ。そう思ったが、まっすぐに向けられる視線がごまかしを許さない。

とにかく頭に浮かんだ言葉を、公平は脈絡もなくならべた。

「ボールを蹴って、相手ゴールに入れたら得点。手を使ったら反則。ラインの外にボールが出たらプレイを中断してスローイン。得点を多く取ったほうの勝ち」

「よし」

女子生徒はうなずくと、かたわらにあった布を公平に差し出した。反射的に受け取る。無数の小さな穴を開けられたナイロンの手ざわりがあった。

それと、ひもにつるされた銀色の笛が手のひらに転がる。

「なんですか、これ？」

「見てわからないか？ ビブスとホイッスルだ。それと、これが必要なのだったな」

手渡されたのは、黄色と赤の札が一枚ずつ。いわゆるイエローカードとレッドカードだった。

目をしばたかせる公平の肩を、白くたおやかな手がぽんと叩く。真剣なまなざしが、公平を射抜き、言葉がつむがれた。

「今からキミが主審だ。よろしく頼む」

紅白戦は結局、引き分けに終わった。

健闘をたたえる拍手が聞こえ、選手たちが軽く手を振って答える。公平はその横で、ベンチに座ってせえせえと呼吸を整えていた。

想像以上にきつかった。二十分ほどだが、ウォーミングアップもなしに走り通しだ。さらに、一つ一つのプレーを見極めるという仕事が重なる。

ただ走るだけならなんとかなったが、審判という慣れない緊張がくっついて、公平は疲労困憊だった。

「助かった。ありがとう」

ペットボトルのスポーツドリンクが差し出される。声が出ず、公平はしぐさで礼を伝え、中身をあおった。

のどを落ちる冷たい感覚が気持ちいい。ひさしぶりに味わった気がする。半分ほどを一気に飲み干して、ようやく公平は一息つけた。

「いい飲みっぷりだ」

例の、強い目をした女子生徒が、公平を見ながら微笑んでいる。自信とよゆうに満ちた自然な笑顔で、それがとても似合っていた。

「そういえば、名前を聞いていなかったな。私は風真凜（かざまりん）。二年だ」

「あ、日下部公平です」

「公平か。いい名だな」

ふっと、凜の表情がやわらぐ。整った顔は、それだけで人目をひきつけた。名は体を表すと言うが、まさに凜とした女性だ。公平よりよほど、いい名前だと思う。

「あの、この間、河川敷で」

「ああ。会ったな。覚えていてくれて光栄だ」

さらりと返される。公平の見まちがえではなかったようだ。

凜は今日も、あのときと同じジャージを着ている。よくよく見れば、公平とは色ちがいの東雲学園のジャージだった。

青色は一学年上。二年生の着用する色だ。

「この前もそうでしたけど、なんでまた、審判なんてやってたんですか？」

「クラブ活動だ」

「サッカー部なんですか？」

「いや、ちがう。私は審判部だ」

一瞬、公平の頭には漢字が浮かんでこなかった。

「審判部？」

「そうだ。あらゆる競技で審判を務めることを主目的としたクラブだ。今日は見てのとおり、サッカー部におじゃましていたのだが、主審を務めていた部員がへばってしまってな。困っていたところだ。本当に助かった」

言いながら、凜はてきぱきとかたづけをはじめた。段ボール箱にビブスやホイッスル、ドリン

クの容器などを放り込み、荷物をまとめる。

お礼にお茶でもどうかと言われ、公平はうなずいた。足腰がへとへとで休みたいところだったし、凧の話にも興味がわいた。

いろいろな部活を聞いてきたが、審判部というのははじめてだったからだ。

「あ、持ちます」

体育会系育ちのさがで、先輩にもものを持たせると居心地が悪い。しかも、相手は女性だ。とっさに出た一言だったが、凧は「ありがとう」と言って、公平の意思を尊重してくれた。

グラウンドからは離れて、校舎脇のクラブ棟に向かう。落語研究会や人形劇部などの看板があるところを見ると、文化部系の建物のようなのだ。

その一室の扉を、凧が開けた。入り口のところにはたしかに「審判部」のプレートが取り付けられていた。

「何もないところだが、ゆっくりしてくれ。すまないが、私は着替えさせてもらいたい。すぐに戻るから待っていてくれないか」

「あ、はい」

凧が出ていくと、室内には公平一人になった。

(他に部員がいないってことはないみたいだけど)

部屋の中央のテーブルには、私物と思しきマグカップがいくつかならんでいる。花柄のものや単色のシンプルなもの、ゲームのロゴがデザインされたもの、化学用のビーカー。

どれが凧のものかはわからないが、すべて彼女のものということはないだろう。

「お、ルールブック」

天井まである本棚に、ずらりと本がつめ込まれていた。中の一冊は、公平にもよく見覚えがある。野球の公式ルールブックだ。

となりににはサッカー。続いてバスケット、バレー、バドミントン、テニス、ゴルフ、ラグビー、アメフト、柔道、剣道、ボクシング、スキー、スケートなどなど……ほとんどのスポーツのルールブックが網羅されている。

ちがう段には将棋や囲碁、麻雀の本もあった。さらに演劇や音楽の大会要項、色彩表に六大栄養素表、六法全書にギネスブックもある。

どうやら、審判部はスポーツ以外でも審判をしているらしい。部屋の隅を見たら、○と×の描かれた紅白の帽子が転がっていた。昔、クイズ番組で見た覚えがある。

「たしかにクイズにも、審判がいるもんな」

思ったより活動範囲の広い部活のようだ。

「待たせたな、すまない」

制服姿の凧が戻ってきた。そういえば、公平はこのかっこうの凧を見るのははじめてだ。

東雲学園の制服は、けっこう評判がいい。デザイン系の道に進んだ卒業生がデザインを担当したそうで、清涼感のある水色のラインの使い方が女子生徒に人気だ。ちなみに男子はブレザーである。

野球一本でやってきた公平は、そうした美的感覚はないに等しいが、学園の制服が駅や街中

でちょっと人目を引くのはわかる。

それはきっと、女子が言う「かわいい」の領域に制服のデザインが入っているからだろう。

そんなふうにはぼんやりと認識していただけだったのだが、凜が着ているところを見ると、急に実感がわいた。

東雲学園の制服は、公平が思っていたよりいいものなのかもしれない。

「私の顔に何かついているか？」

不思議そうに言われ、公平は我に返った。凜の制服姿に目を奪われていたなどと言えるわけがない。ごまかすため、あわてて口を開く。

「か、風間先輩」

「なんだ、他人行儀だな。凜と呼んでくれ。部員も友達もみんな、そう呼んでいるし、『先輩』もはずしてくれていい」

お茶を入れている凜はなんの気なしに言っているが、ほぼ初対面の女性を名前と呼ぶというのは、公平にはハードルが高い。

それでも必死になって、とにかく呼びかける。

「り、凜さん」

「なんだ？」

公平としては根性のいる呼び方だったが、凜は本当に呼ばれ慣れているようだ。さらりと返してくれたことが、逆に公平を落ち着かせた。

凜にイスをすすめられ、素直にかける。公平は最初に感じた疑問を口にした。

「なんでわざわざ審判なんですか？ スポーツを直接やるんじゃないって」

マグカップを二つ持ってきて、凜が対面に座る。彼女の手には、赤いシンプルなカップがあった。

軽くカップをかたむけ、凜は公平の顔をのぞき込む。

「日下部はスポーツが得意そうだな」

「まあ、それなりにできます」

「そうか。うらやましいな」

公平は軽く首をかしげた。凜が、運動ができないようには見えない。そう答えると、凜は小さく笑った。

「苦手ではないが、そこまでできるほうでもない。普通だ」

そう言って、凜はちらりと視線を動かす。公平の背後の本棚に彼女の目が向いていた。

たくさんのルールブックを見ながら、凜は口を開く。

「私は競技全般が好きなんだ。スポーツに限らずにな。けれど、私が実際にできる競技は少ない。たとえば、私が男子に混ざってサッカーをするのは無理だ。マラソンもあまり自信がない。だからと言って、つながりを断てるほど潔くもない」

視線が公平に戻る。凜の目は、楽しそうに輝いていた。

「観戦するのもいいが、それだけではさびしくてな。だから、審判を選んだんだ。競技そのものはできないが、観客席よりずっと近くで熱を感じられる。それも、たくさんの競技にわたってな。ぜいたくだろう？」

ふわりと、春風のような微笑みが広がる。

「私は欲張りなんだ」

その声は、笑っているように聞こえた。

公平にとっては新鮮な考え方だった。審判をそんなふうにとらえている人など、会ったことがない。

それに、競技ができない人なりの参加のしかたというところがおもしろかった。

(オレも、また野球に関われるのかな)

ボールを手放したとき、公平はもう野球をすることはなく、グラウンドに立つこともないと決めつけていた。野球をやめるのだから、それが当然だと思ったのだ。

だが、審判という道は考えもしなかった。たしかに審判なら野球のルールに精通しなければならないし、誰よりも近くで選手のプレーを見ることになる。

そのことに気づいて、公平の鼓動が高まっていた。

「それに、どんな競技でも審判は必要だ。なり手がいなくて試合ができないのでは、練習を積んだ選手がかわいそうだ。その手助けができるのは、我ながら気に入っている」

続く凜の言葉に、公平は強く共感した。

「そうですよね。オレ、昔、野球やってたんですけど、仲間と試合をしようとしても、審判がなかなか見つからなかったんですよ。そういうときはじゃんけんしたり、途中で交代したりしてやってました。誰かが審判やってくれたらいいのになって、いつも思っていましたよ」

野球少年が集まれば、当たり前だがみんな、野球をやりたがる。進んで審判を引き受ける変わり者はいない。

大人がつかまればいいのだが、そうそう都合よく見つかるものではないし、その人が野球にうれしいかどうかという問題もある。

審判をそろえて試合をするというのは、実はけっこうぜいたくな話だった。

「私たちもよく、審判を頼まれる。特に運動部からの依頼は多い。みんな、キミと同じようなことを感じているのだろう」

公平は、審判部の意義がおどろくほど大きいことを感じた。運動部にとって、これほどありがたい部活もない。

公平がなにかの部活に入っていたら、真っ先に頼みにするだろう。

逆に言えば、公平があちこちの運動部から頼られ、その手助けをできることにもつながる。

「実は今、審判部にはスポーツのルールに強い部員がいなくてな。他の分野はどうにかなっているのだが、運動部には少し迷惑をかけているんだ」

凜の言葉に、公平は思わず耳を大きくした。公平はスポーツ全般が好きだ。だから、どこかの運動部に入ろうかと思っていたが、そうすると他の競技はできなくなってしまう。

その点、審判部なら、すべての競技に新しい形で関われる。しかも、審判部が公平を必要としているような状態だ。

「スポーツの審判は、なにかに限定するんですか？」

「いや。わが審判部は、ありとあらゆる勝負ごとに判定を下す。どんな競技にも関わるぞ。私は欲張りだと言ったろう」

いたずらっぽく笑う凜に、公平も口元をゆるめた。

帰宅部でくすぶっているのは性に合わない。けれど、どこかの運動部も選べない。

だったら全部に手を出してしまえ、という考えはなかった。だからこそ、心を惹かれる。

公平は姿勢を改め、凜に向き直った。胸のうちにわいてくる期待を感じながら、口を開く。

「オレでよければ、審判、やってみていいですか？」

凜の目が軽く見開かれ、ついでやわらかくなごんだ。マグカップを置き、しなやかな手を公平に向かって伸ばす。

「もちろん、歓迎する」

その笑顔は、公平の心を照らすかのように明るく、公平の目に焼きついた。

3 ルール無用？

審判部の活動の場は広い。

あるときは廊下にて。

「宿題を写すのはどっちが先か」

「じゃんけんで決めようぜ」

「では審判部が立ち会おう」

「最初はグー、じゃんけんポン！」

「よっしゃ、勝った！」

「待て。今のは後出しだ」

「バ、バカな！ 見えていたのか！」

「当然だ。私の目は節穴ではないぞ」

「さすが審判部！」

あるときは家庭科室にて。

「わたしの筑前煮が前部長の残した味よ！」

「アタシの竜田揚げこそ前部長の残した味よ！」

「では審判部がいただこう。もぐもぐ……みりんが一さじ、多かったな」

「そ、そんな！ そんなわずかなちがいがわかったっていうの！」

「当然だ。私の舌はごまかせないぞ」

「さすが審判部！」

またあるときは体育館にて。

「審判、反則だ！ 三歩歩いた！」

「今度はダブルドリブルだ！」

「それどころかボールを蹴ってるぞ！」

「当然だ。サッカーだって蹴るんだ。バスケットで蹴ってもいいだろう」

『さすが審判部——ええーっ!?!』

「だ・か・ら、ボール持って三歩以上歩いたら反則なんですよ！」

バスケットボールの公式ルールを手に、公平は全身をふりしぼって叫ぶ。真剣な顔で凜はうなずいた。

「わかった。床でつけばいいのだな」

「そうですけど、両手をついたらダブルドリブルっていう反則なんですよ」

「では蹴るしかあるまい」

「なんでですかあああああっ!!」

血管の切れそうな勢いで、公平はもう何度目かの絶叫をとどろかせた。

審判部で凜を見るようになって、公平の中での凜の評価は一変していた。

凜は優秀な審判だった。おどろくほど適性がある。目も耳もよく、一瞬のわずかな差でも見分けることができ、その正確さは写真判定なみだ。

さらに、彼女は判断力に長ける。審判はきわどいプレーがあると、どうしても一瞬、判断に迷ってしまうことがある。

しかし、凜にはそれがほとんどない。たとえ迷ってもすぐに判定を下し、一度言ったことは絶対に曲げない。

そして、凜の言葉には説得力がある。つねに堂々として自信に満ちており、その場にいる全員に、判定を納得させる雰囲気を持っている。凜の判断になら従おうという空気が、その場に流れるのだ。

そんな完璧超人の凜なのだが、一つだけ、致命的な欠点があった。

「ルール音痴」だ。

どういうわけか知らないが、凜は競技の一般的なルールをまるで把握しておらず、しかも、教えられてもほとんど覚えることができないのだ。

たとえば短距離走なら、「速ければ勝ち」だ。このていどなら、凜でも判定できる。長距離走や幅跳び、槍投げなどの投擲競技も問題はない。

むしろ、そういう競技なら、凜はとてつもない正確さで判定を下す、超一流の審判と言える。

しかし、球技になるととたんに話にならなくなるのだ。

「続けますよ、凜さん。問題です。バレーボールで、相手コートにボールを戻すまでにさわられる回数は？」

「下に落とさなければいいのだろう？」

「三回です。それじゃ試合が終わらないでしょ……」

一事が万事、この調子だ。審判部の部長で、あれほど堂々としているのだから、どんなにすごい人なのだろうと思っていたら、べつの意味でとんでもない人物だった。

今では、公平の中に凜が頼れる先輩だという認識は、ほぼ残っていない。

今日も昼休みに、バスケットで遊んでいた連中のところに凜が入って行って、めちゃくちゃな判定をくり返し、騒動になった。

聞きつけた公平が無理やり凜を連れ出し、放課後、部室でルールの特訓が始まったのである。

その後、小一時間かけて、公平はどうかバスケットボールを蹴ってはいけないということだけは凜に理解させた。

そして、それが凜の限界だということに、公平は愕然とした。

「それでよくスポーツの審判なんてやりますね、凜さん」

あきれ半分、感心半分の公平の言葉に、凜は小さく鼻を鳴らした。

「馬鹿にするな。私にだって理解できるスポーツくらいあるぞ」

「なんですか？」

「相撲だ」

わかりやすい答えが返ってきた。

「土俵を出たら負け。ひざから上がついたら負け。シンプルで美しいルールだな」

さも得意そうにふんぞり返る凜に、公平は冷淡な声で告げる。

「武器を使ったら負け。目つぶしをしたら負け。相手のまげをつかんだら負け。しめこみが取れたら負けですよ、相撲は」

「……………」

凜の整った顔が、一瞬にしてこわれたおもちゃのようになる。そのままがっくりとひざをつき、両手をつき、凜は真っ白なスポットライトの中のようにうめいた。

「そ、そんなに奥深い競技だったとは……あなどっていた」

奥深くない。

いや、たしかに相撲は技量やかけ引きがものを言う、非常に奥深い競技だ。しかし、このルールは決して奥深くなどない。

それでも凜にとっては、超えられない高い壁のようなものだった。

彼女が同時に把握できるルールは、一競技につき、多くて三つ。相撲は残念ながら、その枠を超えてしまった。

(ここまでルール音痴の人がいるなんて……)

公平としてはものすごく根本的で、常識的なルールの確認をしているつもりなのだが、凜が相手だとちがうような気がしてくるから恐ろしい。

公平がグラウンドで引っ張り込まれたときは、まだルールが簡単なほうに含まれるサッカーだった。

しかも、主審は公平だったので、凜の本来の姿に気づくことがなかったのだ。

ある意味、だまされた。とはいうものの、こうなると公平としては、凜を放っておくことのほうができなくなる。

こんな調子で審判をしていては、どんな競技も破綻する。もう危なっかしくて、公平としては見ていられないのだ。

当の凜は、すました顔でルールブックを読んでいる。公平の苦勞を知っているのかいないのか、判断はできない。

なんだか理不尽な気がしてきたそのとき、部室のドアがロックされた。

「あの、すみません、審判部さん。お願いがあるんですけど」

「聞こう」

ルールブックを閉じた凜が、さっそうと立ち上がる。そういうところは本当に絵になった。

顔をのぞかせた女子生徒は、完全に目を奪われている。公平に肩をゆすられ、ようやく戻ってきて、野球部のマネージャーであることを告げた。

「あの、今度の日曜、野球部が練習試合をするんです。その審判をお願いしたくて」

「まかせておけ」

一瞬のためらいもなく、凜は即答した。公平のほうが目丸くする。と、凜は堂々と言い切った。

「私に頼みに来るということは、それほど審判のなり手がいないのだろう。最後の頼みの綱を切るわけにはいかん」

言葉はかっこいい。しかし、冷静に考えると、どうしようもなく情けない発言にも思えた。

公平は心の中でつぶやく。

(自覚はあったんだな.....)

凜のめちゃくちゃなルール裁定は、もはや東雲学園の名物だ。特に運動部は、痛いほどそのことを知っている。

それでも凜に審判を頼みに来たということは、本当にそれ以外の選択肢がなかったわけだ。凜の性格上、断るはずがない。

野球部のマネージャーは、引き受けてもらえてよかったのと、本当によかったのかわからないのと、両方が混ざった複雑な顔をしていた。おそらく、凜の武勇伝を知っているのだろう。

とりあえず、公平がフォローに入ることを約束し、なんとか安心した顔になったので、そこで帰した。

そうした後で、公平は気づいた。

「野球か.....」

よくよく考えれば、いつかこの日が来るに決まっていた。審判部にいれば、野球の審判をする日は必ずある。たまたま、公平が入部してから今日まで、機会がなかっただけだ。

野球の審判。その言葉に、公平は胸の奥がざわつくのを感じた。

「気乗りしないか？ ならば、無理をすることはない。私がやろう」

「いや、それが無理です」

相撲のルールにも挫折している凜が、野球のルールなど把握できるはずがない。他の部員も、公平以上に野球にくわしい人はいない。やはり、公平がやるしかないだろう。

しかし、心の中にはどうしても、もやつくものがあふれてくる。

「あの、凜さん」

「なんだ？」

「.....誤審って、どう思います？」

公平の問いかけに、凜の細い眉がぴくりとはねた。

一年前の夏。公平が味わった、苦い記憶。全国大会の決勝戦という舞台上、公平は勝利目前からサヨナラホームランを打たれて負けた。

そのときのことはよく覚えている。忘れることなどないだろう。だが、公平の記憶にそれ以上に深く刻みつけられているのは、打たれる前の一球だ。

完璧にストライクゾーンを通し、勝利を確信した会心の一球。しかし、判定はボール。公平の気持ちはそこで切れてしまい、次のシーンにつながった。

あの判定がちがっていればと、何度思ったか知れない。現実を受け入れるには、公平はまだ若かった。

そして、肩の故障がわかり、公平は野球から離れた。しかし、離れたがゆえに、あのときの傷はまだ公平の心に深く残る。

知らないふりをできるほど、ふさがった傷でもなかった。

凜はまぶたを伏せ、静かに答えた。

「なくなることのない事例だな。人が審判を務める限りは」

「凜さんも誤審しますか？」

「恥ずかしながら。私も人間だ」

公平が野球をやっていたことは、凜も知っている。だが、野球をやめたくわしい経緯や、過去のできごとについては話していない。

あの一球のことも、凜は知らない。

「機械がすべてを判断するのなら、あるいは誤審はなくなるのかもしれない。けれど、それはもう、スポーツではなくなるだろう。そういう形にするのなら、べつの名称を与えるべきだ」

「誤審もスポーツの内、ですか」

「そういう考え方もある。だが、私はその言葉は、あまり好きではないな」

凜が目を開いた。落ち着いた、深い色の瞳が公平を映す。公平はだまって凜の言葉の続きを待った。

「選手は審判を信じて戦っている。誤審とは、その信頼に審判が答えられなかったという結果だ。それは選手にも、競技にも申し訳ない。誤審がなくすべきものであることは、たしかだと思う」

そこで、凜は姿勢を正した。

「だから、審判にも練習は必要だ」

その一言は、公平の耳に強くひびいた。

「私は縁あって、あの河川敷で少年たちの試合を裁かせてもらっている。ほかにも、機会がある限りは、いろいろな競技で経験を積みさせてもらっている。そうして技術の向上を図ることが、その競技と、練習に打ち込む選手たちへの礼儀だと思うのだ」

凜の目の輝きには、見覚えがあった。ほかでもない。かつての公平が野球について語るときと、同じ目をしていて。

凜は本当のことを話してくれている。本心からそう思うことを公平に伝えてくれている。

「私はまだまだ未熟だが、それでも選手たちの力になれるのならうれしい。彼らの信頼に答えて、よい試合を作ることができたらうれしいよ。だから、そのためにできる努力はしたい。そうして、結果がよいものになればいいな」

凜が笑う。公平も表情をゆるませた。肩の力が抜けて、かわりに大切なことが心の中に入ってきたように思う。

「ありがとうございます」

「ん、何がだ？」

「いえ、なんでもありません」

凜の問いかけをはぐらかし、公平は立ち上がった。

「野球部の練習試合、オレに主審をやらせてください」

4 ゲームセット・アゲイン

日曜日。東雲学園の野球部グラウンドに選手たちが集まった。

相手は月杜（つきもり）高校。新進の私立校だ。スポーツ振興に力を入れていて、野球部なら、ゆくゆくは甲子園出場を目標にしている。

そういう点では、東雲学園と試合をしてもあまり意味はなさそうだが、今回は親善試合的な部分が大いらしい。おたがいに新入生を中心にしたメンバーで、交流を図りつつ、新戦力の見きわめをするのが目的だそうだ。

公平にとってはひさしぶりのグラウンドだ。ホームベースの近くから外野を見渡すと、なんだか特別な場所にいる気分になってくる。

本当はマウンドでそうしたいのだが、今日の公平はそこに立つ役目ではない。

そこに選手を気持ちよく立たせてあげるのが、今日の公平の役割だ。

「公平！」

グラウンドを見ていると、突然声をかけられた。東雲学園のベンチからではない。振り返ると、月杜高校のユニホームを着た男子生徒が一人、かけ寄ってくる。

「秀一（しゅういち）!？」

親しげに手を上げるのは、公平もよく知る選手だった。

波多野（はたの）秀一。中学生時代、大会で何度も顔を合わせた相手だ。おたがいにエースで四番。負けたくない競い合い、意識し合ううちに、なぜか仲良く話すようになった。

チームを越えた友人であり、最大のライバルとの、思いもよらない再会だった。

「ひさしぶりだな！ お前、ここにいたんだ。今日は投げるのか？」

一年近く会わないうちに、秀一は背丈が伸びていた。身体つきも、公平が知っている頃よりがっしりとしている。日焼けした顔は、今も秀一がグラウンドを走っていることを表している。

公平の胸が、ずくんとうずいた。とっさに返事ができない。秀一と最後に会ったのは、公平が最後に野球をしたあの日。

全国中学生野球大会の決勝。最後の打席に立っていたのが、この秀一だったのだ。

サヨナラホームランを打たれ、公平は野球をやめて、親元も離れた。ここで秀一と会うことなど、考えもしなかった。

「公平？」

再度呼びかけられ、公平ははっと顔を上げる。いぶかしげな秀一から、公平は思わず目をそらした。

「あ、いや、その。オレ、今日は審判なんだ」

のどがはりつくような、言いようのない感覚がした。秀一が小さく息を呑む。

「審判なのか。そうか……」

うめくような秀一の声が、かすれて消えた。

公平の事情は、秀一には話していない。全国大会が終わってから、公平と秀一が接点を持つこ

とはなかった。公平が野球から離れたことは、秀一には言っていない。

だが、もれ聞こえたうわさぐらい、秀一にも届いていたのだろう。しばらく黙り込んだ後、秀一はぼつりつつぶやいた。

「そうなんだな」

公平は返事ができなかった。何か言わなければいけない気がする。しかし、言葉が出てこない。

そうしていると、秀一が笑って肩を叩いた。

「俺、後で投げるからさ。ストライクゾーンは広めに頼むぜ、審判」

それだけ言うと、公平に背を向けてベンチへ帰っていく。走り去る背中を、公平は呼び止めることができなかった。

試合はめまぐるしい展開になった。

東雲学園も月杜高校も一年生が中心ということで、荒さが目立つ。ヒットも多いが、エラーも多く、ドタバタとした中盤まで続いた。

公平としては、逆に助かった。いろいろなことが起きて、よけいなことを考えるひまがなかったのだ。

おかげで、試合に集中することができた。

秀一がマウンドに上がるまでは。

「選手交代。ピッチャー波多野」

公平の言葉を合図に、秀一の投球が始まった。

公平は、秀一の投げる球を知っている。打席やベンチで何度も見た。ただ、キャッチャーの真後ろに立って、じっくりと見ることはなかった。

はじめて見る角度からの、秀一の姿。それは公平の知る秀一とは別人だった。

しなる腕から、白球がうなりを上げて飛んでくる。一年前とはまるで迫力がちがった。中学生の頃の秀一も、同年代の中では充分すごいピッチャーだった。

だが、今はそれに輪をかけてレベルアップしている。

(すげえ……)

秀一がマウンドに上がってから、試合が一気にしまった。東雲学園のヒットがぱたりと出なくなったのだ。

空振りに次ぐ空振り。強烈な快速球に、バットはくるくると空を切る。ストライクをコールし、三振をコールするたび、公平はたまらないさびしさを覚えた。

秀一が遠くに感じる。野球が遠くに感じられる。公平は、秀一の投げる球を見ることしかできない。この球をどうやって打とうか、考えることもできない。

(そうか……。オレ、野球をやめたんだな)

唐突に、公平の胸にそんな思いが去来した。

成長した秀一の姿には、秀一が野球を続けてきた日々がくっきりと浮かび上がる。だが、公平にはそれがない。

あの頃、同じラインの上に立っていた公平と秀一は、一年を経て、埋めようのない差を生じて立っていた。

マウンドから白球を投じる者と、それを目で追う者として。

秀一の投げたボールが公平のところまで届くたび、公平は秀一との間のへだたりを否応なく感じる。いつしか、公平には秀一の姿が見えなくなった。

ただ、投げられたボールを追いかけているうちに、試合は九回裏になった。

「かわりの選手がいない？」

九回裏、ツーアウト。

東雲学園のベンチは困ったことになっていた。

打席に立ったバッターが自打球を足に当て、負傷退場。その結果、交代要員が一人もいなくなってしまったのだ。

一年生全員のプレーを見るため、次々に選手を入れ替えたため、ベンチはもう空っぽだった。

「どうしましょうか」

「どうするって言われてもな」

得点は一点差で、ランナーが一人。東雲学園としては、このままでは負けてしまう。そして、逆転のチャンスがないわけではない。

とはいえ、バッターがいないのでは、試合を続けようがない。

マウンド上では、秀一が肩を冷やさないよう、投球練習をしている。ほんの一瞬、目が合った気がしたが、公平はそれをふり払った。

「しかたないな」

これは親善試合だ。九回裏のツーアウトまで来たのだから、ほとんど最後までやったのと変わらない。終わらせてしまっても、問題はないだろう。

公平は東雲学園のベンチから、ホームベースへと向かった。一言、公平が宣言をすれば試合は終わる。それでいい。

心のどこかでほっとしている自分に、違和感を覚えながら、公平は片手を上げた。

「東雲学園、選手交代不能により、ゲームセッ——」

「待て」

そのとき、涼やかな声が、公平の言葉をさえぎった。

二塁の塁審を務めていた凜が、いつの間にか公平の前に立っていた。手にはバットを持っている。

凜はそれを、まっすぐに突き出した。

「交代だ。キミが打て」

「は？」

間の抜けた返事をする公平に目もくれず、凜は高らかに宣言する。

「選手交代！ バッターは日下部。主審は今から私が務める」

言うなり、凜はまっすぐに月杜高校の監督のもとへ向かった。つかつかと歩み寄り、二言、三言、話をする。

続いてきびすを返し、今度は東雲学園の監督のもとへ歩み寄った。ふたたびなにごとか話し、主審の立ち位置に帰ってくる。

月杜高校のベンチから伝令が出て、秀一とキャッチャーに何かを伝えた。そして、月杜高校のナインは守備位置につく。

試合再開の準備が整ってしまった。

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ、凜さん！」

「日下部。私の目は節穴ではないぞ」

あわてて声を上げようとした公平は、凜の強い光を持つ目に、思わず言葉をつまらされた。

「キミはいい目をしている。野球を見るときは特にそうだ。深く、断ち切れない愛着を持ってキミは野球を見ている。それが自分とはなんの関係もない、ただの少年野球であってもな」

凜の言葉が突き刺さる。透きとおって、それでいて底知れない強さを感じさせる漆黒の瞳。本気の凜の目は、うそやごまかしを許さない。

凜は、公平の野球への未練に気づいていたのだ。

「やるべきことをやりきらずにグラウンドを去ることは、私が許さない。キミも、キミを許さないはずだ。そして、彼もな」

意志のはっきりとした瞳は、公平からマウンドのほうへと動く。つられて公平が見た先には、公平の未練の象徴である人物が立っていた。

「秀一……」

一年前、野球から離れたように見せて、本当は止まっていただけの公平の時間。それをふたたび動かすきっかけは、今、公平の目の前にあった。

見えなくなったはずの秀一が、公平の前に立っている。

「……わかりました」

バットをにぎり、目を伏せ、もう一度開けて、公平は足を踏み出した。もう二度と入ることはないと思っていた四角い聖域。バッターボックスに、両足を踏み入れる。

「勝負だ、秀一」

「ああ、公平」

いつかとは、逆の立ち位置だ。秀一がマウンドで、公平が打席。しかし、公平はそのことに疑問を感じなかった。

同じグラウンドで、秀一と向き合う。戦う者として、彼の前に立つ。それは公平にとって自然で、疑問の入る余地などないことだった。

(そうだ。オレはもう一度、ここに立ちたかったんだ)

バットをかまえる。視線はもう、前しか見ていなかった。

「プレイボール！」

凜の声がひびき、秀一が投球モーションに入る。

(何球も見てきたんだ。振れ！)

白球がせまる。公平は両腕を振り抜いた。

ズバンッ！

「空振りだな。ストライクだ」

かすりもしなかった。

(は、速え……)

あらためて、公平は秀一の成長ぶりに目をみはった。

審判として見ていたときとは、まるでべつの球だ。そのときも速いと思ったが、それは公平に

向かってくる球ではなかった。

今はちがう。秀一の投げる球は、公平を倒すために飛んでくる。

(呑まれるな。呑まれたらそこで負けだ)

二球目。高い。見逃す。

「ボールだ」

三球目。今度は低い。出かかったバットを必死に止める。

「ボールだ」

公平はいったん、バッテリーボックスから出た。

(ツーストライク、ツーボールか)

自打球で退場した選手の代打なので、公平のカウントは自打球のファールを含めたワンストライクからはじまっている。

次の一球がストライクなら、もちろん三振だ。ボールなら、フォアボールの可能性が出てくる。

(ボール球は投げられねえ)

秀一なら、次で勝負に来る。公平でもそうする。

ボックスに戻る。公平がかまえ、秀一がモーションに入った。

白球が放たれ、糸を引くようにせまる。その軌道に、公平は呑まれた。

(うっ！)

ストライクゾーンぎりぎり、ここしかないというコースだ。ボールかストライクか、公平は一瞬、迷ってしまった。

その一瞬の迷いで、このコースへの一球には反応できなくなる。

パアンッ！

乾いた音を立てて、ボールはミットに収まった。公平のバットは動かない。迷ってしまった一瞬が、痛恨の一瞬だった。

(しまった……)

「ストライクだ」

凜が冷静に告げる。公平の身体から力が抜けた。

終わった。くやしい。負けたことよりも、最後にバットが出なかったことが悔やまれた。

せめて全力で振っていれば、まだ晴れやかな気分になれたというのに。

だが、後の祭りだ。どうしようもない。肩を落としたまま、公平はバッテリーボックスを出た。

「何をしている。勝手に帰るな」

凜が呼び止める。公平は力なく言った。

「三振しましたよ、オレ」

「三振とは三回空振りすることだろう。キミはまだ一回しか振っていないぞ」

当然のように凜が答える。その声に公平は違和感を覚え、ついで、背筋に悪寒が走った。

凜の目は真剣そのものだ。なんの疑いもなく、こう言っている。この目を、公平は何度も見た。そして、そのたびに言葉を失ってきた。

ルールがわかっていないときの凜の目だ。

凜は、「三振」のルールを知らないのだ。

「いや、ストライク三つで三振なんですよ！ さっき凜さん、ストライクって言ったでしょ？」

公平の声がはね上がる。凜は微動だにせず、はっきりと言い返した。

「言ったな。だが、そうだとすると、キミは二つしかストライクを取られていない」

「ワンストライクで打席に入っじゃないですか、オレ！」

「あのストライクは交代した選手のものだ。人のものを勝手に取るな」

「いや、だから……」

公平はめまいがしてきた。凜は一步もその場を動かない。秀一もチームメイトたちも、何が起こったのかわからない顔で硬直している。

「続行だ。私は今の一球で終わることは認めないぞ。野球にはこんな格言があるはずだな。『私がルールブックだ』」

「それは格言でもなんでもなくて、名言というか珍言として残ってるだけの言葉ですよ！」

かつて、プロ野球のある審判がきわどい判定に抗議されて、堂々と言い放った一言だ。たしかに威厳と含蓄のある言葉だが、ルール上はなんの拘束力もないし、今は関係すらない。

どうやって凜を言い含めようかと考えたとき、マウンドから声がかかった。

「続けていいんですか、審判」

秀一が、まっすぐにこちらを見ていた。

「公平。今のはボールだ。お前があのとき投げた一球より、外にはずれた。あれがボールだったんだから、今のもボールだ」

それは、公平と秀一にしかわからない言葉だった。

あのとき投げた一球。公平が投げた一球。秀一が打ち砕いたのではなく、その直前に投げた一球のことだ。

公平の中に傷を残したあのボールは、秀一にもわだかまりを与えていた。

「だから、俺にももう一球、投げさせてくれ」

秀一の頼みに、公平はしばらくの間、沈黙した。

「いいんですね、凜さん」

「ああ。主審は私だ」

お墨つきが出た。公平はバットをにぎりなおし、素振りをする。秀一はマウンド上で精神集中をはじめ、月杜高校のナインはもう一度、守備位置に戻った。

今度こそ、最後の一球になる。

「日下部」

バッターボックスに向かいかけた公平を、凜が呼び止めた。いつものように涼しげで、おだやかな風のような声だった。

「私は野球のルールには明るくない。だから、先に言っておくぞ。キミがもう一度空振りをすれば、キミは三振。我が校の負けだ。だが」

そう言って、凜はマウンドの秀一に指を向けた。

いや、正確にはちがう。秀一のさらに、ずっと向こう。彼女が指したのは、野球部グラウンドの一番奥まった場所だった。

「だが、キミが打って、打球があのフェンスを越えれば、ホームランで勝ちだ。それは知っている」

最後に、凜は公平に向き直って言った。

「そして、それ以外の結果になったらどうなるか、私は知らない」

一瞬、呆気にとられた公平に、凜はいたずらっぽく笑ってみせた。公平もつられて笑う。

「そいつは責任重大ですね」

「そうだな」

ふっと、凜の口元がゆるむ。

「だが、キミは責任を投げ出すような男ではないはずだ。私の目が節穴でなければな」
言ってくれた。

「.....わかりました」

苦笑交じりに公平は応じた。凜は満足そうにうなずき、キャッチャーの後ろに立つ。

公平はバットを持って、秀一に向かい合った。

秀一の足が上がる。腕がしなり、白球が公平に向かって飛び込んでくる。

公平は懇親の力を込めて、両腕を思い切り振り抜いた。

解 説

ここでは本誌掲載六作のそれぞれについて解説する。第一号であり、またテーマが「出会い」ということから全作品が序章的展開になったが、その中でいかにお約束化していない新鮮な「出会い」を描くかに全作家が注力している。そこを読み比べてほしい。

『きみの花飾り』入江棗

猫を被って世間をやり過ごしてきた少女と、それに気づいて猫を剥がしにかかる（わりとDSの）少年の出会いから始まる物語。性に合わない「生徒会長」という大役を押し付けられた彼女は——。津田雅美『彼氏彼女の事情』序盤を髣髴とさせるような、今となってはそれなりに手垢のついた設定ながら、爽やかで瑞々しい印象を受けるのは、揺れ動く少女の心情が一人称でしっかり描かれているからだろうか。

『人形姫と泥棒悪魔』貴水玲

数奇な生まれがゆえに感情に乏しく、それゆえに「人形姫」と呼ばれた少女。彼女の前に現れたのは、「盗む」ことで飢えを満たす悪魔。二人の出会いが少女にもたらすものとは——？ これぞファンタジー——ゲーム風の「剣と魔法」ではなく、神話・伝承の影響を強く受けた「幻想」のほう——という、独特の雰囲気じっくり浸ってほしい作品。二人の主人公それぞれの設定がまたこの雰囲気にはまっていて、「出会い」の先が気になる。

『世話焼き魔—メイド』番棚葵

記憶を失った少年の前に突如現れた「メイドさん」、しかも彼女はクラスメイト！ 過剰すぎる世話焼きに困惑する彼をさらに襲う驚愕の展開と真実とは？ 集英社スーパーダッシュ文庫の『生徒会ば—さす』をはじめ、コミカルな作品を得意とする著者ならではのインパクトの強いジェットコースター的展開がいかにも楽しい。男なら誰でも一度は夢見る（言い過ぎか？）「メイドさんの世話焼き」展開をひっくり返しているあたりにも、著者ならではのうまさを感じる。

『王子と私とご主人様』広野未沙

魔法使いに憧れる召使いの少女の魔法練習は、才能があるはずなのになぜかうまくいかない。そんなある日、少女の前にいきなり落ちてきた少年曰く、彼は魔界の王子なのだとか——!？ 少女と王子と少女の主人の三人が繰り広げる、それぞれにちょっと「ズレ」ておかしい掛け合いがいかにも楽しい。「出会い」が面白くなるかどうかは互いのキャラクター性次第、というのがよくわかる作品である。

『くるくる』水島朱音

社会人一年目を目前にした青年が見つけた一冊の返し忘れの本、その結果として彼が会うことになった「あるはずのない本」。それが彼らの高校時代——図書部をめぐる因縁を再び紐解くきっかけとなる。本作は掲載作品の中で唯一、完全な「続き物」になっている。図書部の面々にいったい何があったのか？ 「あるはずのない本」に隠された秘密とは？ 今後への興味をぐっと引くだけの力を持った作品。

『審判部な面々』 諸星崇

中学時代、怪我で野球をあきらめなければならなかった少年。マンモス高校で彼を待ち受けていたのは、謎の部活「審判部」をしきる少女との出会いだった。とにかくあらゆる競技で審判を務めることを主目的としたクラブ——「審判部」というアイデアが白眉。字面だけで興味が引けるし、いくらでもバリエーションある物語展開が可能だ。もちろん、ただの奇抜で終わらず、きちんと物語の中に生きているのは著者の力量があってこそ。

榎本秋

奥付

2010年9月30日 発行

著 者 入江棗／貴水玲／番棚葵／広野美沙／水島朱音／諸星崇

企画・監修 榎本秋

発 行 所 株式会社榎本事務所
〒179-0076
東京都練馬区土支田1-29-12 ファミール光が丘102
電話 03-6750-6341

表 紙 ヒトエ（AMG出版工房）

イラスト 新月竜、雛咲瑠遮、伊藤由希（すべてAMG出版工房）

協 力 脇功一、三浦奈緒
（アミューズメントメディア総合学院大阪校キャラクターデザイン学科）

本マガジンは、榎本事務所HPで配布しているPDFファイルを改変しないことを条件に配布、複製は自由とする。ただし、有償での配布は印刷も含めて不許可とする。